日本武道学会第54回大会
（オンライン開催）
研究発表抄録

期　日　令和３年９月６日（月）～９月12日（日）

主　催　日本武道学会　本部

日　本　武　道　学　会

Japanese Academy of Budo

ご挨拶

日本武道学会会長　大保木　輝雄

第54回大会はコロナ禍のため昨年に引き続きオンライン開催（本部開催）となりました。2021年度を迎えてなお続く厳しい状況下にもかかわらず、前回より7題増の73題の発表がなされます。先生方の研究への取り組みに敬意を表します。

昨年同様評議員会・総会等もオンラインで開催されます。会員の皆様には奮ってご参会下さいますようお願い申し上げます。

本年度の本部企画は特別講演となりました。1964年に開催された東京オリンピックでは柔道が正式種目となり、今回の「2020」大会では空手が採用されました。そのことを踏まえ、世界空手連盟事務総長の奈藏稔久先生にそれらの経緯や競技の在り方などの講演をお願いいたしました。オリンピック参加のための準備で超ご多忙な時期にもかかわらずお引き受け下さいましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

今回も専門分科会企画は各分科会の日程が重なることなく実施されます。また、空手道と弓道の分科会は「空手道・弓道におけるICT活用の新たな試みと将来展望」というテーマのもとに共同で開催されます。要項には、コロナ禍におけるICT（情報通信技術）活用の紹介とその評価や課題を提示しつつ、様々な情報と知見を共有しながらポストコロナを見据えた武道の在り方について将来的に展望し、研究の新たな視点を提供すると謳われています。他の分科会企画でも他領域を視野に入れた企画となっています。各要項をご参照の上、関係種目はもちろんのこと、それらの共同フォーラムにもぜひご参会ください。

いつでも、どこでも、手軽にスピーディーにコミュニケーションが取れるICTの活用は、すでに多くの先生方が関わっておられる教育・研究の世界で取り組んでおられることもあってか、昨年よりも一層洗練されたシステムとして構築されつつあります。このことは節目となる次年度55回大会開催への道も自ずと開くことになるでしょう。

1968年（昭和43）の設立当初から本学会に課せられた使命は「武道とは何か、武道学とは何か」という問いに答えることでした。皆様ご承知のように、「武道」には二回の危機がありました。最初は明治維新、二回目は敗戦後まもなくGHQの占領下にあった時代でした。そのいずれの時代も人間教育やスポーツのコンセプトでの再定義によって武道は普及発展を遂げ、現在に至っています。

1964年の東京オリンピックでは日本武道館が設立され、本会設立と同年の1968年、日本の国民総生産は当時の西ドイツを抜き世界第2位となりました。1970年代のアメリカでは武蔵の『五輪書』を日本の奇跡的な経済復興の原動力と見なしました。その翻訳本は経営哲学の書としても注目され当時のベストセラーになったとも言われます。1980年代になると、世界的な傾向として現代科学の見直しと東洋の文化と伝統に注目される機運が芽生え、人間の潜在能力や身心相関について新しい見方が生まれ、現象学や身体論への関心が高まってきました。国内では源了圓『型』（1989）や湯浅泰雄『身体論－東洋的身心論と現代』（1990）などが出版され、1991年には「身体・気・意識・霊性」などを学際的に研究する人体科学会も設立されました。今やかつての様な偏見もなく武道への関心が高くなっています。

以上の流れからも、本大会はICT活用を射程距離に入れ、世界における武道の行く末と日本の果たす役割を武道の競技化に加え、「型」の観点からも議論する好機となります。

最悪の状況を素直に受け入れ、それを生き抜くエネルギーに転化させる叡智こそが武道を貫く精神だとするならば、この大会は新たな武道文化を生み出す絶好の機会となるでしょう。

参加者の皆様へ

講演・発表の資料・動画等は、2021 年 9 月 6 日（月）～ 9 月 12 日（日）の期間において、当学会ホームページ特設サイトにて公開します。会期中は、本部企画特別講演の配信と一般研究発表の視聴閲覧、各発表に対してメッセージ形式での意見・質問の投稿ができます（質疑応答期間は 9 月 10 日（金）と 11 日（土）の 2 日間）。意見・質問は、発表に対して良識ある建設的な内容としていただき、くれぐれも個人等を誹謗中傷する内容にならないようご注意ください。

一般研究発表者の方、聴講のみの参加者の方は事前登録をお願い致します。大会参加費を予め 8 月 25 日（火）までに納めていただきますようお願いいたします。大会参加費は一般会員、大学院生会員、学部生会員とも一律 2,000 円です。参加費を納入いただいた方は、大会の特設サイトへログインすることができます。ログイン情報は参加登録時のメールアドレスおよび設定パスワードになりますので、公開時期まで大切に保管をお願いいたします。なお、令和 3 年度の年度会費未納の方は、大会参加費と併せて納めて頂きますようお願いいたします。

インターネットを活用したオンライン講演会となりますので、視聴閲覧できる環境は各自でご手配ください。

大会参加費、大会参加手続きに関するお問い合わせ：

日本武道学会事務局　budogaku@xj8.so-net.ne.jp

座長の皆様へ

日本武道学会第 54 回大会は、一般演題発表に座長を配置いたしました。オンライン開催ですので、対面式とは異なり、日時の指定や担当セッションの管理等、時間的制約・拘束はございませんが、以下の点を座長の業務内容と致しますのでご協力ください。

1. 担当される演題の発表資料・動画は、ご都合のよろしい時間に、必ずご覧ください（9 月 6 日（月）から全ての演題の資料･動画が視聴できます）。

2. 9 月 10 日（金）、11 日（土）の質疑応答期間は、ご都合のよろしい時間に、担当される演題の質疑応答状況をご確認ください。

3. 担当される演題には、少なくとも一つ、質問をお願いいたします。

4. 万が一、質疑応答の場が混乱した際は、介入して仲裁役をお願いいたします。

発表者の皆様へ

1. 発表資料、および動画作成方法等の案内

発表資料、および動画作成方法等は、大会特設サイトにてご案内をします。また、発表者の皆様には、関連情報をメールにてお送りさせていただく場合もございますのでご確認ください。

2. 発表データ（資料・動画等）のアップロード期限

発表データ(資料･動画等)は8月25日(水)までに特設サイトに必ずアップロードしてください。

3. 発表後のデータの取り使い

大会会期終了後、サーバへ登録された全てのデータは事務局にて責任を持って消去いたします。

4. 発表証明書について

発表証明書の必要な方は、当会事務局 budogaku@xj8.so-net.ne.jp あてにお申し込みください。その際、提出先の「機関名・機関長名」を必ずご記入ください。大会会期終了後に、電子媒体（pdf）にて証明書をお送りします。

一般研究発表

人文・社会科学系

演題番号	演　　題	発表者	所　属	座　長
A-1	1910年代沖縄の青年教育における空手の位置づけ	阿部　暁之	北海道大学大学院	井下　佳織（麗澤大学）
A-2	空手道の形における構成と技法の研究	南　　宗和	京都大学生存圏研究所 生活圏木質構造科学分野	
A-3	柔道授業が精神に及ぼす影響 ―養成学校生に対する認識調査を基にして―	福井悠紀子	平成医療学園専門学校	小崎　亮輔（鹿屋体育大学）
A-4	知的障害者に対して柔道が及ぼす社会的・精神的・身体的な影響に関する定性調査―スペシャルオリンピックス日本・広島柔道プログラムを対象として―	中村　和裕	学校法人福山大学	
A-5	昭和初期における柔術の医療術に関する調査 ―接骨術の一般化に着目して―	丸澤　遼子	日本体育大学大学院 保健医療学研究科博士課程	稲川　郁子（日本体育大学）
A-6	日本における柔道初段の昇段方法および昇段審査の実態に関する研究 ―試合成績・修行年限・形・筆記試験の審査に着目して―	早川　太啓	中京大学	
A-7	嘉納治五郎師範の柔道原則の歴史的な背景及び原因	Gatling Lance	嘉納歴代 The Kanô Chronicles®	有山　篤利（追手門学院大学）
A-8	柔道の教育的価値の変遷について：その文化性と現在性を巡って	佐藤　雄哉	国士舘大学	
A-9	講道館で制定された形の比較研究：1940年と1956年に着目して	工藤　龍太	早稲田大学スポーツ科学学術院	中嶋　哲也（茨城大学）
A-10	原典的文献の読解による「柔の形」の間合いに関する研究	稲川　郁子	日本体育大学	
A-11	ドイツにおける生涯スポーツとしての柔道の捉え方に関する研究：中高年の対象者へのアプローチを中心に	Sori Doval Maja	津田塾大学	
A-12	「武道」の英訳をめぐる諸課題について	長尾　　進	明治大学 国際日本学部	アレキサンダー・ベネット（関西大学）
A-13	東欧における武道の教育力に関する研究	酒井　利信	筑波大学	
A-14	近代中国における日本武道の受容とその影響	劉　　暢	早稲田大学スポーツ科学学術院	
A-15	天保３年の大石進種次の動向について	森本　邦生	貫汪館	菊本　智之（常葉大学）
A-16	寛政改革と在村剣術―馬庭念流の江戸進出―	数馬　広二	工学院大学教育推進機構保健体育科	
A-17	近代における弓道概念の形成に関する一考察：弓射の意義・目的の変遷に着目して	五賀　友継	国際武道大学	松尾　牧則（筑波大学）
A-18	伊達藩の日置流印西派	黒須　　憲	東北学院大学	

A-19	武術における小太刀の意義に関する研究	中山　竜一	明治大学大学院 国際日本学研究科	大石　純子 （筑波大学）
A-20	細川家文書『新陰流兵法書』の江戸柳生における位置付け：『五巻書』との比較を通じて	中嶋　哲也	茨城大学教育学部	
A-21	近世剣術伝書にみられる言語表現に関する一考察 ―比喩・擬音・擬態表現を中心に―	軽米　克尊	天理大学体育学部	
A-22	大日本武徳会における渡辺昇に関する一考察	筒井　雄大	国際武道大学	小田　佳子 （金沢大学）
A-23	近代における武士道思想に関する一考察 ―井上哲次郎に着目して―	堀川　　峻	筑波大学大学院	
A-24	近代期武道関連思想に「女性」が及ぼした影響：「女學雑誌」の分析から	大石　純子	筑波大学体育系	
A-25	古流武術「竹内三統流」について ―流儀創始の背景・目的・成果に関する考察―	河野　敏博	新風館	軽米　克尊 （天理大学）
A-26	知られざる琉球の武術史（麻氏又吉真光）	早坂　義文	古武道研究会	

一般研究発表

自然科学系

演題番号	演　　題	発表者	所　属	座　長
B-1	Similarities between karate blocking techniques (受け - uke) and Proprioceptive Neuromuscular Facilitation (PNF) patterns – comparative analysis	Mosler Dariusz	Jan Dlugosz University of Czestochowa, Poland	松井完太郎 (国際武道大学)
B-2	弓道において矢の材質・羽根の向きの違いが矢の着点に与える影響	原田　隆次	国際武道大学	
B-3	剣道初心者における気剣体不一致な打突動作に影響を与える要因の検討	椿　　武	神戸親和女子大学	齋藤　　実 (専修大学)
B-4	剣道稽古中のマスク着用が学生剣道選手の経皮的動脈血酸素飽和度に与える影響	川井　良介	日本大学文理学部	
B-5	学生柔道選手における健康状態に関する研究 ―糖尿病発症リスクからの検討―	松田　悠佑	皇學館大学大学院	藤田　英二 (鹿屋体育大学)
B-6	男子大学生柔道競技者における減量時の血液・尿データ変動の分析	金持　拓身	桐朋中・高等学校	
B-7	高藤式肩車の kinematics 的技術分析	伊藤　悦輝	早稲田大学大学院スポーツ科学研究科	曽我部晋哉 (甲南大学)
B-8	H反射法による柔道選手の構えのメカニズムの解析	長谷川公輝	早稲田大学大学院スポーツ科学研究科	
B-9	異なる襟幅を用いた少年柔道競技者の背負投動作 ―釣手と受に着目して―	山本　幸紀	筑波大学大学院	
B-10	柔道における礼法に関する研究	佐藤　武尊	皇學館大学	佐藤伸一郎 (拓殖大学)
B-11	対人競技におけるレイティングを用いた競技力評価法の開発	石井　孝法	了德寺大学	
B-12	聴覚障がい柔道日本代表選手の練習環境における障壁の検討	瀬川　　洋	広島国際大学	

一般研究発表

武道指導法系

演題番号	演　　題	発表者	所　属	座　長
C-1	知的障害特別支援学校の体育授業における「空手道」の実践	清野　宏樹	北海道釧路養護学校 北海道大学大学院教育学院博士後期課程	大橋　正康 (障害者武道協会)
C-2	柔道療育の有効性の検討 ―自閉スペクトラム症の児童を対象として―	小崎　亮輔	鹿屋体育大学 スポーツ・武道実践科学系	
C-3	脳性麻痺と闘う剣道愛好家への指導を通して見える武道の可能性～競争社会から共創社会へ～　その３	三苫　保久	滋賀県立大津清陵高等学校	
C-4	体落としのバイオメカニクス的解析 ―柔道初級者の効果的な指導法の確立―	楢﨑　教子	福岡教育大学	佐藤　武尊 (皇學館大学)
C-5	柔道における身体的「バネ」の特徴～内股を用いた比較～	大嶋　悠正	筑波大学 人間総合科学研究群	
C-6	柔道の攻防を学ぶ学習プログラムの提案	有山　篤利	追手門学院大学	前川　直也 (国際武道大学)
C-7	柔道における「相性」に関する意識調査	光田　隆哉	筑波大学大学院	
C-8	大学女子柔道選手における稽古中の傷害発生と心理的コンディション	川戸　湧也	仙台大学	
C-9	武道の授業前後におけるライフスキルの変化	高坂　正治	国際武道大学	有田　祐二 (筑波大学)
C-10	中学校保健体育科「武道」領域における「かた」学習プログラムの開発に関する研究	菊本　智之	常葉大学	
C-11	学校における空手道授業の指導成果と課題	井下　佳織	麗澤大学	

一般研究発表

ポスター発表

演題番号	演　　題	発表者	所　属	座　長
P-1	空手道競技「団体形」研究の可能性について	大嶋　利佳	法政大学大学院人文科学研究科	三村由紀（防衛大学校）
P-2	剣道経験が人間形成に及ぼす影響（その２）—剣道非継続者と保護者の質的調査からの検討—	天野　　聡	東海大学	小澤　　聡（常盤大学）
P-3	剣道高段者における剣道の実践と人間形成の関係（その２）	笹木　春光	東海大学	
P-4	剣道実践者の人間形成と Well - being に関する研究—継続による専門志向化からの分析—	山本　聖樹	東海大学大学院体育学研究科	
P-5	剣道指導における言語コミュニケーションに関する質的研究	白須　鉄也	東海大学大学院体育学研究科	竹中健太郎（鹿屋体育大学）
P-6	剣道実践者における用具選択に関する研究　～剣道専門雑誌におけるドキュメント分析より～	鶴見　健太	東海大学大学院体育学研究科	
P-7	中津藩中西家古文書における一刀流伝書について—小野家伝書との比較研究—	立木　幸敏	国際武道大学	加藤　純一（皇學館大学）
P-8	世界武芸マスターシップ（World Martial Arts Mastership）を検証する	朴　　周鳳	駿河台大学	
P-9	柔道競技にける歯牙損傷について	塚田　真希	東海大学	松﨑　守利（下関市立大学）
P-10	柔道の大外刈りにおける体格差が受けの頭部加速度に与える影響	石川　美久	大阪教育大学	
P-11	視覚障害者柔道における試合分析—競技力向上を目的として—	下山　智大	広島大学大学院人間社会科学研究科	中村　　勇（鹿屋体育大学）
P-12	柔道競技におけるスコアの獲得に有効な投技の戦術行動	三宅　恵介	中京大学	
P-13	全柔連強化選手の世界選手権出場選手に関する UK 分析 1）～適性論から見た人柄型と精神健康度について	横山　喬之	摂南大学	林　　弘典（びわこ成蹊スポーツ大学）
P-14	全柔連強化選手の世界選手権出場者に関する UK 分析 2）～曲線理論から見た作業量段階と曲線傾向について	齋藤　正俊	神戸親和女子大学	
P-15	大学男子柔道選手を対象とした血流制限下における 4 方向ジャンプトレーニング効果の検討	大川　康隆	東海大学体育学部武道学科	久保田浩史（東京学芸大学）
P-16	回転ボックスジャンプトレーニングが大学柔道選手における内股の動作時間に及ぼす影響	濵口　和人	広島大学大学院人間社会科学研究科	
P-17	腕立伏臥腕屈伸運動のトレーニング強度に関する研究—開脚時と閉脚時の上半身にかかる負荷からの検討—	大木　雅人	皇學館大学	
P-18	小学生から大学生までの男子柔道選手における除脂肪量指数ならびに脂肪量指数と体重の関係	藤田　英二	鹿屋体育大学スポーツ生命科学系	

P-19	中学校保健体育科「剣道」授業において「剣道形」導入の可能性について～主体的・対話的な学び、安全教育を意識して～	太田　順康	大阪教育大学	下川　美佳 (鹿屋体育大学)
P-20	攻防に関する知識の構造化とその活用を図る中学校第2学年の剣道授業の評価分析：攻撃づくりシートの分析を通して	山田　弥香	福岡教育大学大学院	
P-21	コロナ禍における中高生の剣道に対する意識	山神　眞一	香川大学	
P-22	小学校低学年を対象とした柔道遊びの教材開発	與儀　幸朝	鹿児島大学	楢﨑　教子 (福岡教育大学)
P-23	精力善用・自他共栄評価尺度の作成に関する研究	石橋　剛士	熊本学園大学	

第 54 回大会本部企画
特別講演

空手道を通して武道の国際化を語る

奈藏稔久氏（世界空手連盟事務総長）

企画の趣旨

本学会では大会において本部企画として、特別講演や記念講演、基調講演およびシンポジウムを開催し、これまで「武道の国際化」や「中学校武道の必修化」等をテーマとして議論を重ねてきた。

2018 年度からは、複数年計画で「生涯武道」の問題を取り上げてきた。昨年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、世界的に武道を実践することが出来ない状況が続き、更に国際的に十分な議論をする場を設定することが難しい状況であったことからシンポジウムの開催は叶わなかったが、逆にこのような武道を取り巻く環境が危機的状況にある時だからこそ、大小様々な危機が間断なく訪れる人生のなかで、生涯にわたって武道を実践していく意味、そしてこういった時だからこそ発揮される武道の精神、心といったものを考える好機ととらえ、講道館の上村春樹館長をお迎えして「生涯武道」「コロナ禍」「国際化」「オリンピック」などをキーワードとしながら、「ピンチをチャンスに変える武道の心」というテーマでご講演いただいた。

本来であれば、本年度はこのシリーズを総括する意味も含めて国際化する武道界における生涯武道を議論する予定であったが、引き続きコロナ禍により当初予定通りの議論は難しい現状にある。しかし逆に、我々は世界的なコロナ禍の今だからこそ積極的に大きく現在の世界情勢を俯瞰しつつ自らの立ち位置を模索していきたいと考える。

折しも本年は、世界的なスポーツの祭典であるオリンピックが東京で開催され、かつ柔道につづいて空手が正式種目として採択され実施されるという、武道界において大変喜ばしい歳にあたる。そこで、経験豊富な国際人であり世界空手連盟事務総長としてまさに世界を股にかけてご活躍中の奈藏稔久様をお迎えし、特別講演として「空手道を通して武道の国際化を語る」というテーマで、世界の空手道を牽引しておられるご経験、オリンピック正式種目採択までの道程、競技として・伝統文化としての空手道・武道、生涯空手道・武道、コロナ禍における空手道・武道の現状とあり方、世界における空手道・武道の将来像と日本の役割、等々についてお話しをいただき、武道界がポストコロナに向けて新たな地平を切り開いていく活力を与えていただこうというのが本企画の趣旨である。

企画委員会：
酒井　利信（委員長），大石　純子（副委員長），アレキサンダー・ベネット，増地　克之，鷲見　勝博，松井完太郎，三村　由紀，軽米　克尊

柔道専門分科会企画

東京オリンピック柔道競技におけるコーチング・情報戦略

日 時：令和 3 年 9 月 9 日(木)18:00~19:30
開催方法：Zoom を用いたリアルタイムでのオンライン開催
テーマ：「東京オリンピック柔道競技におけるコーチング・情報戦略」
登壇者：井上康生（東海大学・全日本男子監督）
増地克之（筑波大学・全日本女子監督）
石井孝法（了徳寺大学・全日本柔道連盟強化委員会科学研究部）
ファシリテーター：
田村昌大（帝京科学大学・全日本柔道連盟強化委員会女子総務コーチ）
司　会：久保田浩史(東京学芸大学)

＜趣旨＞

2021 年東京にてオリンピック柔道競技が開催された。リオデジャネイロオリンピック終了後から新たな強化体制になり、さまざまな取り組みがなされてきた。その強化体制の指導計画・内容を男女監督および全日本柔道連盟強化委員会科学研究部サポート部門部門長から講演していただく。

ご登壇いただく 3 氏から、東京オリンピックにおける全日本強化現場の貴重な体験を伺うことで、改めてコーチングおよびコーチングにおける情報戦略の役割や重要性を考える場とする。

【参加方法について】

参加をご希望される方は、9 月 5 日(日)までに、下記の柔道専門分科会事務局久保田までご連絡ください。参加希望者多数の場合には人数を制限する場合がございます。

日本武道学会柔道専門分科会事務局 担当:久保田浩史(東京学芸大学)
E-mail : hkubota@u-gakugei.ac.jp

空手道・弓道専門分科会企画

空手道・弓道における ICT 活用の新たな試みと将来展望

2020 年 1 月以降、全世界で流行が拡大した新型コロナウイルス感染症は、2021 年 6 月時点で未だ終息の見通しが立っていない。武道界においては、大会、審査、講習会といった主要行事が中止あるいは延期となり、個人レベルでの稽古も制限される状況が継続している。

このように活動が大きく制限される状況下において、各武道種目においては、オンライン上での試合や講習会などの新たな試みによって、その活動を再開・継続しようとする取り組みが見られる。こうした取り組みは、コロナ禍においても一定の活動が継続できるといった利点があり、修錬者の励みとなるなどの効果があった。武道・スポーツにおける ICT 活用の加速化は、新型コロナウイルス感染症の流行沈静化以降も継続していくと考えられる。

そこで、本分科会企画は、空手道・弓道専門分科会での合同企画とし、各道における、コロナ禍における ICT 活用の試みを紹介すると共に、それに対する評価や課題などを提示する。そして、これらの情報及び知見を共有し、研究者間で議論を行い、空手道・弓道に留まらず、ポストコロナも見据えた武道の在り方や将来展望を考察し、研究の新たな視点を提供することを目的とする。

日　時　：令和 3 年 9 月 11 日（土）13：00～14：30
開催方法：Zoom を用いたリアルタイムでのオンライン開催
予　定　：　　司会　麓正樹（東京国際大学）
1. 開会挨拶　　弓道専門分科会代表：松尾牧則（筑波大学）
2. 空手道の現状と対応状況　岡﨑紀創（公益財団法人全日本空手道連盟）
3. 弓道の現状と対応状況　　五賀友継（国際武道大学）
4. 空手道における ICT 活用の新たな試みと課題
　　花田好浩（日本体育大学柏高等学校教諭）
5. 弓道における ICT 活用の新たな試みと課題
　　藤本秀夫（宇部フロンティア大学付属香川高等学校教諭）
6. 閉会挨拶　　空手道専門分科会副会長：飯出一秀（環太平洋大学）

参加方法について

空手道及び弓道専門分科会に所属されていない方で、参加をご希望される方は、9 月 6 日（月）までに、空手道あるいは弓道専門分科会事務局までご連絡ください。

日本武道学会空手道専門分科会事務局 担当：井下佳織（麗澤大学）
E-mail　：inoshita@reitaku-u.ac.jp
日本武道学会弓道専門分科会事務局　担当：五賀友継（国際武道大学）
E-mail　：budo.kyudo@gmail.com

剣道専門分科会企画　講演会

オンデマンド形式：令和２年９月６日（月）～12 日（日）動画公開

若手トップランナーの最先端研究に学ぶ
「自他共栄の科学を目指して：運動，武道，そしてｅスポーツへ」

講師　筑波大学体育系助教　松井 崇 氏

「精力善用自他共栄」。言うまでもなく、嘉納治五郎師範が提唱した極めて学際的といえる柔道の神髄である。哲学者ロラン･バルトは、「真の学際性は、１つのテーマを選びそのまわりに２、３の諸科学を集めるだけでは不十分で、どの学問領域にも属さない新しい対象を生み出すところにある」という。

私は二流柔道家としての競技生活を送った。競技につきものである疲労の正体を暴き、なんとか克服できないか。その思いひとつで学生時代から動物実験に取り組み、ポスドク時代に細胞実験を取り入れ、今はそこに進化生物学的視点も盛り込みながら、運動疲労要因としての脳グリコーゲンの役割とそれを踏まえた疲労予防策を究明する「スポーツ神経生物学」を進めている。これは「精力善用の科学」であるといえよう。

現職では新たに、柔道のハイパフォーマンスに役立てようと「柔道生理学」を開始し、今は武道による共感性等の教育効果に生化学で迫る「自他共栄の科学」に挑戦中である。加えて、「バーチャルスポーツ」としてインクルーシブに取り組めるｅスポーツが柔道や武道の教育効果をどこまで再現するのかにも興味が尽きない。

神経科学の父であるラモニ･カハールは、脳細胞を顕微鏡で観察する傍ら、天体望遠鏡で宇宙の星々を見つめ、この世界と人間の構造と機能に思いを馳せたという。一見無関係なものになぜか惹かれる。そうしたところで学際性は生まれるのかもしれない。武道学並びに体育学には、昔も今もこれからも、学際的な挑戦の場であり続けて欲しい。

※　標記の期間に剣道専門分科会 HP（http://www.budo.ac/kendo/）に講演の動画を公開いたします．分科会会員の方には参加方法を別途お知らせいたします．

会員以外で聴講をご希望の方は，剣道専門分科会事務局（奥村：okumura@u-gakugei.ac.jp）へお問い合わせください．

なぎなた専門分科会　研究会

日 時 2021 年 9 月 4 日（土）15：00～17：15
場 所　zoom オンライン開催
（ホームページから申込いただいた方へ ID などを後日送付いたします）
第 1 部 15：05～16：05
演 題 ①「柔道形競技とその発展について」
講 師　横山　喬之先生（摂南大学）
内 容　講道館で規定されている柔道の形は「投の形」「固の形」「柔の形」「極の形」「講道館護身術」「五の形」「古式の形」の 7 種目である。日本国内では全種目が競技として行われ、世界選手権大会・アジア選手権大会では「五の形」「古式の形」を除いた 5 種目が行われている。柔道において形が競技化される以前は昇段審査、もしくは演武という形で行われるだけであったが、年齢や体力を超えて生涯柔道を確立するための一環として 1997 年より日本国内での形競技大会が開始された。審査方法については、5 人の審査員が減点方式で評価し、その最高点、最低点を除いた 3 人の採点の合計が点数となる。これは国内外問わず同様の方法が用いられている。さて、現在新型コロナウィルス感染症の影響により、全国大会、世界大会が中止となる中で、形競技大会もオンラインを用いた新たな試みがなされている。形競技といえどもニューノーマルな社会に適応する必要があり、このような取り組みによって多角的に普及・発展することを期待するとともに、柔道に限らず全武道の形競技の普及・発展のために今何ができるかを参加者の皆さんと議論できれば幸甚である。

第 2 部 16：15～17：15
演 題 ②「なぎなたの演技（形）競技について～採点形式に着目して～」
講 師　田中ひかる（近畿大学）
内 容　2020 年 COVID-19 の感染症によるパンデミックが起こり、多くのスポーツ大会が中止となった。同年 11 月に開催された西日本学生なぎなた選手権大会は初の試みとしてオンライン形式（演技の映像）を用いて採点形式の審査をおこなった。エントリー数は 66 名（12 大学）であり、公益財団法人全日本なぎなた連盟の審判規定の採点形式に準じて、5 名の公認審判員の資格を有する審査員が提出された映像を採点した。そこで、オンライン大会の実施方法や採点形式を用いた審査方法など、オンライン大会の新たな試みについて紹介する。そして、大会参加した 12 大学の代表者 10 名にアンケートを実施した結果、オンライン大会は参加者が安心して参加できる手段の一つとして有益な大会であることが示唆された。皆様と採点形式の多様性について検討していきたい。

障害者武道専門分科会企画　講演会

少林寺拳法で介護ができる
― 武道における技の原理は、障がい者介助の技術として応用できるのか ―

講　　演　　宗　昂馬（一般社団法人 SHORINJI KENPO UNITY 代表理事）
永安正樹（一般社団法人 SHORINJI KENPO UNITY マネージャー）

コーディネーター　　松井完太郎（国際武道大学）
高坂正治（国際武道大学）

日時：令和3年9月12日(日)10:00～11:30
場所：Zoom ウェビナー（下記から事前登録してください）
https://zoom.us/webinar/register/WN_FIVxAKOsSwathWpg2Pm7sw

日本の 2025 年問題、すなわち団塊の世代が 75 歳以上の後期高齢者になり、人口の 25%が後期高齢者という時代を迎えます。本専門分科会では、武道の研鑽で、障がい者が身体運動の幅を広げ、その QOL を高めることを目指して参りましたが、指導過程での介助技法はもちろん、それぞれの家庭において、被介護者と介護者が共倒れになるような状況を放置することはできません。

特に、介護する側が腰を痛める事例が多く、「No Lifting Policy」の下に先進国の介護施設を中心に移動介助機器の導入が進んでいます。しかし、特に家庭内にそのような器具が備わることを待つことはできません。

今年、一般社団法人 SHORINJI KENPO UNITY では、少林寺拳法を研鑽していなくても、少林寺拳法の技の理法を理解することで、介護者の腰に負担をかけることなく、体位交換・起こす・座らせることができるという解説書『少林寺拳法で介護ができる』を出版されました。同書の監修者の一人である小山政史 埼玉医科大学 副医学部長は、同書の内容を、「抱え、つかんで、持ち上げる」介護から「触れる、ひく、おす、まわす」介護へと転換させ、筋力、特に腰に負担をかけない介護を実現するものと評価なさっています。

今回は、著者である宗昂馬先生と、付属 DVD で技術実演をなさった永安正樹先生をお招きして御講演いただきます。これまでも、古武術の動きを活かした介護技法が紹介されてきましたし、今回、少林寺拳法が示された視点は、他の様々な武道にも通ずる内容を含んでいると想像します。

参加無料（一般の方も参加できます）事前に上記アドレスからご登録下さい。
開会時 10 分ほど頂いて障害者武道専門分科会総会を実施いたします。
ご不明な点は、左記松井までお問い合わせください。 kantaro@budo-u.ac.jp　090-2240-5394

A-1

1910 年代沖縄の青年教育における空手の位置づけ

○阿部暁之（北海道大学大学院）

【目的】琉球王国（現行行政区画上の沖縄県及び鹿児島県大島郡）で発祥した空手は、琉球処分以降の近代期（1879-1945 年）における技術的再構成や普及活動によって、全国的な認知を得ることとなった。こうした琉球処分以降の空手の動向は「近代化」と呼ばれ、空手史における画期の一つとされている。特に、発祥地として近代化の素地を形成した沖縄県を対象とした空手史研究については、小・中・師範学校を中心とした普通教育（学校教育）を介した普及をめぐる議論が活発であると言えよう。その一方で、青年会や実業補習学校など、当該期の青年教育を担った機関がどのように空手を眼差していたのかは十分に明らかにされていない。したがって、先の研究状況には、近代の沖縄社会で展開された「教育」と空手の連関について議論の余地が存在している。そこで、本研究では、近代沖縄教育史研究の中心的な資料の一つとして扱われる『沖縄教育』を用いることで、沖縄の青年教育における空手の位置づけを考察したい。

【方法】近代期に沖縄県下最大の教育団体として活動した沖縄県教育会が 1906-1944 年に刊行した機関誌『沖縄教育』を用いる。同誌は藤澤健一、近藤健一郎らによって 2009 年以降に復刻と配本がなされ、近代沖縄教育史研究において県内教員の同時代教育論分析の中心的な資料として扱われてきた。また、教育に限らず、同時代の社会を説明する重要な資料としても位置づく。そこで、同誌に認められる空手関連記述を全て抽出した後に、青年教育と関連付けられる記述に着目し、当該記述における空手像を分析する。

【結果および考察】青年教育機関が抱いた空手に対する認識や評価の分析を可能にする記事として、①「名護飛行記」（58 号、1911 年）、②「国頭郡青年会にて表彰せられたる字及び村」（99 号、1914 年）、③「本県に最も適切なる実業補習教育の方法如何」（105 号、1916 年）の計 3 つの記事が抽出された。①は、1911 年 1 月 14 日に国頭郡名護村で開催された教育部会の議事録である。青年会・婦女会の設立に先立って風俗矯正の議論があった同会において、空手は暴力的な側面を指摘されつつ、娯楽として「折衷」することが主張された。②は、国頭郡内に存在する青年会のうち、秀でた活動が認められた村の青年会を表彰したことを報じたものである。特に、金武村青年会では体育奨励の観点から空手を含めた武道を実施し、また、農村娯楽としても空手が演じられた。③は、當山正堅という沖縄県出身の教育者によって執筆された懸賞論文であり、小学校卒業後の青年を対象に実業教育を施す実業補習学校における教育方法論を論じたものである。同論文で空手は生徒らの関心を引くための手段として紹介され、具体的には出席を奨励する有効な方法としてみなされていた。

【結論】1910 年代沖縄の青年教育における空手は矯正すべき風俗として議論されつつも、体育奨励、娯楽、出席奨励の手段として社会受容が試みられた。これらは、普通教育（学校教育）への空手導入の主な論理となった体格向上に限定されない視点として指摘し得る。つまり、当該期は、社会や教育者が課題として認識していた点の克服を通じて、空手の多様な教育的機能や期待が模索された過渡期であった。

A-2

空手道の形における構成と技法の研究

○南　宗和（京大生存研）

【目的】空手道の形は、沖縄から本土に伝わりそれぞれの流派で錬磨研究され現在の姿に発展してきた。その変容は単なる伝聞の結果というより、それぞれの流派における表現の美学や技法の考え方、特に基本稽古の影響を受けている。本研究では、①形を特徴づける構成を研究するとともに、②沖縄の流派においての違い、そしてそれらが本土に伝わりどのように変容をしたのか、③それはどのような技法の違いによるものか、平安（ピンアン）初段から五段の形を分析することにより考察したい。

【方法】平安（ピンアン）は明治四十年頃に糸洲安恒が創作した型であり、随所に他の伝統型から引用した技法や共通する演武線により構成されている。成立の新しい形であるが、流派において異なる形に変容しており技法の研究をするに適している。本研究では「沖縄伝承型」として沖縄小林流と松林流、「本土発展形」として糸東流と松濤館流の形を用い比較を行う。形の構成は、最小単位の挙動ごとの「基本」、技としてまとまりがある単位として「手」、型の流れの中で節として区切られるものを「段」と区分する。

【結果および考察】糸洲が考案したピンアン初段から五段は、本土では平安と改称され、松濤館系統では初段と二段が入れ替わっている。形を構成する区切りである「段」は、一つの「手」の左右、あるいは複数の「手」により構成されており、ピンアン初段（5 段・8 手）、ピンアン二段（5 段・6 手）、ピンアン三段（4 段・5 手）、ピンアン四段（7 段・8 手）、ピンアン五段（5 段・9 手）に区分された。形の攻防の略線を表す演武線及び型の構成を表す「段」・「手」の構成区分を図 1 に示す。

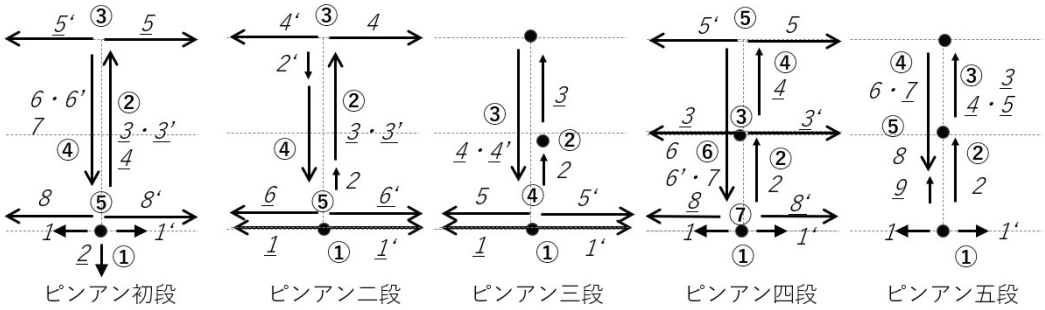


図 1　各形の構成　演武線と段・手　（○枠：段、*数字*：手、*数字*：伝統型引用の手）

【結論】沖縄伝承の型（沖縄小林流・松林流）、本土発展の形（糸東流・松濤館流）とも構成は同じであるが、その技法の内容は異なっている。各流派の基本の違いや継承する伝承型との関連が大きいと考えられる。特に松濤館流においては技法の解釈も含め独自の発展を遂げている。

A-3

柔道授業が精神に及ぼす影響

― 養成学校生に対する認識調査を基にして ―

○福井悠紀子（平成医療学園専門学校、宝塚医療大学），
久保山和彦（日本体育大学）

【目的】明治期において柔術は衰退し、その多くの柔術は柔道に引き継がれようとしていた。その中で、従来から接骨術を生業としてきた柔術道場主らが中心となり、「期成会」という接骨術公認活動が興り、柔術の担い手による接骨術の再興が図られ、大正 9(1920)年柔道が冠された柔道整復が誕生した。創成期の柔道整復と柔道の関係は、接骨術と天神真楊流柔術との関係と極めて類似しており、柔術の担い手らは武道と医療の要素を併せ持つこととなったのである。

しかし近年、柔道整復師養成施設を取り巻く環境が変化し、柔道整復師になるために柔道を行うことの意義が柔道授業において伝わり難い現状にある。ゆえに、柔道整復と柔道の距離が開いているのである。

そこで柔道整復養成校での柔道授業を通じて得られる精神的影響を調査することにより、医療人となる学生の柔道観を調査し、柔道教育の位置づけを検討する。

【方法】H 専門学校 J 学科に在籍する学生を対象に無記名アンケート調査を実施した。調査は 2019 年 1 年次(45 名)、2020 年 2 年次（33 名)、2021 年 3 年次（35 名）の計 3 回実施した。質問内容は「柔道授業によって向上すると考えられる精神」に関する項目を 10 項目設けた。また、回答形式を[感じている]、[どちらともいえない]、[感じていない]などとし、調査期間中に全質問に回答したものを有効とした。

【結果と考察】アンケート結果は、単純集計を用い分析した。

1 年次では柔道授業が精神的影響を感じられた学生は、全項目の平均 44.0%であり、2 年次は 49.7%、3 年次は 54.2%であり、学年が上がるごとに[感じている]と答える者が増え、柔道授業による精神的影響を認識する学生が増加していた。

【結論】柔道整復養成学校において柔道を 3 年間継続的に行うことは、精神的影響を与える教材として学生教育に展開されていることが示唆された。

A-4

知的障害者に対して柔道が及ぼす社会的・精神的・身体的な影響に関する定性調査―スペシャルオリンピックス日本・広島柔道プログラムを対象として―

○中村和裕（福山大学）

【目的】知的障害者に対して柔道はいかなる貢献ができ、また種々ある運動療法や療育の中において柔道の独自性とは如何なるものであるか、この視点が本研究における根幹をなす動機である。しかし上記に対して本研究ですべてが網羅できるとは考えてはいないが、柔道未経験の知的障害者らに対して柔道を一定期間実施した事例に、社会科学的な側面から評価することは可能であり、帰納的な手順によりその事例から知的障害者に対する柔道の影響に関する一端を示せることと判断した。本研究では調査対象者への全数調査がおおよそ可能であるが一般化するほどのサンプル数ではない、これらを勘案し定性的手法による調査分析を実施した。

【方法】調査対象は、2020 年 9 月 4 日からおおよそ隔週で 11 月 29 日まで計 8 回実施したスペシャルオリンピックス日本・広島柔道プログラム（以下プログラムと記す）に初めて参加した知的障害者である。プログラムは 1 回 2 時間程度である。調査内容として、田引（2015）での調査法を援用し、プログラムに参加したことによる、社会的・精神的・身体的な変化について記述による質問紙調査を、2020 年 11 月 13 日プログラム開始前にインフォームドコンセントを行い対象者の保護者 8 名に対して実施した。分析手法として人間行動のような高度に複雑な現象を取り扱う領域において使用される質的帰納的分析を採用した。分析手順として、それぞれの質問に対する記述を熟読し内容の類似したものを集め言葉を簡素にコード化する。その意味内容に標題をつけサブカテゴリーとする。

【結果および考察】社会的な影響のサブカテゴリーとして、「協調性の向上」「規律の遵守」「洞察・観察力の向上」「楽しさの享受」が抽出された。精神的な影響のサブカテゴリーとして、「楽しさの享受」「挑戦心の向上」「達成感の享受」が抽出された。身体的な影響のサブカテゴリーとして、「運動環境の充実」「体力と体幹の向上」「他競技にはない動作」「やる気と継続力の向上」が抽出された。上記のサブカテゴリー抽出の要因としてプログラムでは、競技柔道的な指導内容ではなく、柔道の特徴を活かしながら楽しく飽きないよう様々な動作を取り入れ、知的障害者も健常者も同じ内容で実施し、プログラム最終回では序盤で設定した参加者個人の目標披露の場を作っている。また柔道という規則の元、役割演技法的に場に融和され、礼などの所作や組みにおける普段にはない人との距離を抵抗なく受け入れたことと考えられる。

【参考文献】田引俊和ら：知的障害者スポーツの効果・影響に関する検討. 北陸大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要, 第 8 号, p267-272, 2015

A-5

昭和初期における柔術の医療術に関する調査
- 接骨術の一般化に着目して -

丸澤遼子（日本体育大学大学院）、久保山和彦（日本体育大学）

【目的】

明治期、柔術者が用いた医療術には「接骨術」があった。接骨術は骨折や脱臼・捻挫などに対する治療法である為、柔術道場において門弟を中心に展開されてきた。

大正期には、武道における柔術から柔道への変革期と重なるようにして、「接骨術」から「柔道整復術(大正 9 年成立)」へと引き継がれていった。

接骨術の一般化の始まりは、その頃の柔道整復術の担い手の養成方法に変化が見られたことによる。つまり、柔道経験と接骨術の臨床研修(4 年)をいずれも積んだ上で、都道府県単位で行われていた試験により資格を取得していた。ゆえに、柔道者に限定された医療術として、その養成は柔道の師弟関係に基づいていたといえよう。

本研究においては、柔道整復術の成立を端緒として始まった接骨術講習会の普及事例を踏まえた上で、養成学校の設立を機に加速していく接骨術の一般化の過程を明らかにする。

【方法】

以下の調査により、昭和初期における柔道整復術が一般化していく過程を分析する。また、第二次世界大戦後における柔道と柔道整復術との分水嶺を見極める。

①大正期、接骨術講習会の動向を調査する。(第 53 回日本武道学会口頭発表)

②昭和 7(1932)年設立の大阪接骨学校のカリキュラム及び設立者の言説を調査分析する。

③第二次世界大戦以降における柔道整復養成学校の設立状況に関する調査。

【結果】

①大正 15 年頃に始まった柔道整復術講習会は、柔道整復術は怪我の治療を非観血的に行う医療術であると認識されていた。また、講習会に集まったのは、柔術や柔道の師弟関係に限定されていた。②大阪接骨学校のカリキュラムや設立者の言説を調査すると、和漢医学の否定、整形外科学理論の基礎となる西洋医学理論の導入が盛んに図られていた。担い手となる柔道整復師を医療人と位置づけている。また、社会全般に貢献しうる医療技術体系の構築を視野に入れていた。③敗戦後、GHQ の施策により武道教育が禁止され、昭和 28 年まで学校で行われなくなった。しかし、柔道整復術の養成学校は昭和 22 年から設立する動きが始まり昭和 38 年までの間に 10 校が設立されている。つまり、GHQ は戦後、柔道に先んじて柔道整復術の展開を黙認し、柔道整復(bone-set)を医療術に位置づけたのである。

【結論】

養成学校が設立され、入学時における柔道の素養が必要となくなったことで、柔道の師弟関係に頼る技術伝承の系に揺らぎを生じた。また、戦後、GHQ の刺激は、武道と医療の分水嶺を形成することに繋がっていく。さらに、養成学校が一般に開かれたことにより、柔道からの距離が増した。これは、接骨術の担い手らの意思により、推し進められていた。

その後、各地に養成学校が成立していく過程において、初めて設立された養成学校（大阪接骨学校）のカリキュラムが採用され、西洋医学理論と臨床実習が教材として盛んに行われるようになった。

昭和 45 年の単独法成立の頃には、柔道整復師の養成学校は全国に 14 校設立された。

柔術の医療術が一般化したのは、養成学校の教育課程の確立と普及により成されたといえよう。

A-6

日本における柔道初段の昇段方法および昇段審査の実態に関する研究
－ 試合成績・修行年限・形・筆記試験の審査に着目して －

○早川太啓(中京大学)、三宅恵介（中京大学)、來田享子（中京大学）

【目的】現在、柔道の段位制度は、「講道館昇段資格に関する内規」（以下「講道館内規」）によって定められている。講道館内規によると昇段審査は、試合成績、形の審査、修行年限によって審査され、筆記試験などを審査項目に加えることができると記されている。また、具体的な審査方法や項目については、講道館段位推薦委託団体（以下「委託団体」）に委託されている。現在の段位制度に対し、意識調査を行った光本ら（2003）は、昇段方法の改正、昇段料金の統一、段位の資格制度などに課題があるとした。しかしながら、各委託団体が実施している審査の方法や項目について、明らかにした先行研究や資料は確認できない。そこで本研究では、各委託団体が実施している初段の昇段方法および昇段審査について調査を行い、その実態を明らかにすることを目的とした。
【方法】調査対象は、全ての委託団体である 111 団体とした。調査方法は、調査票による郵送調査を原則とし、Google form を用いて Web 上からも回答を入力できるようにした。調査期間は 2020 年 6 月末から 2020 年 7 月末までとした。主な調査項目は、委託状況、受験条件、試合成績、形の審査、筆記試験、修行年限とした。本調査に対し、有効な回答は 59 団体であり、有効回答率は 53.6%であった。
【結果および考察】本研究の結果および考察では、試合成績と修行年限、形の審査、筆記試験に着目する。なお、講道館内規によれば試合成績と修行年限は密接な関係がるため、併せて述べることとする。
（1）試合成績と修行年限：昇段に必要となる試合成績の得点については、3 点が 16 団体（38.1%）と最も多かったが、最大が 13 点で、最小が 1 点であり、必要とされる競技力に違いがある状況が明らかになった。また、講道館内規には、試合成績と修行年限を併せて「可」、「良」、「優」の 3 段階に評価する基準が設けられているが、20 団体（55.5%）が「可」より低い基準で審査していることが明らかになった。
（2）形の審査：形の審査は、全ての委託団体で実施され、加えて 37 団体（77.2%）が講習会を開催していた。この結果は、形の審査は形修行のインセンティブとしての役割があるとした稲川ら（2003）の指摘を支持するものとなった。
（3）筆記試験：筆記試験を実施している委託団体は 11 団体（22.9%）であったが、その中で柔道の指導方法について出題している団体はみられなかった。この結果から、初段の取得は指導者としての能力を保障するのもではない、という従来の指摘の妥当性を確認することができた。
【結論】本調査から、昇段審査の基準には、委託団体によって違いがあるだけでなく、講道館内規とは異なる基準で審査されていることが明らかになった。現在の講道館内規に記されている仕組みは、昇段審査の運営上、自由度や利便性を確保することができる仕組みであるが、一方で、講道館が認定している初段の質に違いが生じている可能性が本調査の結果により示された。

A-7

嘉納治五郎師範の柔道原則の歴史的な背景及び原因

○ Lance Gatling, The Kanō Chronicles®
ガトリング・ランス，嘉納歴代　www.kanochronicles.com

【目的】柔道の創始者である嘉納治五郎（1860-1938）は、柔道のコア・フィロソフィー　として以下の用語を開発した。「精力善用・自他共栄」
しかし、その起源は明らかにされなかった。嘉納師範の柔道哲学の歴史的背景と哲学的基盤を明らかにする。

【方法】講道館や外部の出版物に掲載された嘉納師範の文章、同時代の嘉納師範の文章、様々な日本語や英語の分析など、日本語や英語の一次資料や二次資料を使って調査する。1877 年から 1922 年頃までの間に使用された、日本語と英語の哲学的、歴史的な文献を調査する。

【結果および考察】
1. 嘉納師範自身は、精力善用・自他共栄が自分の創作であるとは主張せず、実際の出典を名乗らなかった。
2. 嘉納師範は、日本初の倫理書「倫理書:中学校・師範学校教科用書」(1888)の文部省編纂委員であった。当時の文部大臣であった森有礼の個人的な友人であり、日本で人気のあった哲学者であるハーバート・スペンサー氏の哲学的概念に基づいたものであった。
3. 「倫理書」には、スペンサー氏の言葉である'The Cooperation of Self and Others'を翻訳した「自他並列」という概念が含まれていた。
4. 嘉納師範は、「自他並列」の代わりに「自他共栄」という言葉を採用した。
5. スペンサー氏の哲学は、功利主義とエネルギー主義（エネルギズム）に要約される。
6. エネルギー主義は、日本では「精力」という言葉で紹介された。
7. 嘉納師範の主要な教えは、功利主義とエネルギー主義に、主に道教と儒教といった中国の古典的な哲学的要素を加えたものである。

【結論】嘉納治五郎の柔道哲学「精力善用」「自他共栄」は、
主にハーバート・スペンサー氏の西欧の功利主義的な
エネルギー主義論をベースに、道教や儒教の要素を加えたものである。

1. Objective: Kanō Jigorō (1860-1938) developed the terms *Seiryoku zenyō / Jita kyōei* as core *jūdō* principles but never disclosed their origin(s). This study seeks to determine their historic background and philosophic basis.
2. Method:　...*omitted*....
3. Results and considerations:.....*omitted*.....
4. Conclusion: Kanō Jigorō's *jūdō* philosophies - *Seiryoku zenyō / Jita kyōei* – are primarily based on Herbert Spencer's Western utilitarian philosophy of *energism* with additional Taoist and Confucian elements.

A-8

柔道の教育的価値の変遷について：その文化性と現在性を巡って

○佐藤雄哉（国士舘大学）

【目的】

柔道は日本固有の文化としての価値を絶えず世界に発信しているが、その普及の過程においては、ローカル性とグローバル性を併存する文化としての成熟を求められている。そしてそれは、特にローカル性を重視する日本柔道に関わる者にとって、看過することのできない問題である。よってその歴史と文化性を捉え直し、時代や地域を超えて尚求められる普遍的価値を探求することは、日本柔道界にとって当面の課題といえよう。

本研究は、柔道の価値を教育的な視点から再評価することを目的とするが、それはローカル性とグローバル性を包含しつつも、さらなる発展を目指す柔道が内包する多様な価値を明らかにする試みでもある。

【方法】

以下の資料から示される嘉納治五郎の思想を一つの軸に、柔道の根底に流れつつも現代社会で求められる価値について、現代の教育観や体育理論から考察した。

・嘉納治五郎（1983）嘉納治五郎著作集 第一巻～第三巻，東京，五月書房.
・菊幸一 編（2014）現代スポーツは嘉納治五郎から何を学ぶのか，京都，ミネルヴァ書房.
・友添秀則 岡出美則 編（2005）教養としての体育原理，東京，大修館書店.

【結果および考察】

柔道は嘉納治五郎存命の折に､競争性や楽しみ等の慰安性も追求されており、従ってスポーツ的な要素の一端をその原型に見ることが出来る。換言すれば、過去から現在へと続く文化の変容は、いわゆる柔道の原理から逸脱したものではなく、それは嘉納が目指した教育的柔道について未だ議論の余地があることを示すものでもある。

そのような前提から改めて柔道の大局的な目的を考察する時、その中核には人間教育が位置しており、それは運動を通しての人間形成という体育の目的と通じるものである。そして体育の理念として、運動の内在的価値に注目する考え方､すなわち競技性の魅力に加えて運動の楽しさを目的･内容とする視点は、柔道を通しての人間教育に関する議論において十分に反映されているとは言い難い。よって、柔道の教育的価値を再評価することが柔道教育当面の課題なのである。

【結論】

上記課題に取り組むにあたっては、その競技性と併せて「柔道の楽しさ」の教育的意味を探求し、その再評価と併せて、柔道の本来的な理念を考慮しつつ教育の枠組みにおける指導の在り方を検討する必要があるだろう。

A-9

講道館で制定された形の比較研究：1940 年と 1956 年に着目して

○工藤龍太（早稲田大学）

【目的】講道館柔道に現在も伝承され、創始者・嘉納治五郎が制定に関わっていない形に、戦後の 1956 年に制定された講道館護身術（以下「護身術」）がある。先行研究では極の形との関係や、制定委員の一人として深い関与があった人物として富木謙治が挙げられていたが、嘉納没後から護身術制定に至るまでの講道館において探求された形の変遷や、その武道論的な意味については不明確である。発表者はこれまで、講道館第 2 代館長・南郷次郎によって 1940 年に講道館に設置された形研究会（以下「研究会」）が、嘉納が求め続けた武術としての柔道の継続的な研究の場であったこと、富木がそこに関与していたことを解明してきた。本研究では、研究会で検討された形の具体的内容がわかる史料「講道館新編成ノ形案筋書」の内容を分析し、極の形や同時期に富木が独自に考案した形、さらに護身術とも比較しながら、上記未解明の点について考察することを目的とする。

【方法】以下の史料を使用し、それぞれの内容を比較した。

- 村上邦夫『極の形（柔道叢書）』、1934 年（講道館文化会）
- 『講道館新編成ノ形案筋書　昭和十五年夏研究』、1940 年（講道館審議部・畠山洋平氏私蔵）
- 富木謙治『柔道に於ける離隔態勢の技の体系的研究 ： 柔道原理と合気武道の技法』、1942 年（建国大学研究院）
- 講道館編、富木謙治解説『講道館護身術』、1958 年（ベースボール・マガジン社）

【結果および考察】研究会で制定された形 12 本は、居取 5 本（全て徒手対徒手）、立合 7 本（徒手対短刀 3 本、対長刀 2 本、対杖 1 本、対拳銃 1 本）からなる。注目すべきは、全て互いに離れた間合（離隔態勢）からの攻撃が起点となっていることである。富木が独自に考案した形 10 本は、全て離隔態勢の立合から取の手刀による打ち込みが攻防の起点とされていた。護身術 21 本は全て立合で構成され、徒手対徒手で受に組み付かれた場合が 7 本、離れた場合が 5 本、受が武器を所持した場合が 9 本（短刀 3 本、杖 3 本、拳銃 3 本）であった。一つの形に多様な格闘形態を含めるという、嘉納の形の構想と類似した構造を持つ研究会の形と護身術に対し、富木の形は、1 つの攻防パターンとそこから展開される 10 本のわざに習熟することであらゆる攻撃に対処できるとした点に、明確な違いがあった。

【結論】戦前に研究会と富木が考案した 2 つの形と、戦後の護身術の構成の違いは、柔道界における形稽古による技能向上の捉え方が、帰納的か演繹的かで分かれていたことを示していると考えられる。今後は、研究会委員や護身術制定委員の残した資料から、それぞれの形に対する認識をより包括的に把握していくと共に、社会背景との相関関係も検討する必要があるだろう。

A-10

原典的文献の読解による「柔の形」の間合いに関する研究

○稲川郁子（日本体育大学）

【目的】

講道館柔道の「柔の形」について、嘉納治五郎(以下、嘉納)の連載による「柔道本義」および嘉納の門弟である村上邦夫(以下、村上)の連載による「柔の形教授法研究」より、両文献の特徴を整理するとともに、特に間合いに言及された箇所に着目し、現行の講道館による統一見解と突き合わせながら考察することを目的とした。

【方法】

①雑誌『柔道』に連載された「柔道本義」のうち柔の形の解説(嘉納, 1915-1917)、②雑誌『柔道』および『有効の活動』に連載された「柔の形教授法研究」(村上, 1918-1920)を読解し、各々の趣旨と特徴を分析した。特に施技開始時の間合いに関する言及に着目し、現行の講道館の統一見解を示す「教本」(講道館, 2007)ほか関連文献を含め文献的考察を行った。

【結果および考察】

嘉納(1915)は、柔の形の間合いについて「その人々の身長如何により実際に臨んで相当の斟酌をする必要のあることは勿論である」とし、各々の身長に合わせて適宜の間合いを設定すべきであると表明している。間合いの基準の表記について、現行の柔の形「教本」では、「柔道本義」や「教授法」にみられる距離(寸・尺)による表記から歩数による表記に改められている。これは「その人々の身長如何により実際に臨んで相当の斟酌をする」ために含みを持たせたものと理解できる。文献間で差異が多かったのは斜打と突上であった。斜打は「柔道本義」では 3 尺(約 90cm)、「教授法」では 1 尺(約 30cm)、突上は「柔道本義」では 2 尺 5 寸～3 尺(75～90cm)、「教授法」では「両手取又は胸押と同じ位の距離か、又はそれよりも少し距離を遠く」、「教本」では 1 歩の間合いとされる。この理由は、両施技ともに受の初動が各文献で異なることによる。このように、両文献で施技開始時の間合いのみに着目しても異なる箇所が散見される。また、例えば「教授法」の腮押の解説においては、「師範の説明せられた形と、在来行って来た形とで差異がある、その為に疑問を起こす人もある様に聞くが、師範も何れもよろしいと仰せられたから、孰(いず)れを採って用いてもよい」(1919)とあり、嘉納が形の所作に対し寛大な態度であったことが窺われた。なお、両文献の発表後に比較的大幅な改変が加えられた施技は片手挙であった。

【結論】

柔の形について、嘉納治五郎による「柔道本義」、村上邦夫による「柔の形教授法研究」の両文献を読解することにより、特に施技開始時の間合いに言及された箇所に着目し考察した。その結果、嘉納は「柔道本義」において、修行者に対し正しい柔の形の動作とその意義を伝えようとし、村上は、時に嘉納の主張に修正を加える形で合理的な教授法に主眼を置いた記述を行っていた。両文献の記述に比較的大きな差異がみられた施技は斜打と突上、両文献の発表後に比較的大幅な改変が加えられた施技は片手挙であった。また、複数の言説から、嘉納は、形の改変に対し柔軟な態度であったことが看取された。

A-11

ドイツにおける生涯スポーツとしての柔道の捉え方に関する研究：中高年の対象者へのアプローチを中心に

○マーヤ・ソリドーワル（津田塾大学）

【目的】本研究は科学研究費助成事業（若手研究 B)「ドイツにおける生涯スポーツとしての柔道の捉え方：対象者別の指導法を中心に」(2020 - 2024 年）の一貫として、40 才以上の中高年を対象にするドイツ柔道連盟の柔道教育を考察した。

【方法】ドイツ柔道連盟の教材及びガイドラインを中心とした一次資料の分析を行った。ドイツ柔道連盟の取り組みを明らかするために、(１)「指導員養成」、（２)「昇級昇段審査規定における配慮」及び 2020 年以降の（３)「柔道体操の導入及びコロナ感染症拡大下の取り組み」に分けてドイツ柔道連盟のアプローチの考察を行った。

【結果および考察】(１）ドイツ柔道連盟の指導員資格のシステムは四段階からなるが、C 級,B 級や A 級の指導員資格に加えてトップレブルの競技柔道の指導に当たる「Diplomtrainer」という資格もある。C 級から A 級までの指導員資格は「競技スポーツ」(Leistungssport）と「生涯スポーツ」(Breitensport）に大別されており、各段階において対象者別の指導法が強調されている。又、B 級指導員の「生涯スポーツ」領域において「中高年のための柔道(Judo für Ältere)」への専門化も可能である。この「中高年のための柔道」の専門コースは2014年からNRW州柔道連盟を中心に､モデルコースとして新たに導入された。「中高年のための柔道」は中高年の「柔道とスポーツを通じた健康増進」を目標とし、対象者の運動機能や体力の維持と強化及び QOL の向上を図っている。そのため、指導者は年齢に応じた柔道指導の計画と実施及び年齢と体力・運動能力の関係性等についての基礎知識を学び、特に受け身を活かした転倒予防、柔道護身術と形の相応しい指導法まで学習する。(２）試合の得点を評価しないドイツ柔道連盟の昇級昇段審査規定において年齢に応じた配慮が見られる。2011 年から 3 級以上から「柔道の応用技」という審査科目において試合の応用技に替えて柔道護身術が選択可能になったが、この柔道護身術は投げ技と固め技に加えて当て身技の攻防も取り入れている。昇段のレベルにおいて技術に加えて指導者としての能力と知識が評価され、特に形が強調されているため、中高年から柔道を始めても有段者になれるシステムとなっている。(３）2020 年、特に大人を対象者とする「体操（Taiso)」が新たに紹介された。体操は「モビライゼーション運動」､「一般体操」､「柔道の単独動作」、呼吸法とヨガ等の「他武道・スポーツ種目から採用された要素」から構成され、柔道の活動がほぼ中止された 2020 年に体操のコンセプトがビデオ等で紹介され､オンラインの練習会等も実施された。体操とは別に、柔道クラブのベストプラクティスの評価、ビデオの発信等の試しも見られた。

【結論】柔道人口が低下する中で、ドイツ柔道連盟は少子化や高齢化の影響を受けた人口推移に対して、中高年の年齢層を重要なターゲットグループとして捉えているが、柔道人口を確保するための不可欠な対策であると考えられる。

A-12

「武道」の英訳をめぐる諸課題について

○長尾 進（明治大学）

【目的】　演者は、平成30年度より「術語budoの示す意味内容・概念の研究：武道研究国際化における再定義と発信」と題する研究を、科学研究費の助成（基盤C）を得て遂行してきた。とくにhoplology（故D.F.ドレーガーが創始した武器学・戦闘学）の立場から、日本の古武道（術）や現代武道がどのようなカテゴリーとしてとらえられているか、またその観点からみた武道の特色を、第52回大会（令和元年度）において中間報告として発表を行った。そこで明らかになったのは、hoplologyにおける「martial combative systems」と「civil combative systems」という区分法からみれば、日本の現代武道（modern budo）は、「スポーツ・娯楽・精神修練などの“機能”をもつcivil combative systemsの一つ」と位置付けられていた。一方で、武道の英訳として定着しているmartial artsや定着しつつあるmartial ways等の翻訳成句としての妥当性に関する議論の必要性も提起され、課題として残されていた。本発表では、この点を明らかにすることを目的としている。

【方法】　上記目的を果たすために、本年（令和3年）3月27日に「“武道”の英訳“martial ways”をめぐっての対話」と題するフォーラムをオンラインにて開催し、アレキサンダー・ベネット氏（関西大学教授）に「ドレーガーの“道”・“術”の定義に関する考察」、石黒太郎氏（明治大学教授）に「武道の“道”と英語の“way”について」と題する発表をいただき、それをもとに出席した武道研究者との対話を試みた。その対話について演者がまとめ、かつ分析したものを、本研究の最終報告として今回発表するものである。

【結果および考察】

・日本語の「道」に対応する英単語はway、path、road、track、courseなどいくつかあるが、武道の「道」を表す単語としては、語源的意味合いからもwayが一番ふさわしいのは確かである。ただしwayは、キリスト教における神を連想させる側面もある（石黒氏）。

・一方artは、西洋では学校で習うものや人間が行う営み全てを表す面があって、liberal artsやcultivate、cultureなどとの連想からは「鍛錬して育てる」という側面がある。その意味において、martial artsも武道の英訳として適さないということはない（石黒氏）。

・海外の人に対して武道を説明するのに、budo、martial arts、martial waysのどれが適切かについては、武道や日本文化への理解度など対象によって異なってくる（ベネット氏）。

【結論】　英語圏においては、たとえばbudoはOxford English Dictionaryにおいて2004年からすでに項目として加えられている。また、武道の翻訳成句としてのmartial artsがこれだけ定着している中においては、martial waysがそれを超えることは現実には難しい（石黒氏）。一方で、フランス語圏においてbudoはまだそれほど定着していない。そうした状況を顧慮すれば、武道はあくまで“budo”のままでの定着を目指していく方向性もあることが確認された。

A-13

東欧における武道の教育力に関する研究

○酒井利信（筑波大学），阿部哲史（国際武道大学），二宮恭子（筑波大学），
堀川　峻（筑波大学大学院）

【目的】日本で発祥し歴史の変遷過程で様々な文化と交流を持ちながら固有の運動文化として発展してきた武道は、競技としての隆盛もさることながら文化性、特に教育的側面が強調されつつ現代社会の中に位置づけられている。しかし、国際的視座から俯瞰した時、そもそも戦いの術であった武道がなぜ教育として位置づけられるのか不思議に思うのも当然であるし、また実際に海外において武道を指導する現場で武道による人間形成が理解されなかった事例が報告されている。特に欧米はキリスト教に代表される巨大宗教が人間形成を担ってきた文化的土壌があり、基本的にこういった世界で武道による人間形成が受け入れられないことは容易に理解できるが、現在は東欧などにおいて武道を青少年の道徳教育に活用しようとするプロジェクトが展開されるなど、武道の世界的展開に伴いその教育力を許容しはじめている段階とも考えられる。

上記現状に鑑み、“日本武道の教育力が海外で通用するか？”というのが本研究における核心となるテーマである。より具体的には、現在武道学においてオーソライズされている武道教育に関するロジックが海外においても有効に機能するのかということについて、海外、特に東欧における具体的かつ極端な事例をもって検証することを目的とする。

【方法】研究対象として、ユーゴスラビア紛争時にスナイパーとして従軍した元兵士の事例を取り上げる。

本研究においては以下の文字テキストを分析対象とする。

１）回顧録：対象者が 2020 年 9 月より自らの経験を記述したもの。

２）ラジオ放送用の対談記録：2006 年 10 月にハンガリーのラジオ放送番組のために対象者が居合道の指導者と対談をした際の音声記録（英語）を逐語録として文字化したもの。

３）インタビュー記録：2021 年にオンライン（Zoom）によるインタビューをした逐語録、更にメールインタビューによる補足質問と回答の記録。

先ず上記のテキストを従来の文献学的手法に質的データ分析方法を援用しつつ分析し、対象者の思想構造を明らかにする。

更に、武道の教育力に関する先行研究のロジックにおける、「人間形成」「心身一如（身心一如）」「心身関係論（心身相関的二元論）」「身体性の重視」「身体→心」「二つの精神性」「子弟同行」といった要素に照らしてその異同を明らかにする。

【結果および考察】対象者はユーゴスラビア紛争においてスナイパーとして各戦闘に従軍した経験により戦後に睡眠障害等の精神的な障害を引き起こし苦悩したが、武道実践により人間性を回復したことが日本において先学が提示した学説に近い形で確認された。

【結論】東欧における極端な事例を分析したことにより、武道の教育力が海外のキリスト教文化圏かつ心身二元論的世界においても有効に機能する可能性が明らかとなった。

A-14

近代中国における日本武道の受容とその影響

○劉　暢（早稲田大学）

【目的】日本武道の国際普及に関して、西洋諸国を対象とした研究が多く見られる。これに対して日本と地理的、そして文化的な近縁性のあるアジア諸国、特に中国の事情について看過されてきたといえる。本研究は中国における日本武道の受容の解明を目的とし、具体的に以下の二つの問いを取り上げる。(1) 中国において日本武道はいつ、どのように紹介されるようになったのか。(2) 日本武道は中国武術などにどのような影響を与えたのか。これらの問いを明らかにすることは、日本武道の国際普及をより相対的に捉えることができるのみならず、グローバル化する今日において、多様な身体文化の流通・融合を理解することにもつながると考える。

【方法】本研究は史資料の批判的検討に基づく歴史研究である。主に用いる史資料は以下の通りである。問い（1）を解明するため、近代中国において最も発行期間の長かった『申報』(1872 年創刊、1949 年廃刊）の関係記事を用いる。その際「武道」、「柔術・柔道」、「剣術・剣道」、「弓術・弓道」、「相撲」など日本武道と関わる言葉を検索キーワードとする。一方、問い (2) を解明するため、講道館の教材を底本とした『日本柔術』(1917、中華書局）や、『柔道教範』(横山、大島、1913）を底本とした『率角法』(1932、中央国術館）など 20 世紀前半の中国で刊行された日本武道の訳書、『短兵術』(1945、教育部国民体育委員会主編）など当時の中等学校で使用した教材を用いる。加えて、中国武術関係者が訪日した際の紀行（例えば、1931 年出版の『張之江東遊感想録』など)、およびそのほか関係の研究成果も参考する。

【結果および考察】『申報』において日本武道に関する報道が初めて見られたのは 1885 年である。以降 1949 年まで計 238 件の関係記事が確認された。このうち、「柔術・柔道」(全体の約 5 割）と「剣術・剣道」(全体の約 3 割）に関する報道が多く、それ以外に「相撲」、「弓術・弓道」、「薙刀」、「銃剣術」に関する記事も見られた。また、これら日本武道に関する報道の内容は、辛亥革命の勃発（1911)、中央国術館の成立（1928)、日中戦争の開戦（1937）と終戦（1945）などの歴史事件と深い関わりを持っていることがわかった。一方、日本武道が中国武術にもたらした影響に関して、柔道の技術（特に寝技、関節技など）と剣道の防具や試合形式がそれぞれ摔跤（シュアイジャオ）（投げ技を中心とした中国式のレスリング）と短兵（中国式の撃剣術）という国術の二種目に影響を与えたことが確認された。

【結論】近代中国において日本武道に関する資料は 1885 年にすでに見られ、以降、中華人民共和国成立（1949）するまで断続的に紹介された。また、日本武道の中国武術への影響に関して、主に技術と競技形式の側面で柔道と剣道の影響が確認された。

A-15

天保 3 年の大石進種次の動向について

森本邦生（貫汪館）

Ⅰ　はじめに

柳河藩の大石進種次(1798-1863)は天保年間に二度出府し江戸の剣術に大きな影響を与えたとされる。二度目の出府については日本武道学会第 52 回大会において「天保 10 年および 11 年の江戸における大石進種次の動向について」という演題で発表し，その動向の一部について明らかにしている。

大石本家は断絶し古文書類も散逸しており，出府に関する記録等は分家にも残っていない。本研究では主に柳河藩用人日記，小城藩日記により大石進種次の一度目の出府についてその動向の一部を明らかにしようとするものである。

Ⅱ　先行研究について

大石進の出府についてはいくつかの先行研究で述べられている。下川潮の『剣道の発達』には「文政より天保年間に〔中略〕全國を廻歴して各藩の道場を破竹の勢を以て破り、遂に江戸に入りて」と述べ，山田次郎吉の『日本剣道史』では「文政の末年から天保に渉つては、彼の筑後築川の藩士大石進が五尺有余の長竹刀を以て都下有數の道場を破つてあるいた」とし，堀正平の『大日本剣道史』は「而して天保年間に江戸に出て諸方の道場で仕合して殆ど破つて仕舞つた。」と記し，富永堅吾の『剣道五百年史』には「彼は天保年間廻国修行として江戸へ上ったが、道中至る処に腕を揮い、江戸での活躍は特に目覚ましいものがあった。」とあり、今井嘉雄の『十九世紀に於ける日本体育の研究』では「彼は天保年間に江戸に出て他流に挑み、殆ど彼に適するものが居なかった。」としている。また財団法人全日本剣道連盟の『剣道の歴史』では「天保四年（一八三三）には廻国修行として江戸に上り、五尺有余の長大な竹刀と、胴切りや片手突きなどによって、江戸の剣術流派に大きな衝撃を与えたという。」と記されている。

出府の年が明記されているのは『剣道の歴史』でだけであり，他はおおまかに述べているだけである。また出府の目的についても廻国修行にあったように記されている。

Ⅲ　柳河藩日記と小城藩日記

大石進種次の出府については柳河藩江戸用人日記に記載があり，その目的が剣術修行にあったことが確認できるが滞在期間や滞在中の行動については記されていない。大石はこの出府に遊学中の小城藩士五郎川是一郎を帯同しており，小城藩日記には大石進種次の出府の目的が記され，江戸での滞在期間が推定できる記述が残されている。

Ⅳ　まとめ

大石進種次は天保 3 年 3 月 5 日に出府した。滞在期間は短く 2 か月足らずと推定できる。出府の主な目的は藩命による男谷精一郎との試合である。男谷との試合について記されたものは残されておらず，どのような試合であったかは不明である。また男谷以外の人物との試合についても記録は残っていない。短期間で江戸を去ることになった大石は帯同した五郎川是一郎に江戸に残り男谷精一郎の道場に詰めて稽古するように指示している。

A-16

寛政改革と在村剣術―馬庭念流の江戸進出―

○数馬広二（工学院大学）

【はじめに】上野国多胡郡馬庭村で、戦国末期以来継承される馬庭念流は、上州での普及に満足せず、江戸に進出し道場開設を目論んだ。天明 2 年（1782）に江戸太田屋敷に出張道場を開いた樋口定暠（1702-1796）は、老中・松平定信の寛政改革による武芸奨励により、旗本や御家人の入門を得、剣術上覧の誉れに浴した。本発表では、在村剣術の馬庭念流が旗本や御家人から認められ、江戸の町人までが入門した経緯を検討したい。

1．樋口定暠の上覧

寛政 6 年（1794）、樋口定暠は 91 歳のとき、江戸城で武技を披露した。「念流といふなり、流儀に秘す事はなし、たれ人たづぬるとも隠す事はなし、剣に理はなし、業よりいでし理なり」と述べた定暠に対し松平定信は「いとかくはし」と絶賛している。（『退閑雑記』）上覧の宿願を叶えるとともに松平定信よりの評価という収穫を得たのであった。

2．上覧に至る江戸市中の背景

旗本や御家人が江戸道場へ入門し樋口定暠が上覧に至った背景に、寛政 3 年（1791）、将軍お膝元の江戸の治安を脅かした「江戸盗妖騒動」への幕府の対応があげられる。盗賊により旗本屋敷が襲われ体制不安の妖言が飛び交う事態に、（1）松平定信は武士の「義気」回復のためにも武芸習得を奨励した（竹内誠『寛政の改革の研究』）。また（2）江戸町人の自衛、武力を認めざるを得ない事態を鑑み、町奉行への触書「盗賊ニ候ハバ、召取候共打殺候共可致候」（『御触書天保集成 99』）がなされた。町人も武術を教習できるようになったことは、馬庭念流が江戸市中での町道場を発展させる機会となったのである。

3．旗本、御家人、町人の入門

馬庭念流に入門した、1756 年～1795 年までの 500 石以上の旗本の入門者は右表の通りであり、そのほか御家人や町人の入門者もいた。馬庭念流の江戸道場は、旗本や御家人のみならず町人の武芸習得の要望に応える道場であったのである。

馬庭念流に入門した旗本の知行と道場をもった旗本（※印）

西暦	5,000石以上	3,000石以上	2,000石以上	1,000石以上	500石以上	屋敷内に道場がある旗本
1756 - 1765			2		1	
1766 - 1775					1	
1776 - 1785	1(※1)		2		1	※1　近藤登之助家
1786 - 1795			1	1(※2)	1	※2　長崎半左衛門家

【まとめ】

馬庭念流は、寛政の改革により、旗本や御家人から入門される流派として認められ、また町人の入門を公的に受け入れられるようになった。これまで在村（在野）の剣術流派が武家地・江戸へ進出した好例として注目されるべき事績であろう。

A-17

近代における弓道概念の形成に関する一考察：弓射の意義・目的の変遷に着目して

五賀友継（国際武道大学）

【目的】近代において、日本の弓射文化の総称を表す用語は、「弓術」に替わって、「弓道」が一般的に用いられるようになった。五賀・松尾（2020）によれば、大正 7 年（1918）から昭和 8 年（1933）の 15 年間を中心として、「弓術」から「弓道」への移行が行われた。その移行理由については、「弓道」では、「弓術」に比べて、精神面が強調される傾向にあったことが指摘されているが、精神面の具体的な内容については、複数の考え方が存在していた。また、精神面を過度に強調する弓道については、一部から批判の声も挙げられていた。そのため、「弓道」という用語が一般的に用いられるようになったといえども、その概念の捉え方には多様なものが存在していたことが示唆されている。

そこで、本研究では、近代において弓射の意義・目的が、どのように変遷したのかを通時的に明らかにし、それを「弓術」から「弓道」への用語使用の移行の時期と合わせて見ることで、「弓術」と「弓道」が、その意義・目的から見た時に、概念上どのような違いを以て捉えられていたのかを解明することを目的とする。

【方法】明治元年（1868）から昭和 20 年（1945）の間に発行された、弓術・弓道関連書の目録を作成し、蒐集できた 154 冊の内、弓射の意義・目的を論じている 85 冊を対象として研究を行った。使用されている用語及びその前後の文脈から、その用語が意味している内容を把握し、通時的な分析を行った。

【結果および考察】弓射の意義として一貫して主張されていたのは、「体育」であった。これは、健康維持や保健・衛生に効果のある運動といった意味で用いられており、後には胸郭を中心とした身体の強壮に役立つといった、特定の部位の鍛錬に資するといった形で用いられるようになっていた。

「体育」と並んで、当初弓射の意義として主張されていたのが、「遊戯・娯楽」である。しかし、「遊戯・娯楽」は、大正 7 年（1918）以降見られなくなり、代わって「精神修養」が主張されるようになっていた。「精神修養」を論じるにあたっては、①観徳思想に依るもの、②武士道思想に依るもの、③敬神尊王思想に依るものの 3 つが確認できた。

その他、特徴的なものとしては、「女子体育」と「スポーツ」を主張するものがあったほか、国家主義・軍国主義的な意義を主張するものが、昭和 7 年（1932）以降に見られた。

【結論】上記の結果を、「弓術」から「弓道」への移行時期と合わせて考察した結果、明確に「弓道」では、「弓術」に比べて、精神修養的な側面を強調する傾向が見られた。しかし、その「精神修養」を何に求めるのかは、弓道家によって異なっており、「弓道」が有する概念が多様化していた様相が明らかとなった。

A-18

伊達藩の日置流印西派

黒須　憲（東北学院大学）

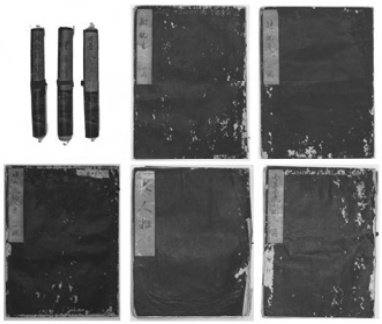
【目的】伊達藩で伝承された日置流印西派の実態について明らかにする。

【方法】現地調査及び文献資料による考察

【結果および考察】以前「仙台藩(伊達藩)に於ける日置流印西派の伝播」と題して報告した。(東北学院大学教養学部論集. 154. 2009.12.) 仙台藩の家臣の状況を知る資料として『伊達世臣家譜』,『伊達世臣家譜続編』,『仙台藩家臣録』があり，仙台藩士八百九十九家の家譜が漢文体で記述されている。『伊達世臣家譜』巻之十一，十二，平士之部吉田，『仙臺藩家臣録』第一巻６吉田勘右衛門，第四巻２６吉田覚左衛門及び『仙臺金石志』吉田図書源重時の記述から，仙台藩に印西派を伝えた人物は，日置流印西派の流祖吉田一水軒印西（葛巻源八郎重氏）の長男吉田伊豫重勝である事が明らかになった。その後，仙台に於ける調査活動で吉田家が現存し，弓術伝書が保管されていることが明らかになった。

慶長年中，重勝は山崎勘右衛門と名を変え，仙台藩に仕える事になった。重勝は２４年間，藩士を指導し，射術の弟子，百有餘人にもなった。その中で皆伝を受けた者は数十人おり，嫡子の重時も父の射を極め，その伝を受け，慶安三年（１６５０）に家督を嗣いだ。またその他の男子，重勝第四男六左衛門重朝為祖，重勝第七男吉田長太夫重親為，重勝九男吉田覚左衛門などは，その頃江戸で名を為した伯父にあたる吉田九馬助重信（将軍家家臣籏元幕臣）に教えを受け，江戸印西派の射術を学んでいる。

現在吉田家は伊達家初代吉田伊豫重勝の四男六左衛門重朝の系統で１４代目吉田清明氏が引き継いでいる。明和八年三月の吉田家家譜によると吉田本家を継いでいる。３．１１東日本大震災により蒲生町の住居が流され整理の過程で弓術傳書が明らかになった。吉田氏が所蔵している伝書は印西派の基本的な伝承構成である巻子本「目録」,「無言歌」,「神道之巻」，弓之図二巻(重籐図，栴檀巻図)，和綴本「美人雑」「小笠原流小的書」,「日置流細工方」,「射的書」,「辻的書」です。印西派の典型的な伝書構成といえる。弓目録は６４箇条あり比較的印西オリジナルに近い形と言える。また五代六左衛門直胤は江戸に於いて日置流の免許を寶暦十年澤邉季之助豊昌から受けている。吉田家は初代吉田六左衛門重朝（重勝四男保春院），二代六左衛門重長（保春院），三代六平常氏（瑞鳳寺），四代深四郎直明（瑞鳳寺），五代六左衛門直胤（瑞鳳寺），六代六平源直隆（瑞鳳寺），七代左膳源直之（瑞鳳寺），八代齋直時（専能寺），九代多吉直内（専能寺），十代六弥直弘（専能寺），十一代敬志（専能寺），十二代吉田茂（専能寺）大正九年（１９２０）～平成十四年（２００２），十三代吉田清明，十四代吉田祐也と続いている。五代目までの弓術の伝承は確認できたが，それ以降は不明である。



仙台藩では印西派の他，雪荷派の伝系があり藩内に堂形を作るなど通し矢射術を優先した様だ。また仙台藩と吉田家の関係は，近江に飛地を持ていた関係で親しい関係にあったと考えられる。

A-19

武術における小太刀の意義に関する研究

○中山竜一（明治大学大学院　国際日本学研究科）

【目的】武術・武道史において、太刀の技法とともに小太刀の技法も中世から現代にかけて連綿と受け継がれてきた。主に太刀を両手で持つ剣術の型や技法から発展してきた現代の剣道に関しても、日本剣道形の中に部分的に残されている。しかし、その小太刀の採用過程については、大日本武徳会関係の資料等をみても明確ではない。そこで本研究では、いわゆる剣術三源流の発生以来、各流派で工夫されてきた長い得物(太刀・槍・薙刀など)を持つ相手に対して、それより短い得物(本研究では小太刀に限る)で制する技法や心法の特徴を整理し、その修練の意義を明らかにしていくことを目的とする。また本研究では、小太刀の形(技法)を刃長が二尺未満の脇差や短刀などを用いる武術と定義する。

【方法】はじめに、小太刀の形を有し現存する武術流派を、各流派の内容が紹介されている文献やホームページ等から、確認できる範囲でリストアップする。次にそれらに該当した各流派の小太刀の形を映像資料より確認し、その技法の特徴を整理する。そこから更に各流派の伝書や継承者の著書より、小太刀で長い得物を制する際の教えや心得を確認し整理する。最後にそれらの結果から、技法と心法を総合的に考察し、武術における小太刀の修練の意義を明らかにしていく。

【結果および考察】１）小太刀の形を有する武術流派を確認できる範囲でリストアップした結果、とくに総合武術として現存している流派と剣術流派として現存する流派に関しては、その多くが小太刀の形を有していることが分かった。２）南北朝期から戦国期にかけて確立された剣術源流(中條流、神道流/新當流など)まで遡ると、いずれも総合武術的性質を持っており、その中では短い得物で長い得物に対処するといった、自らが不利な間合・距離からの戦闘訓練が含まれていた。そうしたなかで小太刀の技法・心法は発展し、時代が下り流派が分かれていっても受け継がれ、工夫が続けられ、重要なものとされたのではないかと考えられる。３）リストアップされた各流派の小太刀の形の映像資料を確認したところ、長い得物を持った相手が遠間から技を仕掛けようとしたその起こりを逃さず「入身」しつつ、様々なバリエーションの技を駆使して制するといった技法が多くの流派に確認できた。

【結論】各流派の伝書、及び継承者の著書から小太刀の教えや心得を確認すると、「入身」「長短一味」「無刀」といった用語がよく見受けられた。「平法」という思想をもつ天真正伝香取神道流では、小太刀の形を“極意”という位置付けにしていることや、中條流平法においては伝書から小太刀を“九字”として「武運長久」の祈祷的意味合いを持たせていることなどが確認でき、「無刀」の心得が生まれる背景になったのではいかと推測できるが、現段階では仮説として提示したい。

A-20

細川家文書『新陰流兵法書』の江戸柳生における位置付け：『五巻書』との比較を通じて

中嶋哲也（茨城大学）

【目的】細川家文書『新陰流兵法書』は上下巻で『兵法家伝書』3 巻とともに「新陰流兵法書五冊」と記された木箱に納められている。これまで『兵法家伝書』の存在感が強かったためか、同じ木箱に納められた『新陰流兵法書』は研究されてこなかった。本研究が『新陰流兵法書』に着目するのは、上巻に新陰流の勢法（三学、九箇、天狗抄、截合二十七箇条、極意六箇条）の仕様が記されているためである。これらの勢法は細川忠利が柳生宗矩から学んだものと考えられる。作成年代については下巻の奥書には「寛永三年七月晦日」の記載がある。これ以前に勢法仕様を詳述した新陰流文献はみつかっていないため、『新陰流兵法書』は新陰流最古の勢法仕様を把握することができる文献である。また、第 49 回大会既報のとおり、『五巻書』の「仁巻」は柳生宗冬が慶安 5（1652）年に記した勢法仕様の書であるが、宗冬以降、各地に伝わった『五巻書』の勢法と柳生宗矩の代の勢法とを比較するためにも『新陰流兵法書』の研究は意義がある。本研究では『新陰流兵法書』と『五巻書』との勢法仕様を比較し、前者の勢法が江戸柳生にとってどういう位置づけにあるのかを考察したい。

【方法】まずは『新陰流兵法書』上下巻の史料批判である。下巻冒頭には「新陰流兵法心持」の題名があることから、寛永 3（1626）年 3 月に宗矩から酒井讃岐守忠勝を通して徳川家光に披露された『新陰流兵法心持』との比較が必要となる。そこで、『新陰流兵法心持』及び『五巻書』を『新陰流兵法書』上下巻と比較したい。また復元についてであるが、近年、剣術や槍術の形の復元が盛んである。しかし、どの復元においても復元した所作の写真に伝書の文言を併載するに留まり、どういった視点で復元したのかが示されていない。そのため復元の妥当性を批判的に検討する反証可能性に開かれていない。本研究では民族考古学を援用し、まずは新陰流を伝承する道場を参与観察し、勢法の出来を評価する視点を民族誌的に収集する。そうして得られた民族誌的データを基に伝書をどう読解したのか、そのプロセスを示しながら勢法の復元をしたい。

【結果および考察】『新陰流兵法書』上下巻の史料批判の詳細は当日報告する。現段階では、上巻と『五巻書』とで文言の異同が多少みられるが、勢法仕様についてはほぼ一致することが分かっている。また、『五巻書』の末尾には「右五巻之書者従柳生但馬守宗矩伝受之書也」とあり、上巻は『五巻書』の原型だと考えられる。復元については、C 県にある新陰流道場に 15 年間通って調査し、当道場における勢法を構成し、その出来を評価する視点、すなわち刀法の視点を収集している。刀法の視点から復元した勢法についても当日発表予定である。

【結論】当日、発表したい。

A-21

近世剣術伝書にみられる言語表現に関する一考察
―比喩・擬音・擬態表現を中心に―

○軽米克尊（天理大学体育学部）

【はじめに】剣道は武士たちの戦技であった剣術を起源とする、日本発祥の伝統的な運動文化であるとされている。しかし、日本古来の運動文化といえども、現代社会に生きる我われにとってはその動作や技術は非日常的で、他の運動競技と比べ異質である。剣道における技術習得の難しさはこの点に要因があると言えるのではないだろうか。

こうした非日常的な動きを理解させ、上達させるために、剣道では様々な言語表現が用いられる。本稿では多様な言語表現の中でも「比喩表現」「擬音・擬態表現」に焦点を当て、剣道の淵源である剣術伝書から考察するものである。

【先行研究と問題の所在】先行研究としては生田久美子、倉島哲、藤野良孝らの研究が挙げられる。これらをみる限りで言えるのは、比喩表現、擬音・擬態表現が指導現場において使われる理由として、①記述言語や科学言語では伝えにくいニュアンスを簡単に説明することができる、②記憶に残りやすい、③直接的な動きの指示を超えて、指導者の身体感覚と学習者の身体感覚の共有ができる、などの利点が挙げられる。また、比喩表現の先行研究である生田の「わざ言語」に関しては、当初、学習者が流派などのわざを修練する世界へ入り込むことが必要とされていたが、倉島が市販のスポーツ指導書からわざ言語について考察しており、師から弟子への直接的な指導でなくても、学習者が技術のコツをつかむ可能性も否めない。もちろん、倉島が指摘するようにどのような日常的動作と結びついているかによってわざ言語の有効性が決まると考えられ、学習者の日常生活に鑑みる必要はある。しかし、同じ技術について異なった複数の表現方法があれば、いずれかが効果を発揮するということも考え得る。このあたりに、これらの言語表現を網羅的に抽出していく意義があると考える。

基本的に剣術は口伝によりその技術が伝えられていたため、技術の詳細が記述されることは少ないが、ときにその技術を事細かに書き記した「伝書」が発見されることもある。剣術伝書にはいかなる比喩表現や擬音・擬態表現が見られ、どのような技術を説明する文脈で用いられているのか、この点を明らかにすることで、剣術の玄妙な技術の要点が浮き彫りになって来ると考えられる。

以上から、本研究は、近世剣術における技術の微妙なニュアンスを解釈するための一助として近世剣術伝書にみられる言語表現を抽出し、どの技術のどのような点を説明するために用いられているのか考察を行うことを目的とする。

【研究方法】近世剣術の二大伝書とも言われる『兵法家伝書』『五輪書』から比喩表現と擬音・擬態表現を抽出し、文脈に留意しつつその表現により伝えたいニュアンスを考察することで、その表現の特徴について明らかにする。

【考察】擬音・擬態表現については、18 種類の表現が確認でき、その数は『五輪書』よりも『兵法家伝書』の方がやや多いようである。また、比喩表現と擬音・擬態表現を組み合せた記述も確認出来た。詳細な考察は当日の発表資料に譲ることとする。

A-22

大日本武徳会における渡辺昇に関する一考察

○筒井雄大（国際武道大学），酒井利信（筑波大学），大石純子（筑波大学）

【はじめに】近代日本において武道の総本山として活動していた大日本武徳会であるが、その組織拡大の背景についてこれまで数多くの研究がなされ、その要因が明らかにされつつある。本研究は大日本武徳会の組織拡大について、特に武徳会商議員として活動していた渡辺昇に焦点をあて、その一要因を探ろうとするものである。

筆者は、武徳会の青年大演武会が渡辺の考えにより開催されたことをこれまでに明示したが（身体運動文化研究,2021)、これには会員獲得のため全国行脚を行っていた渡辺の活動が影響していることが窺えた。渡辺が組織拡大のため活動していたことは明らかであるが、その詳細は不明であり、渡辺を研究対象とした理由はここにある。

【先行研究と問題の所在】坂上康博氏は、武徳会が地方行政機構に急速に浸透した理由の一つとして官僚たちの武術経験を挙げ、武徳会全体を眺めた時に、いわば“官僚武術家”とも呼ぶべき人々が会の中で重要な位置を占めていたと述べている（坂上,1989)。

他に、渡辺に焦点をあてた研究としては、渡辺の出身である旧大村藩の地方史研究がまとめられた『大村史談第五十四号』(大村史談会,2003）において、松井保男氏が武徳会における渡辺の活動を含めて、旧大村藩時代から晩年の様子までについて詳細に述べている。

しかし、松井氏の研究は、渡辺の全国行脚について興味深い史料が示されているものの、武徳会組織拡大における影響については考察が行われていない。坂上氏の研究を含めたこれまでの武徳会研究では、渡辺に焦点をあてた研究は管見の限りみられない。このあたりに本研究の問題の所在がある。

以上の内容を踏まえ、本研究では、武徳会商議員渡辺昇という人物が武徳会にとってどんな存在であり、どんな影響を与えたのかについて、より詳細に把握し、設立当初の武徳会組織拡大の背景について一要因を明らかにする。

【結果および考察】大日本武徳会発起人メンバーの中には渡辺の名前がないため、明治 28 年（1895）の武徳会創立時には関与していないと考えられるが、会務拡張のため全国行脚を行っていたのは、明治 32 年（1899）8 月に行われた第一回青年大演武会における武徳会副会長木下広次の演説内容を踏まえると、同大会が開催される前からであったと言える。明治 33 年（1900）の臨時常議員会において武徳会会長北垣国道の後任として渡辺が推薦されたが、これを「依然商議員ニ留リ劍ヲ以テ此ノ上尚四方ニ周遊シ、會務ノ発展ニ寄與シタシトテ固辭シテ應セス」(『大日本武徳会沿革（天)』,1935）として拒否しており、全国行脚による会務拡張を重要視していたことが窺える。このことについては、明治33年(1900)の第5回武徳祭大演武会終了後の渡辺の演説内容からも窺える。

組織拡大に影響を与えたと言える渡辺の全国行脚活動以外の活動についての詳細は紙面の都合上ここでは割愛する。

A-23

近代における武士道思想に関する一考察
－井上哲次郎に着目して－

○堀川　峻（筑波大学大学院），酒井利信（筑波大学），大石純子（筑波大学），

【背景及び目的】近代における武士道思想を対象とした研究はこれまで多く為されてきており、その中では主に明治 30 年前後から始まる「武士道ブーム」において、近代武士道が「創出」・「発明」された伝統であるとの見解が示されてきた。近年みられるこのような研究動向は近代武士道論の重要な一側面を明らかにしているものの、一方で明治維新によって崩壊した武士社会における思想がいかにして受け継がれてきたのかという、思想的なつながりの部分が重要視されてこなかったといえる。「武士道ブーム」を牽引した代表的な人物として知られるのが井上哲次郎である。井上は明治 34 年以降多くの武士道論を著しており、それらは「皇道的武士道」や「内に向かってのナショナリズム」など主に国家主義的な思想との結びつきが指摘されてきた。しかし、彼の武士道思想についても、これまで明治 34 年以降の記述のみが取り上げられ、それがどのように形成されてきたのか、武士道論以外の彼の論述とはどのように関連しているのか等、そこに含まれる彼の思想の詳細については十分な検討が為されてきたとは言い難い。よって本論では、井上哲次郎の武士道論について、それらが著されるまでにみられる彼の思想的傾向との関連性を含めて詳細に考察を行うことを目的とする。

【研究方法】井上哲次郎の武士道論が管見の限り初めて著された明治 34 年には、『武士道』（兵事雑誌社）、「武士道を論じ併せて『瘠我慢説』に及ぶ」（巽軒論文 2 集・富山房）、「武士道と將來の道德」（「教育公報」第 248 号・帝国教育会）、などの論稿が確認できる。井上は明治 34 年以降も武士道に関する数多くの著述を残しているが、本論では彼の武士道論が形成される以前からの思想的なつながりを特に焦点化して考察を行う為、初めて彼の武士道論がみられる明治 34 年に著されたものを主なテキストとして取り扱う。本論ではそれらの武士道論を、同年までに著された文献や雑誌等でみられる彼の思想的傾向を含めて、文献学的に考察を行っていく。

【結果および考察】明治 34 年に著された『武士道』及び同年に著されたその他の武士道論の中では、「武士道は我邦の武士が從來實行してきた所の道德である」「今後の日本の道德を何う云ふ工合にするかと言えば、どうしても武士道の精神が土臺とならなければならぬ」などの記述がみられ、武士社会で育まれた武士道は、近代以降の日本にも道德の「土臺」として受け継がれていくべきであるとされている。井上が「本格的に著作活動を開始した」明治 20 年代以降のその他の著述をみていくと、そこでは井上が当時の史学にみられる「史實を忠實に世に傳える」立場と「歴史を道德的にみる」立場の 2 つの対立の中で、明治 30 年代に至るまでに後者の立場を明確に表していく様子が確認できる。つまり近世以前の武士道を近代の道德として受け継ごうとする彼の武士道論には、明治 20 年代以降からみられる彼の史学に対する立場が背景として現れていたと考えられる。その他の詳細な考察については紙面の都合上割愛する。

A-24

近代期武道関連思想に「女性」が及ぼした影響:「女學雑誌」の分析から

○大石純子（筑波大学体育系）

【学術的背景・研究意義及び方向性】従来の武道と関わる女性についての歴史研究では、武芸・武道に関わる女性の希少な史実解明に焦点が置かれてきた。具体的研究としては、女武芸師匠としての佐々木累への言及(横山健堂,1943)、幕末期北辰一刀流の千葉佐那の考察（山本節，1983.宮川禎一，2010）、明治女学校などで展開された女子教育における薙刀に関する言及(井上アヤ子,1994)、女子柔道の研究（山口，2012）などがあげられる。これらの研究は、男性を主軸として展開してきた武道史において看過されてきた女性の活躍や女性に関わる史実をあぶりだしてきた点において有意義であったが、武道思想の近代化の過程において取り込まれていった「女性」という存在がいかなる影響を及ぼしてきたのかという観点においては明示されてこなかった。そこで、演者は、男性とは異なる身体性を有し、世相に応じて変化する女性像や女性観に左右されながら存在してきた「女性」という要素が、近代武道思想の変容や発展にいかなる影響を及ぼしてきたのかという観点からの考察を進めつつある。現在までに近代剣道書を網羅的に検討し、そこに現れた女性論を分類整理し、香川輝という剣道家の著作『剣道極意』(1916)に顕著な女性論が展開されていることを明らかにした（大石純子，2020)。さらに、香川の『剣道極意』及びそれに先立つ 1909 年刊行の雑誌「成功」掲載の香川の論稿の分析等を通して、香川における女性論と「武士道」の解釈の関連付けの形成過程の一端を論じた(「武道学研究」印刷中)。これらの研究によって、わが国の近代期において「武士道」のような武道関連思想が女性論と関連を有していたことが確認されている。近代期には、香川輝以外の剣道家や薙刀指導者、女子教育論者らも、武道と女性を関連付ける言説を残しており、それらを紐解きその周辺も含めて考察することは武道思想の近代化過程での「女性」という要素の影響の解明となる。そして現代武道における女性の関わり方や女性の果たす役割への示唆にもつながりうる。演者における研究の全体構想は、武道思想の近代化過程に「女性」という存在がどのような影響をもたらしたのかの解明にある（JSPS 科研費 JP21K11518)。

【研究目的】本研究では特に近代期に武道と女性に関する記事を多数掲載していた「女學雑誌」とその創刊に関わった巖本善治に着目したい。これらについては、既に中川裕美（中川，2015)、ルクミナイテ（Lukuminaite，2018）により研究され、中川は「女学雑誌」での武道関連記事の表出が明治 20 年頃からであると述べ、ルクミナイテは、巖本善治の武道観の分析とその女子教育における位置づけを考察している。このように先行研究では女子教育への武道の影響を論じている。本発表では、これら知見を手掛かりとして、近代期の武道と女性の関わりにおいて、武道関連思想に対して「女性」という要素の影響はどのようであったかについて探索的に考察することを目的とする。

【考察】「女學雑誌」全 549 冊のうち今回は明治 20 年代頃に表出する武道関連記事とその周辺について考察を進める。特に「女學雑誌」創刊のみならず明治女学校での女子教育にも深く寄与した巖本善治の武道論を紐解くとともにその人脈等も視野に入れて武道関連思想への「女性」の影響について検討していく。

A-25

古流武術「竹内三統流」について
― 流儀創始の背景・目的・成果に関する考察 ―

河野　敏博（新風館）

【目的】武術流儀が創始される時、そこには武芸者自身の経験・知見・独創的発想などを基盤とした新たな技術・思想体系の構築が見られる。勿論、例外はあるが、多くの流儀ではその由来に流儀創建の逸話が存在しており、そこに新流儀を創建する理由や必然性が記されている。
今回はその事例として「竹内三統流」という武術流儀について、①流儀創始の必然性(何故、新たな流儀を創始する必要があったのか)、②新流儀創建の目的、③新流儀としての新機軸（どんな独自性・特徴があるのか）を調査、考察する。

【方法】竹内三統流の史料を精査することによって、開祖・矢野廣英の考えと技法内容を明確化し、その明確化した「事実」を基に考察する。特に技法については、史料に記載された個々の型手順を同流の母体となった竹内流の技法と比較しつつ実地検証することで詳らかにする。
（使用した史料の内、主なもの）
・「矢野家文書」・・・矢野廣英ご子孫が保管している資料
・「肥後伝来の武術　竹内三統流柔術」（島田秀誓、1971、青潮社）
・伝書目録（竹内三統流創始以前の肥後傳竹内流のもの）（個人所蔵）

【結果および考察】
1．背景：（事実）熊本藩細川家では、柔術は「扱心流」「四天流」「楊心流」等の流儀も指南されていた。細川家では複数の武術流儀の免許を取得していないと家督相続時に家禄が減じられる制度があり、免許取得は藩士にとって重要課題だった。
⇒（考察）「免許を取得し易いこと」は強力な「セールスポイント」。
2．矢野廣英：（事実）藩の武術師役として、藩士子弟に武術を指南して実力をつけさせる役割を担っていた。家傳の２系統の竹内流に加えて、美作国角石谷竹内家に赴いて本家の竹内流を学んで整理・再編し、天保 12 年（1841 年）に「３系統の竹内流」を意図して「竹内三統流」を創始した。
⇒（考察）学び易く、短期間でも実力養成し易い流儀構築を目指した。
3．技法体系上の特徴：（事実）約 100 本の型には「捨身投」「脇固め」「負投」の技法が多く含まれており、さまざまな状況において、自然とこれら３種類の技法に展開できるような修行体系になっている。
⇒(考察)得意技を作り上げ、得意技につなぐ必勝パターンを習得できる。

【結論】熊本藩の藩士子弟に武芸を指南して心身を鍛える教育者の任を担っていた矢野廣英は、自らの修行と指導経験を基にして、「学び易く、それでいて武術的な実力を養成し易い技法体系」を構築し、新流儀「竹内三統流」とした。

竹内三統流は、青少年育成を目的として構築されており、現代においても学び易い古流武術であると思料する。

A-26

知られざる琉球の武術史（麻氏又吉眞光）

○早坂義文（古武道研究会）

【序文】

沖縄の武術史では、又吉眞光が、日本国内で初めて京都武徳殿に於いて、沖縄古武道トゥンクワー術を演武したことを知る人は、あまりいない。その際、船越義珍も唐手を演武した。しかし、船越翁の実績のみ伝わり、又吉眞光の実績は皆無であった。少年期より沖縄の武術を修業してきた私は、この事実を後世に伝えたい。

【麻氏又吉眞光】

１　麻氏系譜

又吉家は、太宗眞武（大城按司）を始祖とし、代々麻氏を門中として、琉球王朝時代を生きてきた。

中興の祖儀間眞常は、１５５７年～１６４４年、琉球王国第二尚氏王統の人。唐名は麻平衡（まへいこう）、麻氏大宗家の六世である。

十三世又吉眞得は、諱を麻開元、１７８６年（天明６年）生、１８４８年、８７歳で勢頭座敷に昇進した。

十四世又吉眞珍（又吉眞光の実父）、唐名を麻善愼、１８４４年(弘化元年)生、１８７７年（明治１０年）、築登之座敷に昇進、唐手、武器術の達人で、幕末の著名な武士と交流を持ち、琉球王朝時代の武芸の保存に当たった。

２　又吉眞光の武歴

又吉眞光は、明治２１年５月生～昭和２２年５月没。那覇市垣花町で眞珍の三男として生まれ、現嘉手納町千原で育った。又吉家に代々伝わる拳法と武器法を実父から手ほどきを受けた。祖父の武友、具志川村の武士で安慶名直方（通称具志川平良小１８５９年（安政５年～明治４５年没）から棒術、櫂術を習得し、さらに、鎌術、釵術（鉄尺）の指導を受けた。安慶名直方は、具志川西門の親方で、具志川地域を守護してきた。

読谷村では、野里（現嘉手納町野里）に住む武士伊禮眞牛翁（通称ヂズディモーシ明治１８年～２４年まで地頭）から双節棍・柱枴術・車棒・鍬術などを学んだ。

【又吉眞光の実績】

明治４１年７月京都武徳殿大日本武徳会柔剣道青年大会初参加　トゥンクワー術を演武
大正　４年東京・御大典記念祝賀演武会　トゥンクワー術・鎌術を演武
大正　５年京都武徳殿大日本武徳会設立２０周年記念大演武会　トゥンクワー術を演武
大正１０年皇太子殿下（昭和天皇）が来沖。御前演武記念　沖縄古武術を演武
昭和　３年明治神宮大礼祭　沖縄古武術を演武
昭和１４年大日本武徳会沖縄支部武徳殿開殿式演武会　トイファー術、棒術を演武

【結論】

戦後、沖縄の武道「空手」は、オリンピック競技となり、世界に多くの愛好者を持つ。しかし、沖縄が琉球王国であった当時の武術が正しく認知されているかは疑問がある。

この気持ちが私の研究に繋がり、恩師又吉眞豊先生の実父眞光の経歴を調査し、現時点まで判明したことを発表する。

B-1

Similarities between karate blocking techniques (受け- uke) and Proprioceptive Neuromuscular Facilitation (PNF) patterns - comparative analysis

○Dariusz Mosler (**Department of Kinesiology and Health Prevention**, Jan Dlugosz University of Czestochowa)

【目的】In Europe, martial arts are seen as additional physical activity. In order to prove its use in physiotherapy, more medical evidence is required. The aim of this study is to compare electromyographic activity of upper limb and shoulder gridle muscles activity during the execution of karate blocking techniques and corresponding proprioceptive neuromuscular facilitation patterns.

【方法】Study was conducted on a single participant. Noraxon Ultium system with electromyographic sensors was used to perform the analysis. Upper limb and shoulder gridle muscle activity was registered. Diagonal 1 pattern was compared to *gedan barai* in both directions of movement. Diagonal 2 flexing pattern was compared to *jodan uke* and extension pattern was compared to *soto uke.* Each technique was performed with a right arm, three times. There was no external resistance to the movements.

【結果および考察】Mean electromyographic activity values in D1 pattern comparison was similar for m. biceps brachii (92.3 uV to 105 uV in uke), m. pectoralis major (40.5 uV to 42.3 uV) and m. trapezius (76.5 uV to 94.6 uV). In D2 pattern showed similar activity in m. infraspinatus (156 uV to 168 uV in flexion and 109 uV to 102 uV in extension), pectoralis major (77.9 uV to 69.7 uV in flexion and 37.1 uV in extension) and m. trapezius (118 uV to 122 in flexion and 135 uV to 128 in extension). In all cases m. triceps brachii activity was higher in the *uke* techniques. Activity of m. latissimus dorsi was low in all cases.

【結論】Similar scapula movements are observed during the execution of the uke techniques and short patterns (shoulder gridle) and can be used as a replacement for the latter. Forearm and fist movement in the patterns and uke do makes distinguishable differences in upper limb muscle activity. Karate *uke* practice may serve as a substitutional method for shoulder gridle muscle rehabilitation, but further research is required to prove its effectiveness as a standalone therapy method.

B-2

弓道において矢の材質・羽根の向きの違いが矢の着点に与える影響

○原田隆次[1,2]（[1]国際武道大学,[2]早稲田大学大学院），相澤岳（早稲田大学大学院）

【目的】

現在弓道において、カーボン矢とジュラルミン矢が主に使用されており、また、その中でも羽根の向きの違うもの（早矢・乙矢）が併用されている。これまで、弓道で使用する矢の特性を調査するため、風洞実験（澤田ら，2012）が行われているが、実際に射手の実射により、矢に生じる空気抵抗の影響は明らかになっていない。

そこで本研究では、異なる材質の矢で異なる羽根の向きの矢を、実際に射手が発射し、生じる空気抵抗の違いが矢の着点の違いとして現れるのかを明らかにする。

【方法】

被験者は健全な男性 11 名で、実験用の矢（カーボン矢、ジュラルミン矢）以外は通常の稽古と同じ弓具を使用し、それぞれ 20 射試技を実施した。実験環境は、屋内において近的競技距離（距離 28m）とし、測定には 3 次元モーションキャプチャシステム（VICON）を用いた。射手の立つ位置から的まで直線を引き、延長線上の同じ高さの床を原点 0、水平軸、さらに鉛直に上方へ垂直軸とし、左が負、右が正とした。算出項目は、矢の初速度ベクトル等とした。また、矢の初速度ベクトルをもとに、空気抵抗を加味しない矢の予測着点（PLP）を算出し、PLP に空気抵抗が加わった結果である着点（LP）と差分（|LP-PLP|）の比較を行った。

【結果および考察】

PLP と LP は水平、垂直方向の双方において、カーボン矢の方が高い相関がみられた（表 1）。カーボン矢は垂直方向に約 0.16m、水平方向に約 0.26m、ジュラルミン矢はそれぞれ約 0.19m、約 0.29m の平均差分があった。しかし、PLP が原点から遠くなるほど、差分が大きくなる傾向があったため、PLP と LP-PLP における回帰直線の傾きを比較したところ、有意な差は認められなかった。差分の違いは、ジュラルミン矢の PLP が原点より遠かった試技が多かったためと考えられる。

また、早矢と乙矢の差分の平均値について t 検定を行ったところ、カーボン矢については、水平方向において早矢の方が有意に大きかった（$t(192) = 1.98$, $p < .05$）。これは実際の平均差分としては約 0.04m の違いだった。また、ジュラルミン矢についても、垂直方向において有意に早矢の方が大きい結果となった（$t(216) = -2.57$, $p < .01$）。これは実際の平均差分としては約 0.07m の違いだった。羽根の向きは、矢の回転方向に影響を与えるため、矢の振動の減衰に影響している可能性がある。

【結論】

矢の材質の違いにおける空気抵抗による影響の違いはみられなかった。一方で、羽根の向きの違いは、空気抵抗による影響の違いを生むことが示唆された。

表 1　矢の予測着点（PLP）と矢の着点（LP）の関係

		矢の着点(LP)					
		カーボン矢			ジュラルミン矢		
		全体	早矢	乙矢	全体	早矢	乙矢
矢の予測着点 (PLP)	水平軸	0.62**	0.5**	0.74**	0.46**	0.40**	0.55**
	垂直軸	0.61**	0.63**	0.59**	0.48**	0.5**	0.51**
							**p<0.01

剣道初心者における
気剣体不一致な打突動作に影響を与える要因の検討

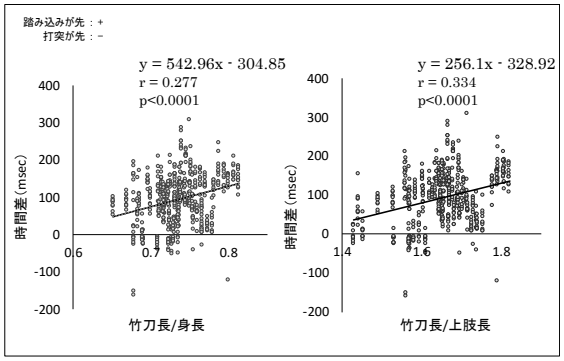
○椿　武（神戸親和女子大学）

【目的】剣道初心者が気剣体の一致した打突動作を修得することは、限られた授業時間内では難しい学習課題であることが報告されている。剣道初心者は、熟練者以上に竹刀を操作することによる影響を身体に受けるだろうし、基本的な打突動作（大きくゆっくりな動作）よりも実践的な打突動作（短時間の素早い動作）のほうが、より竹刀操作の影響を身体に受けるだろう。

本研究は、剣道初心者に見られる気剣体不一致な打突動作に影響を与えている要因を明らかにするために、操作性の異なる竹刀を用いた実践的な面打突動作を行わせ、その際の打突動作の比較から影響を与える要因を検討することを目的とした。

【方法】対象者は、剣道経験のない女子大学生 20 名（年齢：20.2±0.6 歳、身長：163.4±6.4cm、上肢長：72.8±3.7cm）であった。本研究では、筆者が行った先行研究の結果を基に、同じ重さで長さの異なる竹刀を 3 種類（3 尺 7 寸、3 尺 8 寸、3 尺 9 寸）を用いて実践的な面打突を行った。その際、モーションキャプチャシステム Miqus M1(Qualisys 社製)を用いて 240Hz で撮影を行い、得られたデータをもとに比較分析を行った。測定条件は、各対象者における任意の一足一刀の間合いに身長と同程度の高さに調節した打突対象物を設置し、対象者の任意のタイミングで最大努力での実践的な面打突を実施させた。測定は、各条件 10 回成功試技が出るまで行わせ、竹刀角度、左右上肢関節（肩関節、肘関節、手関節）、左右下肢関節（股関節、膝関節、足関節）、体幹部の傾斜角度、重心合成速度を算出し、気剣体不一致な打突動作に影響を与える要因を検討した。

【結果および考察】その結果、図のように身長や上肢長に対する竹刀長が短い方が打突と踏み込みの時間差が短い結果が得られた。しかしながら、変動誤差(VE)においては（39：10.5±4.9、38：9.9±4.1、37：9.9±3.8）、長い竹刀の方が大きくなるものの短い竹刀との有意な差は認められず、打突動作の安定性（打突と踏み込みのタイミングの差）には竹刀の長さの影響は認められなかった。また、動作分析においても、対象者の打突動作の個人差が大きく、気剣体の一致に寄与する打突動作の要因は明らかにすることはできなかった。今後は、打突動作パターンごとに分析を行い、大会当日発表を行う。



図．竹刀長/身長・上肢長と時間差の関係

B-4

剣道稽古中のマスク着用が学生剣道選手の経皮的動脈血酸素飽和度に与える影響

○川井良介（日本大学），神田智浩（中部大学），堀天（中部大学生命健康科学研究科），長谷川大祐（中部大学生命健康科学研究科），堀田典生（中部大学）

【目的】

昨今の新型コロナウイルス感染症の蔓延により，剣道の活動に際して新たな様式が提案された．剣道の対人稽古の際には運動用マスク（以下，マスクと略す）の着用が必須となり，面を着用しての稽古の際には発声等による飛沫の飛散防止のため，マウスガードの装着が推奨されている．

運動中のマスク着用が身体に及ぼす影響に関する研究も多方面で行われ，呼吸器系や心血管系への運動負荷検査が実施されている．その中で，運動実施者の肺での酸素化障害の程度を表す指標として,経皮的動脈血酸素飽和度(以下，SpO_2 と略す）に焦点を当てた研究が報告されており，運動実施場面において，SpO_2 の低下は急性呼吸性アシドーシス等の症状を引き起こす危険性も指摘されている．そのため，マスクを着用して運動を行う場合には，これまで以上に安全性に留意する必要がある．剣道の稽古に焦点を移すと，マスクとマウスガードを併用して実践する対人稽古の際には，上述の点に注意する必要がある．しかし，剣道の稽古場面においてマスクとマウスガードの併用が SpO_2 の値や身体にどのような影響を及ぼすかを検討した研究は未だ少ない．

そこで本研究では，剣道の稽古における運動中のマスク着用が剣道実践者の安全性やパフォーマンスにどのような影響を及ぼすかを検討するため，SpO_2 や心拍数（以下，HR と略す）および自覚的運動強度（以下，RPE と略す）などの指標を用いて実験を行うこととした．

【方法】

研究対象者は特別な疾患や傷害がない学生剣道選手 10 名とした．実験課題は切り返し運動 5 セットとし，安静時から 5 セット終了時まで継続的に各種データを収集した．なお，実験はマスクを着用した試行（以下，マスク試行と略す）とマスクを着用しない試行（以下，対照試行と略す）を異なる日に実施し，対象者間でカウンターバランスを取った．

【結果】

切り返し運動 5 セット後の SpO_2 の測定値を比較すると，マスク試行の方が対照試行よりも有意に低い値を示した．HR や RPE の測定値については，試行間に有意な差は認められなかった．

【考察および結論】

マスクを着用して稽古を行う場合，自覚症状がないうちに SpO_2 が低下する可能性が示唆された．このことは，稽古中の事故等に繋がる可能性が推察されるため，マスクやマウスガードを使用して稽古を行う際には，個人の健康状態に配慮しつつ，剣道の稽古内容や運動強度を適切に設定する必要がある．

学生柔道選手における健康状態に関する研究
－糖尿病発症リスクからの検討－

○松田悠佑（皇學館大学大学院），佐藤武尊（皇學館大学）
木下翔太（日本武道学会会員），大木雅人（皇學館大学）
三宅恵介（中京大学），横山喬之（摂南大学）

【目的】

階級別制度が設けられている柔道では，大会ごとに行われる「減量」や「増量」などによって暴飲暴食に走る傾向にある選手や，日頃から「ドカ食い」を続ける選手が存在すると考えられる。そのような食生活を続ける柔道選手は，糖尿病を誘発しやすい状況に陥っている可能性があると考えている。そこで本研究では，学生柔道選手の健康状態に着目して学生柔道選手における糖尿病の発症リスクについてその実態を明らかにすることを目的とした。

【方法】

対象は，東海学生柔道連盟に加盟するＫ大学に所属の学生柔道選手 48 人（学生柔道選手群）と一般大学生 40 人（コントロール群）とした。糖化ヘモグロビン（HbA1c）の測定は，採血によって採取した血液を用いた。被験者の採血は，看護師免許を有する者に依頼し行った。測定の際に問診表によって被験者の食事に関する習慣を記入させた。本研究では，学生柔道選手群とコントロール群及び，学生柔道選手群における軽量級群と重量級群の群間の HbA1c 平均値の差について比較・検討を行った。統計処理には，対応のないｔ検定を用いた。有意水準は，危険率５％未満（P＜0.05）とした。

【結果および考察】

学生柔道選手群とコントロール群における HbA1c 平均値の比較では，有意差は認められなかった（Fig.１）。しかし，実数値で比べてみると学生柔道選手群では 8.0%（４人/48 人），コントロール群は 2.5%（１人/40 人）が HbA1c 値の国際基準である血糖コントロールの指標の「将来の糖尿病発症の高リスク群（HbA1c 値 5.6 から 5.9)」に該当している。このことより，学生柔道選手群はコントロール群に比べて糖尿病になるリスクが高い傾向にあるとも考えることができる。また，軽量級群と重量級群の HbA1c 平均値は有意な差が認められた（Fig.２）。このことから，重量級群は軽量級群よりも糖尿病になるリスクが高いと考えられる。

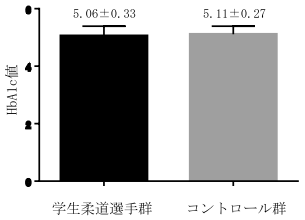


Fig.１　学生柔道選手群とコントロール群におけるHbA1c平均値の差の比較

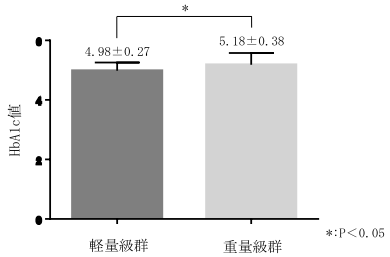


Fig.２　軽量級群と重量級群におけるHbA1c平均値の差の比較

B-6

男子大学生柔道競技者における減量時の血液・尿データ変動の分析

○金持拓身（桐朋中・高等学校），竹澤稔裕（順天堂大学），上野剛（順天堂大学），平山哲（順天堂大学），三井田孝（順天堂大学大学院），廣瀬伸良（順天堂大学大学院）

【目的】体重階級制で実施される柔道競技において、試合前の計量に向けて減量を行う競技者は少なくない。過度な減量は、パフォーマンスの低下につながるだけではなく、様々な健康被害を引き起こすことも懸念されているが、依然短期間で急激に体重を減少させる急速減量やそのような減量を行っているケースがあると報告されている。コーチング現場においては、競技者の身体的コンディションを把握することは大切であり、そのために血液・尿など生化学的データを用いて客観的に評価をしていくことは有効な方法である。

本研究では、減量を行う男子大学生柔道競技者を対象に試合前 3 週間における体重・身体組成値の 1 週間ごとの変動と血液・尿データ変動との関連を検討し、減量時の身体的コンディションについて考察を得ることを目的とした。

【方法】試合前に減量を必要とする健常な男子大学生柔道競技者 14 名を対象として、試合を実施する①3 週間前、②2 週間前、③1 週間前、④当日の早朝 4 回にわたり体重・体組成測定、および採血、採尿を行った。体重・身体組成の測定は、体成分分析装置 InBody730 を用いて実施した。また、採血は空腹時に肘中静脈より 5ml 採取（採血後 3500rpm で 5 分間遠心分離し、冷却保存）、採尿は早朝尿 10ml を採取した。なお、採取した血液・尿は順天堂東京江東高齢者医療センターにて分析した。血液の分析項目は、栄養および血清脂質関連検査項目（TC、TG、LDL-C、HDL-C、脂肪酸、FG、TP、Alb、UA）、電解質検査項目（Na、K、Cl）とし、尿の分析項目は、Na、K、Cl、Ca、Cre、UA、U-TP、U-ALB、Amy、iP、Glu、UN とした。得られたデータは、基本統計値を算出し、一元配置分散分析で①から④を比較した。また、体重・体組成の変動と血液・尿データ変動との相関について調べた。

【結果および考察】体重（kg）は、①82.1±11.3、②80.8±10.4、③80.2±10.6、④77.9±10.9 と減少し、3 週間の減少量（kg）は 2.4±1.5、減少率（%）は 5.1±1.2 であった。また、期間中では試合前 1 週間（③から④）で急激に減少した。一方、血液データをみると、FG（mg/dL）は①6.14±3.44、②5.80±3.01、③5.81±3.47、④8.52±5.93 と変動した。また、Alb（g/dL）は①4.58±0.18、②4.68±0.19、③4.66±0.18、④4.94±0.27 と変動した。いずれも試合前 1 週間（③から④）で上昇した。体重変動（減少率）と FG 変動（上昇率）、Alb 変動（上昇率）の関連をみるとそれぞれ相関が認められた。このことより、試合前には、減量行動に伴い直前に大幅な体重減少をさせており、それは栄養摂取制限と脱水によるものと考えられた。減量時には、体重の変動だけではなく、減量状態、脱水状況の両面から評価し、それらを考慮したコンディショニングの構築が必要である。

B-7

高藤式肩車の kinematics 的技術分析

○伊藤悦輝（早稲田大学スポーツ科学研究科），長谷川公輝（早稲田スポーツ科学研究科），射手矢岬（早稲田大学スポーツ科学学術院）

【目的】本研究は、柔道における肩車の上位者(肩車得意)と下位群（肩車不得意）の動作の違いを明らかにすることである。

【方法】国内レベルの選手（4 名）を対象とした。光学式モーションキャプチャシステムを用いて、肩車を施技する取と受の身体分析点の 3 次元座標値を得た。被験者（取）には普段通り投げるように指示した。肩車の分析区間は、取の脚の初動（離地）時点から受の脚がマットに接した時点までとした。取の左爪先が接地した時点までを「崩し・作り局面前半」、取の左膝関節角度の増大がみられる時点までを「崩し・作り局面後半」、受の脚がマットに接地するまでを「掛け局面」とし、各動作局面の時間を 100%として規格化した。

主な分析項目は、取の右上肢各関節角度、体幹関節角度、受の体幹傾斜角度で、上位者と下位群の平均値を比較した。

【結果と考察】上位者と下位群の平均の右上肢の各関節角度を比較すると、各関節角度の崩し・作り局面後半に共通して違いがみられ、特に肘関節伸展屈曲角度で違いがみられた（図 1)。上位者は右上肢に張りができるように動作させているのに対し、下位群は右上肢を脇を締め肘を曲げることで体幹に近づけるように動作させていた。体幹関節角度では、左右側屈角度と左右回旋角度でそれぞれ、上位者で側屈と回旋の角度変化が早期にみられた。受の体幹傾斜角度（図 2）では、上位者の受の角度が早期に減少していた。つまり、上位者の受は早期に崩れていた。

以上のことから、上位者の崩し・作り局面後半にみられた右上肢の張りが取の体重移動や胴体操作の運動量を受に伝えやすくし、受を早期に崩すことにつながったと考えられる。

【結論】取における肩車の上位者と下位群の動作の違いは、崩し・作り局面後半の右上肢の動作と体幹操作の素早さである。それらが受の崩れに影響を与えていたと考えられる。

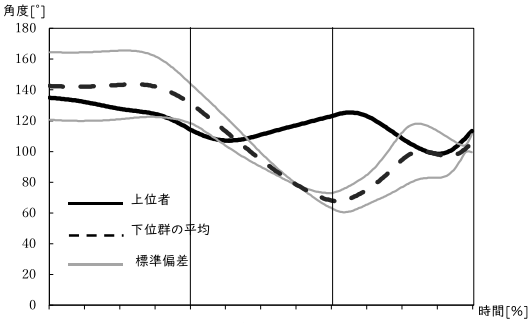


図 1　右肘関節伸展屈曲角度

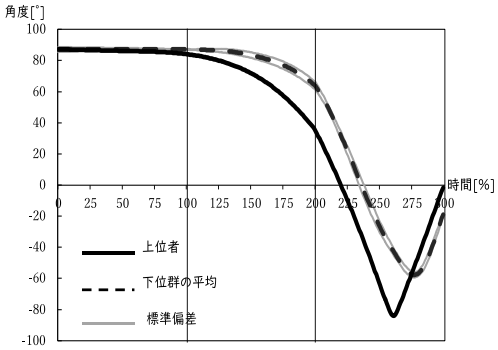


図 2　受の体幹傾斜角度

B-8

H反射による柔道選手の構えのメカニズムの解析

○長谷川 公輝[1]、射手矢岬[2]
[1]早稲田大学スポーツ科学研究科 [2]スポーツ科学学術院

【目的】

姿勢制御は日常生活を過ごしていく不可欠な要素であり、スポーツにおいては重要な運動スキルになる。スポーツにおける特有な姿勢の構えは運動の補助をしているが、その神経メカニズムについては不明である。構えは初心者指導の基本となるため、メカニズムの解明により指導への一助になると考えられる。本研究は、姿勢制御の一要素である脊髄反射機構の興奮性を H 反射法で解析した。立位と比べて柔道選手の構えである左右の自然体状態での、脊髄反射機序の変化について検討した。

【方法】

被験者を、神経疾患の既往歴が無い柔道競技者 10 名と未経験者 10 名とした。姿勢を立位と、左右どちらかの自然体の2姿勢それぞれを被験者が行い、姿勢維持の3～6分の間に、軸足(自然体の後方の足)の後脛骨神経を電気刺激した(図1)。ヒラメ筋上の EMG(表面筋電図)から、電気刺激で誘発された H 波(求心性神経由来)と M 波(遠心性神経由来)を記録した。電気刺激強度をH反射閾値以下からM波最大振幅(Mmax)活動強度 まで変化させ、リクルートメントカーブを作成した。リクルートメントカーブから正規化された Hmax を算出した。統計処理として、二要因分散分析(二姿勢:立位,構え ＊二経験:柔道経験,未経験)で比較した。

【結果および考察】

Hmaxは、立位姿勢より構え時に有意に高かった(図2)。しかし、経験での差は見られなかった。立位から構えた時の姿勢変化による、傾きを入力する前庭感覚や肢体の位置を入力する固有感覚、足底などの皮膚感覚などの、中枢神経系に送られる末梢神経系の入力情報量の変化が影響した可能性がある。

【結論】

構えの姿勢は脊髄反射回路の興奮性を“高める“神経興奮性変化メカニズムを有している。

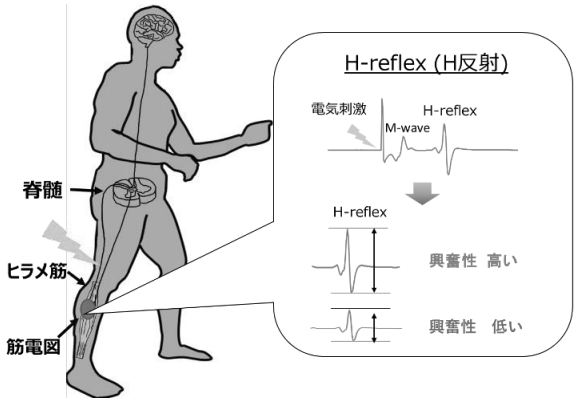


図1 H反射の誘発

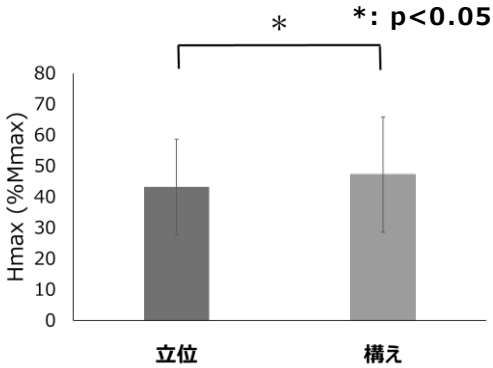


図2 姿勢間での Hmax の比較

B-9

異なる襟幅の柔道衣を用いた少年柔道競技者の背負投動作
-釣手と受に着目して-

○山本幸紀（筑波大学大学院），石井孝法（了徳寺大学），越田専太郎（了徳寺大学），岡田弘隆（筑波大学），藤井範久（筑波大学）

【目的】柔道における上肢外傷・障害発生を軽減させるため，傷害予防の観点から既存の柔道衣について問題点を明らかにする．また，少年柔道競技者の背負投動作における釣手に着目し，襟幅が異なることによる動作の変容を検証する．

【方法】本研究の対象は，小学生男子 10 名（年齢 10.0±1.49 歳，身長 1.40±0.09m，体重 36.5±5.75kg，競技歴 4.4±1.4 年）とした．実験施技は，取と受が相四つで組み合った状態から，背負投のかかり練習（投込）を受が自然体，自護体の 2 条件で行った．取には，自身のタイミングで動作を開始させた．受は抵抗しないように指示した．また，取には各施技後に 5 段階で技の質を評価させ，最も良い施技を分析の対象とした．なお，本研究では襟幅の異なる 4 種類の柔道衣を受にのみ着用させた．4 種類の内訳は襟幅が 2cm・3cm・3.5cm(国際規格)，4cm（子供用）である．取には身体に反射マーカーを 47 点貼付して行った．受は柔道衣を着用しているため頭頂，胸骨上縁，左右つま先，左右踵の計 6 点にマーカーを貼付した.3 次元動作解析 VICON-MX システムとカメラ 14 台を用いて得た座標値から，受と取の動作分析を行った．分析区間における取の釣手側肩関節最大外旋時点の肩関節水平内外転角度，肩関節から見た手首と肘の鉛直距離，取の体幹前傾角度を算出した．さらに，異なる受の姿勢，襟幅条件間の比較は，Bonferroni 法を用いて行った．

【結果および考察】受の姿勢が同じである場合,襟幅 3.5cm では他の襟幅より，取の釣手側肩関節が掛け局面前後で他の襟幅の施技より水平外転し，手首が肘より高い位置を示した．また，取の体幹が他の襟幅の施技よりも前傾していることが明らかとなった．さらに，掛け局面前後で，受の前傾角度（崩れ方）について襟幅 3.5cm では，襟幅 4cm の子供用よりも有意に小さい結果となった．これらの結果から，襟幅 3.5cm では，技を施した際の崩しが不十分になり釣手が残っていることがいえる．さらに取り自身の体幹が前傾していたことで，持ち上げる際に上肢の力を頼って相手を投げる姿勢になるため，上肢に負担の掛かる投げ方になっていた可能性が考えられる．襟幅 3.5cm（国際規格）の場合のみ，傷害リスクのある技の掛け方になっていた．子供用の襟幅 4cm，国際規格の襟幅 3cm・2cm の柔道衣は同じような傾向であった．そのため，子供にとって相手を崩し，傷害のリスクが少なく，理想的な技を施すには現行規格の襟幅では持ちづらく，釣手側上肢の傷害発生を及ぼす可能性が示唆された．
以上の結果から，少年柔道競技者の柔道衣は襟幅 3cm にするか，子供用の襟が柔らかい柔道衣を着用することで傷害予防に繋がる可能性が示唆された．

B-10

柔道における礼法に関する研究

○佐藤武尊(皇學館大学), 大木雅人(皇學館大学)
松田悠佑(皇學館大学大学院), 三宅恵介(中京大学), 横山喬之(摂南大学)

【目的】本研究は, 柔道選手を対象に礼法に関する評価を行い, 柔道選手が施す礼法, 特に立礼時の巧拙度合いについて現状を明らかにすることを目的とした。

【方法】被検者は柔道選手 108 名(小学生計 24 名, 中学生計 11 名, 高校生計 30 名, 大学生計 43 名)とした。被検者には,「あなたの思う正しい柔道の立礼を行ってください」ということのみを伝えて立礼を行わせ, その様子を4つのビデオカメラで前後左右の四方向から撮影を行った。各被検者の立礼の仕方に関して,「立礼を知っている事」を確認し,「上体の前傾角度」,「立礼に要する時間」,「手の位置」,「立ち方」の4項目で評価した。なお,「上体の前傾角度」を測定する為に, 被検者にはあらかじめ肩峰と大腿骨転子部, 外顆の3か所にマーカーを貼付し, Dartfish Express を用いて, 立礼時の腰角について二次元動作分析を行った。柔道における立礼の仕方に関する巧拙度合いを評価・点数化し, 各世代別の差について, IBM SPSS Statistics 23 を用いて一元配置分散分析を行った。その後, 有意差が認められた場合には多重比較 (Tukey-Kramer 法) を行った。「上体の前傾角度」,「立礼に要する時間」,「手の位置」,「立ち方」について, クロス表を用いて χ^2 検定を行い, 有意差が認められた場合は, 期待値と実際の頻度の差を検討する残差分析を行い, 各項目について世代別の比較検討に用いた。なお, いずれも統計学的有意水準については, 危険率５％未満 (P＜0.05) とした。

【結果および考察】柔道の立礼の仕方は, 世代が上がるにつれて, 点数が高くなる傾向にあった(Table 1)。また, 大学生は他の世代に比べ立礼の仕方に関する点数が高いこと, 高校生は小学生に比べて立礼の仕方に関する点数が高いことが確認された(Table 2)。これらのことから, 柔道においては年齢 (経験) が礼法の巧拙度合いに影響していることが推測できる。しかし,「上体の前傾角度」と「立礼に要する時間」に関しては, すべての世代において正しく行うことができている者が少なく, 特に「上体の前傾角度」は正しく行うことができている者が少なかった。これらのことは, 古くから伝え述べられてきた柔道の礼法に関する数的な規定 (上体の前傾角度は 30 度や立礼に要する時間は３～４秒など) と指導する側の実際の運動感覚が異なっている可能性があり, この指導する側の運動感覚の“ズレ”が柔道修行者が正しい礼法を行う事ができない一つの要因になっているとも考えられる。

Table 1 各世代における立礼の仕方に関する点数の平均値

世代	点数 (点)				
	人数	平均値	最大値	最小値	標準偏差
大学生	43	3.23	4	1	0.68
高校生	30	2.67	4	1	0.80
中学生	11	2.27	4	1	1.01
小学生	24	2.13	3	1	0.68

Table 2 各世代間における立礼の仕方に関する点数の平均値の差の比較

世代	大学生	高校生	中学生	小学生
大学生				
高校生	0.57 ＊			
中学生	0.96 ＊	0.39		
小学生	1.11 ＊	0.54 ＊	0.15	

(点)

＊ : P ＜ 0.05

B-11

対人競技におけるレイティングを用いた競技力評価法の開発

○石井孝法（了徳寺大学），廣川充志（桐蔭横浜大学）

【目的】記録系競技や採点系競技は，パフォーマンスを数値（時間や採点結果など）で表すことができる．この数値は，試合の勝敗だけでなく，客観的に評価ができる点でコーチングにおいて有用である．しかしながら，対人競技においては競技力の数値化が非常に難しい．キネシオロジーの各領域の知識と手法で評価し，それを後で足し合わせる方法（要素還元主義的方法）には，限界がある．柔道競技においてはAnalytic Hierarchy Processを用いて競技力評価尺度の妥当性が検討されているが（前川ら、2014)、この方法はリーグ方式で精度が高くなる特徴を持つ。本研究の目的は、競技力と技能因子の数値化を行い、それらの関係および競技力に影響を与える技能因子を明らかにすることである。

【方法】被験者は、同一の大学柔道部に所属し、全日本学生柔道優勝大会に出場予定の競技者12名とした。被験者には、本人以外の2者のすべての組み合わせで、競技力に関する12項目についてどちらが優れているかを質問し、1項目あたり660(55通り×12名)の回答を得た。質問項目は、柔道の強さ(競技力)、組手の厳しさ、組手のスタイル、技のキレ、技の粘り、技の多彩さ（返し技を含む)、受けの強さ、寝技の強さ、試合運び（進め方）のうまさ、柔道の力の強さ、スタミナ、メンタルの強さであった。Elo レイティングを用いてそれぞれの項目のレイティング値を算出した。本研究では、回答順の影響を除外するため、回答をランダムに並び替えて、レイティング値が収束するまで、計算を繰り返した。柔道の強さとその他の技能因子のレイティング値の相関係数を求めた。また、柔道の強さを従属変数として、その他の技能因子を独立変数としたステップワイズ重回帰分析を行い、重回帰式を求めた。

【結果および考察】競技力に関する12項目中11項目は、繰り返し回数50回以内にデータが収束したが、「柔道の力の強さ」が300回程度で収束する結果になった。すべての項目でデータ変動の収束がみられたため、各項目の収束した値を大学競技者のレイティング値とした。競技力と他の技能因子で相関が有意であったものは、組み手のスタイル($p = 0.009$, $R^2 = 0.401$)、寝技の強さ（$p = 0.001$, $R^2 = 0.615$)、試合運び($p = 0.029$, $R^2 = 0.323$)、柔道の力の強さ($p = 0.003$, $R^2 = 0.222$)」であった。表１は、競技力に影響する技能要因の検証結果である。競技力に影響する技能因子は、組手のスタイル、受けの強さであり、競技力の増減に最も影響を与える因子は組手のスタイルであった。

表１　競技力に影響する技能要因の検証

線形回帰モデル：競技力 ~ 1 + 組手のスタイル + 受けの強さ

	係数の推定値	標準誤差	t 統計量	p 値
定数項	-1961.5	499.5	-3.927	0.003
組手のスタイル	1.250	0.338	3.700	0.005
受けの強さ	1.057	0.217	4.880	0.001

決定係数：0.864、自由度調整済み決定係数：0.833、p 値は 0.0001

B-12

聴覚障がい者柔道日本代表選手の練習環境における障壁の検討

○瀬川洋（広島国際大学），廣瀬伸良（順天堂大学），山田泰行（順天堂大学），竹澤稔裕（順天堂大学）

【目的】これまで聴覚障がい者を対象にした柔道に関する研究は散見されない。視覚障がいを持つ柔道競技者が出場するパラリンピックがあるように、聴覚障がいを持つ柔道競技者にもデフリンピックという国際的なスポーツ大会があり、柔道競技でも過去金メダリストを輩出している。
聴覚障がい柔道競技者は健常者柔道競技の競技現場において少人数で活動することが通常的であり、健常者中心の指導の中で個別対応を余儀なくされることが多い。このことは、聴覚障がいを持つ柔道競技者のパフォーマンス向上にも負の影響を与え、競技現場における効果的なコーチングが行われていない可能性が考えられる。
本研究では、聴覚障がい者柔道競技（以下デフ柔道）におけるデフリンピックおよび世界ろう者柔道選手権大会などの日本代表経験のあるトップアスリートを対象として、競技を行っている現場や練習環境、コーチから指導を受ける場面において障壁となっている具体的な事柄を明らかにし、デフ柔道における競技現場での障壁要因を体系化して検討することで、デフ柔道競技特有のコーチング手法の構築と処方に有効である知見を得ることを目的とした。

【方法】研究対象者は ICSD（国際ろう者スポーツ委員会）公認大会である夏季デフリンピック、世界選手権大会、アジア選手権大会柔道競技に出場経験、日本代表選手として選出された経験のある男子デフ柔道選手８名とした。
調査方法は数値化できる基本的属性等を調査する質問紙法と口話、筆談を用いた半構造化面接によるインタビュー調査を行い、記録した音声や筆談記録を元に逐語化した。
分析方法はインタビュー言語データから、障壁（バリアー）に相当するエピソードを収集し、KJ 法による構造化を行った。またテキストマイニングによる構造化を合わせて行い、頻出単語の特定と、頻出単語間の関係性をコレスポンデンス分析によって可視化した。分析ソフトは KHCoder3 を使用した。

【結果および考察】
研究は進行中で、詳細は大会当日に報告する。

C-1

知的障害特別支援学校の体育授業における「空手道」の実践

○清野宏樹（北海道釧路養護学校）越川茂樹（北海道教育大学釧路校）

【目的】本研究は，知的障害のある生徒たちの武道の授業として「空手道」を取り上げ,その学習の可能性と課題を明らかにすることを目的とした.「空手道」を取り上げた理由は，特別な用具を使用することなく行え，生徒たちが比較的容易に武道の醍醐味に触れることが可能であり，なおかつコロナ禍でも適切な距離を保ちながら実施できると考えたからである.

【方法】対象は，高等部 1～3 年生 35 名で知的障害や自閉スペクトラム症等のある生徒たちである. 本研究では,授業における生徒の活動の様子を観察・記述するとともに，授業後に得られたデータを質的に分析した.

【結果】○単元計画：学習のねらいを「礼節を守り，突きや蹴りを思い切り出して楽しもう！」と設定し,全 3 時間の授業を計画した. その際，空手道では,自由組手で相手と技を競い合うところに魅力があるとおさえた.それに応じて,授業前半は,突きや蹴りを試行する時間として,突きや蹴りの動きの真似や教師が持っているパンチングミットに向かってジグザクに動いて突きや蹴り，新聞紙試割りを行うこととした. 授業後半は,自由組手を実施することとした.

○授業における生徒の様子：授業の前半は，基本から行い，自分の胸の正中線を目がけて突きや蹴りを行った.どの生徒も真剣な様子で行っていた.突きを真っ直ぐ出す行為に戸惑う生徒も見られた. 蹴りでは，前蹴りや回し蹴りを行った.サッカーのシュートとの違いを実際に見せ,蹴りは,膝を抱えてから真っ直ぐ出すと威力が増すことを伝えると「なるほど！」といった様子で見様見真似で行っていた.次に，前屈立ちの突きや蹴りを行った.バランスを取りながら突きや蹴りを出し徐々に勢いよくなっていった. 自由組手の構えから突きや蹴りを行うとさらに,真剣な様子で出していた.その後,個々の教師がジグザグにミットやサンドバックを持ち，生徒が順番に刻み逆突きを 2 回程行い，最後に回し蹴りを行った.ミット目がけて思い切り突きや蹴りを出していた.実際に突くことで表情は真剣さを増していた. 回し蹴りも勢いに乗って出したりゆっくりと出したりする者が見られた. 新聞試割では，よく見ながら突きを破れるように集中して出していた. 授業の後半は，自由組手の最初は，戸惑っていたが，教師が無防備の状態で助言すると突きを中心に出していっていった. 2 回目になると，やってみたい生徒が増え，突きを出す生徒が増えていった. 慣れてきた生徒は,タイミングや相手をよく見て突きや余裕が出ると蹴りも出していた. 最終日は，全員試合形式で行い，自分のペースで突きを中心に時折，連突きや蹴りが入る姿も確認された.

【結論】適切な距離を保ち,基本の突きや蹴りを意識して行うことができた. 特に,回し蹴りが楽しい様子で,真剣な表情で蹴り足を回転させていた.ミットや新聞試割では，実際に突きや蹴りを打ち，夢中になって行っていた. 自由組手では，寸止めの為，余り恐怖心を抱かずに適切な距離で，突きを中心に対戦することができたことから「空手道」の学習の可能性が示唆された. 今後は，多くの時間を確保し計画することで，実際に突きや蹴りを打つ様々な場づくりやバリエーションの豊かさ，自由組手の醍醐味を味わえる工夫が課題とされる.

C-2

柔道療育の有効性の検討
-自閉スペクトラム症の児童を対象として-

○小崎亮輔（鹿屋体育大学），内村香菜（合同会社笑光），小澤雄二（鹿屋体育大学），藤田英二（鹿屋体育大学），河鰭一彦（関西学院大学），佐藤博信（関西学院大学），濱田初幸（鹿屋体育大学）

【背景】

文部科学省（2012）は、通常学級に在籍する児童の 6.5%が発達障害を有している可能性があると指摘している。発達障害の中でも桑原（2013）は自閉症に対する認知度が高まり，自閉症から自閉スペクトラム症（以下，ASD）への診断基準の拡大が加わったことでその有病率はこの数年急増していると述べている。さらに日本では、2004 年の発達障害者支援法の制定に伴い「発達障害者」とされる人々への注目が高まったとともに、ASD を社会的な視野から論じる試みも見られるようになってきた（高木，2018)。一方、Green（2009）は ASD 児の約 8 割が運動障害を呈していることを報告している。このような ASD 児の運動面の困難さなどから発展することの多い対人関係や社会性の問題に関して、幼少期からの集団活動を効果的に用いることで、対人関係や社会性が広がったという報告もされている（是枝ら，2007)。そうしたことから是枝（2014）は、身体運動面に視点を当てた適切な支援を早期の段階から実施していくことは喫緊の課題であると述べている。日本では、以上のような ASD 児をはじめとした障害を持つ児童や生徒を対象に、将来の自立や社会参加を促す発達支援である療育が普及され始めている。特に 2012 年に児童福祉法で位置づけられた療育施設である放課後等デイサービスについては利用者が年々増加しており(厚生労働省，2021)、社会的なニーズが伺える。この放課後等デイサービスでは施設により様々な療育が実施されているが、鹿児島県鹿屋市には柔道を用いた療育活動である「柔道療育」を専門的に実施している放課後等デイサービスがある。柔道療育は全国的に稀有な療育活動であるが、近年では当該施設の活動が南日本新聞（2019）やテレビ（NHK 等，2019）などのメディアに取り上げられており、その内容や効果が注目されている。これまでには作業観察やフィールド調査による利用児の行動変容について報告がされている(後藤ら,2020；内村ら,2020)が、柔道療育については今後も更なる検討、研究が必要であると考える。そこで本研究では ASD 児を対象として、柔道療育の有効性を検討することとした。

【方法】

本研究では柔道療育の指導責任者と対象児の保護者に対して、2020 年 9 月に聞き取り調査を実施した。また筆者が 2020 年 4 月から 9 月にかけ、当該施設の柔道療育活動に数回参加し、フィールド調査を実施することで対象児の変化を検討した。

【結果】

作業観察からは遊び方の変化、他者とのコミュニケーション方法の変化、発語の変化や回転系の運動の習熟度等の変化が示唆された。その他の結果については、当日の発表で公表するものとする。

C-3

脳性麻痺と闘う剣道愛好家への指導を通して見える武道の可能性

～競争社会から共創社会へ～　その３

*三苫 保久[1]、渕上　博昭[2]、東山 明子[3]、Nicholas Paul Ruppel[4]

（1.滋賀県立大津清陵高等学校、2..心合武館、3.大阪商業大学、4..立命館大学）

Possibility of Budo, seen through teaching Kendo enthusiast fighting cerebral palsy

【はじめに】

発表者らは，2015 年 6 月より，障害者，在日外国人，外国人留学生，地域の未就学児・就学児・不登校だった高校生等に武道を通して共生・共創社会の実現を目指す「びわこバリアフリー剣道クラブ」（以下クラブとする）を主宰している。今回は，脳性麻痺を持つ N（26 歳男性，剣道経験歴 8 ヵ月）への指導実践を通して，得た知見を報告する。

【N が剣道を始めようとした動機】

N は，アメリカ合衆国に生まれ，脳性麻痺と診断された。少年期にいじめにあい，母親の勧めもあり，テコンドーを実践した時期もあった。従兄宅に木刀があり，「ちゃんばら」をしたことが，剣道との出会いであった。日本のアニメとゲームについて学ぶため，2019 年 9 月 R 大学に入学し，同大学所属のクラブ員 K の紹介で，2020 年 11 月クラブの合宿に参加した。日本の文化を学ぶことができると考え，以後クラブに参加し，現在木刀による剣道基本技稽古法を習得し，初段取得を目指している。

【N の感想】

剣道を通して，会員との交流で，日本語を学ぶことができるので楽しい。先生方は剣道の哲学や日本の歴史を教えてくれるので，大変勉強になる。同じ脳性麻痺で空手と心合道の先生もいらしたので，驚いた。剣道を学び，従兄に本当の剣道を教えたいと思っている。

【N への指導を通して得た指導上の知見】

① 右手が麻痺側で，竹刀を振り下ろした際滑るが，輪ゴムを補助具に使うと解消される。
② 市販の小手をはめると，麻痺側に負荷がかかるが，五本指の小手を使うと軽減する。
③ すり足での移動が困難なため，歩み足での移動を可とし，基本原理の習得を目指す。
④ 竹刀よりも柔らかい袋竹刀を使うことで，双方に安心感が生まれ，かつ打突部位を打つのでなく，寸止めすることで氣のはたらきが生まれ，氣を感じあうことが促進される。

【まとめ】

脳性麻痺者への剣道指導で，輪ゴムや五本指の小手を使用することで，麻痺側のサポートが可能であることが分かった。また，袋竹刀を使うことで，安心感が生まれ，かつ氣のはたらきの感受性が高まることが示唆された。脳性麻痺にもさまざまな症状があり，それぞれの症状に対しての対応を工夫することがバリアフリーを推進し，これからの共創社会における武道の可能性を広げることに繋がると考える。

C-4

体落としのバイオメカニクス的解析
―柔道初級者の効果的な指導法の確立―

○楢﨑教子（福岡教育大学），渡辺涼子（金沢学院大学）

【目的】柔道の技術指導の難しい点の一つとして、指導者が体得した投げ技のポイントやコツを学習者に伝達することが挙げられる。学習者は、指導者の指導助言と学習者の身体感覚を頼りに技術の修正に取り組むが、実際には足の位置や姿勢が 10～20 ㎝程度ずれている場合がある。そこで本研究では、初級者に正しい技術を習得させるため、柔道の修業年数 10 年以上の中級者を対象に、体落としの動きを定量的に分析することを試みた。また、柔道の修業年数 15 年以上の上級者を対象に、体落としのコツや動きの意識、コツ獲得までのプロセスなどの暗黙知を形式知化することにより、初級者の効果的な練習方法や指導法を導き出すことを目的とした。

【方法】本研究では、中級者（男子 2 名）を対象に体落としの動きを定量的に分析するため、マットに固定した模造紙（60cm×1.5m）を用いて足の位置を計測した。受けには、模造紙の中央から左右へ 25cm の位置につま先とかかとを合わせて右自然体で立つように指示した。取りには、足の指に朱肉をつけてから組みやすい姿勢でマットの上に立ち、受けと相四つに組むように指示した。足の位置は、左右を X 軸、前後を Y 軸とし、踏み込み足を(X1,Y1)、送り足を(X2,Y2)、かけ足を（X3,Y3）と規定した。上級者（女子 1 名）を対象に、体落としのコツなどの暗黙知を形式知化した上で、中級者の動きの課題を抽出した。さらに、中級者の動きを改善する練習方法を考案し、1 回 30 分程度の反復練習を約 1 ヶ月半（15 回）継続させ、運動介入後の足の位置を計測した。体落としの動きを iPhone XR により 1080p/30fps で撮影し、myDartfish Express（ダートフィッシュ・ジャパン）を用いて動作分析を行った。

【結果および考察】中級者の動きの課題は、X 軸における踏み込み足と送り足の足幅（X2-X1）が、投げる方向とは逆に大きく開くこと、送り足とかけ足の足幅（X3-X2）が広いことが挙げられた。運動介入前後の足の位置を比較すると、中級者 A は X2-X1 が 11.1（cm）、中級者 B は X2-X1 が 11.3（cm）短くなった。また、中級者 A は X3-X2 が 4.1（cm）、中級者 B は X3-X2 が 23.9（cm）短くなった。角運動量保存の法則を利用して、手足を小さくまとめて回転半径を小さくすると、回転速度が大きくなることから、大きなパワーを発揮するには体落としの基礎的技術を改善する必要がある。具体的には、X2-X1 はできる限り狭くし、投げる方向に作用するように働きかけることが望ましい。また、X3-X2 については肩幅よりは広いが、下肢のパワーが安定して発揮できる程度の足幅であることが理想であると考えられる。

C-5

柔道における身体的「バネ」の特徴～内股を用いた比較～

○大嶋悠正（筑波大学大学院），増地克之（筑波大学），岡田弘隆（筑波大学）
平岡拓晃（筑波大学）

【目的】柔道競技における「バネ」には明確な指標がないことに加えてその意味も非常に曖昧なものである．松田（1999）はその著書の中で「バネをきかせる」「膝のバネをためる」と「バネ」を様々な解釈の余地を残して記している．また佐藤（2015）による先行研究では，柔道選手を対象に「バネ」に対する意識調査を行った結果，全体の 85%もの人が下肢及び下肢中の関節と体幹下部に存在すると回答した．さらに同調査では，「バネ」が指す意味に対しての調査も行われており，柔道競技者の指す「バネ」とは「一つの身体的な機能」であり，その意識は「力強さ」や「パワー」，「柔軟性」，「瞬発力」に依存している可能性を示した．よって本研究では，柔道における「バネ」が下肢及び下肢関節，体幹下部に存在すると仮定できることから，下肢筋力の測定及び極めて短時間内でのパワー発揮能力を評価するための特化した運動様式であるリバウンドジャンプ（以下;RJ），荷重を加えた状態によるスクワットジャンプなどのジャンプテストを実施し，内股を得意とする柔道選手の身体的「バネ」の特徴を明らかにすることを目的とした．

【方法】被験者として柔道競技における大学及びシニア大会の上位入賞経験のある軽中量級選手 10 名を選出した．年齢は 20.1 歳（SD±0.83），体重 69.1kg（SD±4.32）であった．この中から内股を得意とする群 4 名と得意ではない群 6 名に分類した．
測定項目は以下の通りである．
①下肢筋力測定（スクワット，レッグカール，レッグエクステンション）
②内股施技時における足の振り上げ動作の筋力計測
③各種ジャンプ系テスト

②の内股施技時の計測においては microFET2 を用いて行った．③ではフォースプレートを用いて跳躍高，接地時間，滞空時間，RJ 指数を計測した．また RJ 以外のジャンプ系テストにおいては跳躍高,接地時間,滞空時間等を計測した．

【結果および考察】①の項目において計測された数値を被験者のそれぞれの体重で除した，体重比で分析を行った．その結果，右足のレッグカール以外の項目において有意差は認められなかった．これは内股を得意とする選手であっても内股だけではなく，試合や練習の中で他の様々な施技が用いられるために不得意な選手と比較して筋力的な差異が発生しなかったと考えられる．またスクワットにおいては両足のしゃがみこみ動作が内股の施技動作と大きく異なっている．このことからスクワットのオーソドックスなフォームではなく内股という技特有の動作に基づいて新たなスタイルで計測を行う必要性があると考えられる．②，③における結果並びに考察に関しては当日発表する．

C-6

柔道の攻防を学ぶ学習プログラムの提案

○有山篤利（追手門学院大学）・宝正隆志（出雲市立大社中学校）
岡﨑綾子（島根県教育庁保健体育課）・山本浩二（関西福祉大学）

【目的】　現行の学習指導要領によれば，柔道授業には「基本動作や基本となる動き」を相手に応じた「攻防」として組み立てることが求められている（文部科学省，2018）。そのため，柔道の攻防は単に得意技をつなげるという一方通行の主体性を発揮するだけで成立するものではなく，常に防御側とのやりとりを含んだ，技に至るまでの連続した様々な動きのまとまりとして把握せねばならない。しかし，これまでの柔道授業では，個々の投げ技の完成に目を奪われるあまり，技と技との間をつなぐ相対的な動きを学習することがなく，試合になれば柔道らしい攻防を見ることが出来ないのが現状であった。すでに先行研究により，剣道授業において打突の基本練習と試合との間に乖離が見られる事が指摘されている（有山・村崎，2016）が，それは柔道にも同様に見られる課題である。そこで，本研究では，柔道の効果的な攻防を育むために，柔道の「かけひきの動き」の概念化に取り組むとともに，それに基づく学習プログラムの作成と効果検証を行なうこととした。

【方法】　柔道らしい攻防を実現するためには，技と技をつなぐ「かけひきの動き」を学ぶ必要がある。はじめに，手掛かりとなる柔道の「かけひきの動き」の概念化に取り組んだ。5 名の世界･全国大会レベルの熟練者への聞き取りをもとに作成された,「かけひきの動き」に関する仮説的構成概念より 45 項目の設問を設定し，全国レベルの大学柔道部所属選手（111 名）を対象に質問紙調査を実施した。その結果,「拍子の攻防」「気配の攻防」「組み手の攻防」「間合いの攻防」の 4 因子を抽出した。その後，この 4 つの攻防を習得するための学習プログラムの作成を行った。プログラムは,「組む前の動き」と「組んだ後の動き」に区別され，予備実験を経たのちに，それぞれの攻防に対応する合計 23 の学習にまとめられた。また，その学習効果の検証を S 県内公立中学校 1 年生（男子 68 名，女子 76 名）にて行った。具体的には，通常の柔道授業 10 単位時間終了後，作成されたプログラムを 2 単位時間実施したのち，質問紙調査により「かけひきの動き」に関わる戦術的思考の変化を測定するとともに、動作分析ソフトを用いて学習者の実際の動きの変容を検討した。

【結果および考察】　戦術的思考の変化は,「拍子の攻防」「間合いの攻防」「組み手の攻防」の 3 因子において有意な向上がみられた。学習者実際の動きについては,「拍子の攻防」「間合いの攻防」「気配の攻防」に対応する分析項目の多くで有意な向上がみられた。以上の結果を総合し，本研究において提案された学習プログラムの妥当性が示唆された。

【結論】　柔道の「かけひきの動き」は,「拍子の攻防」「気配の攻防」「組み手の攻防」「間合いの攻防」の 4 因子によって構成され，これらの習得をはかる学習プログラムを実施することで，初心者であっても柔道らしい攻防を育むことが可能である。

C-7

柔道における「相性」に関する意識調査

○光田　隆哉（筑波大学大学院），岡田　弘隆（筑波大学）

【背景】柔道において相手を研究するために様々な取り組みがあり、その中の一つに競技分析がある。ポイント数や罰則の数などを評価項目としており、対象については世界レベルの大会から、全日本大会、学生大会、小学生の大会など様々な年代で行われている。世界大会などについては近年のルール変更に伴い特に多く行われており、国際大会で成績を出していく上でとても大切である。競技分析を行ったうえで、その相手と戦う際に選手と比較したりしている。そのような状況において、比較した柔道の内容について「相性」という言葉を用いて表現することがある。どのカテゴリーにおいても使われており、相手と「相性」が良い又は悪いといった形で使われることが多い。しかし、多くの場面や人が使用しているが「相性」そのもの自体をはっきりと比較するための基準があるわけではなく、試合を分析し自身の柔道を選手やコーチが主観的に比較していることがほとんどである。

【目的】柔道選手が「相性」という言葉についてどのように考えているか、また相手との「相性」についてどのようなことを重要視しているかを明らかにすることを目的とした。

【方法】

1. 対象者

今回の研究では大学柔道選手に対して、オンライン上でのアンケート調査を行った。大学については、全国大会出場常連校を対象にした。

2.調査内容

具体的な内容については、前川ら（2013）が作成した柔道競技力の重点評価項目を参考にして作成し、組手、試合のうまさ、相手の特徴（身体的、メンタル、技についてなど）についてどれほど重要視しているかを五段階評価で聞いている。

具体的な質問項目については以下の通りである。

・属性に関する質問
・自身の柔道スタイルに関する質問
・「相性」という言葉についての質問
（使用したことがあるか、表現方法など）
・相手との「相性」についての質問（同階級と無差別の場合）
（重要視していることについて）

【結果及び考察】

結果の詳細については当日に報告する。

C-8

大学女子柔道選手における稽古中の傷害発生と心理的コンディション

○川戸湧也（仙台大学），南條充寿（仙台大学）

【目的】柔道は，年間をとおして稽古が行われ，大会が開催される．このような競技特性から，競技力を高めるためには，日々の稽古と並行して適切なコンディショニングを行う必要がある．そこで，選手の日常的なコンディションを把握するために，本研究では心理的コンディションに着目をしてその得点推移について検討した．加えて，稽古中に発生した傷害についてその状況を記録した．本研究では，心理的コンディションと傷害発生の関連性について事例的に検討し，競技力向上に資する知見を得ることを目的とした．

【方法】本研究の対象は，A 大学柔道部に所属する大学女子柔道選手 43 名であった．対象者らは，いずれも体育学部に所属し，体育スポーツ健康科学について専門的に学ぶ学生であった．研究期間は 2021 年 4 月 5 日から 5 月 31 日までとし，柔道部の活動が行われない日曜日を除いて朝と稽古前に「二次元気分尺度（Two Dimension Mood Scale ： TDMS)」を用いて心理的コンディションを評価した．TDMS は，活性度，安定度，快適度，覚醒度の 4 つの尺度から対象者の気分を得点化し，その変動について評価・検証する質問紙である．さらに研究期間中の稽古もしくはトレーニングによって受傷した学生については，①傷害部位，②傷害発生状況，③月経の有無，の 3 点について記録し，TDMS の各尺度の得点との関連性について整理した．

【結果および考察】対象者全体の活性度，安定度，快適度，覚醒度の推移は，図 1 に示すとおりであった．期間中に受傷した学生の得点に着目したところ，得点と傷害発生に関係性は認められなかった．しかし，受傷した日の得点は，それぞれの平均値よりも高くなっている対象者がおり，心理的コンディションが高い日に受傷しやすい可能性が示唆された．

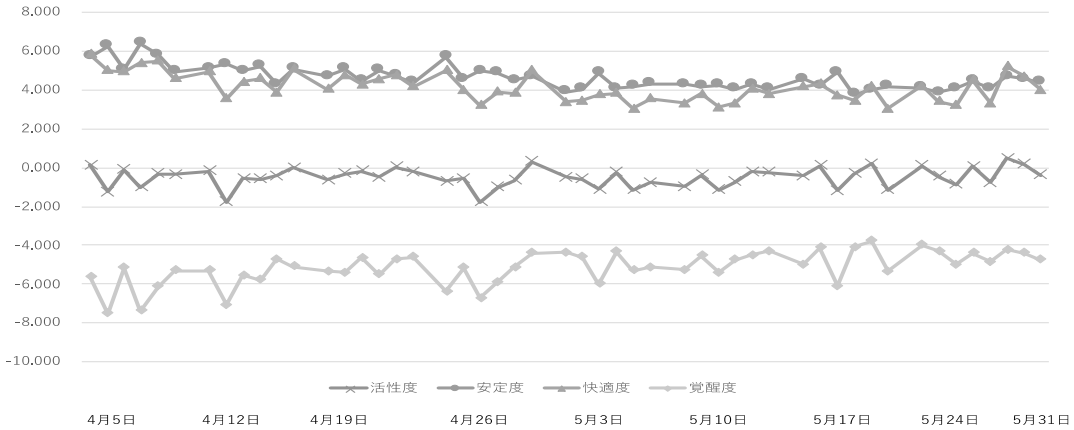


図 1．TDMS 各得点の推移

C-9

武道の授業前後におけるライフスキルの変化

○高坂正治，荒川尊祐，立木幸敏，前川直也（国際武道大学）
中島正樹（富士見丘中学高等学校），藤原豊樹（東京理科大学）
秋元宏介（少林寺拳法連盟），安田智幸（金光学園中学高等学校）

【目的】「少林寺拳法の授業におけるライフスキルの変化」高坂他（2018～2020）によると,団体演武の取り組みはリーダーシップを学ぶのに効果的であること，授業展開の違いによってライフスキルの獲得に差異があること等が示唆された。本研究では，少林寺拳法，柔道，空手道の授業前後におけるライフスキルの変化について検証・分析を行った。

【方法】A 中学校（少林寺拳法）2 年生 94 名，B 中学校（柔道）1 年生 23 名，2 年生 39 名，C 中学校（空手道）1 年生 156 名，2 年生 188 名を調査対象とし,「学校体育における武道関連ライフスキル尺度」を用いて，第 1 時間目の授業の始めと最終授業の終わりに質問紙調査を実施した。授業時間前後における調査について，二要因分散分析を行った。分析は統計解析アドインソフト・エクセル統計 for Windows®を用いた。

【結果および考察】

項目 11「やるべきことをてきぱきと片づけることができる」について，交互作用が見られたが，各校とも授業前後において有意差はなかった。項目 19「悲しくて泣いている人を見ると、自分も悲しい気持ちになる」について，交互作用が見られ，C 中学校の授業前後において有意差があり，値が上昇した。団体形の演武発表に向けてグループ内において活発なコミュニケーションが行われたことが影響していると考えられる。

A 中学校はリーダーシップと礼儀に関する項目について授業前後において有意差が見られ値が上昇した。4 人グループで技を考える時間を設定したこと，技の練習の中で繰り返し礼儀作法を行ったこと，毎時最後に武道の教えを説明したことが影響したと考えられる。B 中学校はリーダーシップと前向きな思考の項目について授業前後において有意差が見られ値が上昇した。1 つの技を学ぶごとにリーダーを決めてグループ学習を行い，リーダーを中心に技の動画を収録したタブレットを活用して話し合いを行わせたことが影響していると考えられる。C 中学校はリーダーシップ，礼儀，前向きな思考，共感性について授業前後において有意差があり値が上昇した。3 人グループでの学習時間を多く設定し，団体形の演武発表を目標にして取り組ませたことが影響していると考えられる。

【結論】空手道の団体形の取り組みは，共感性の向上に影響があることが示唆された。団体形をつくり上げていく過程での教え合い，学び合いや形を行う際に動作や呼吸を合わせ，間を共有するなど，協調性を養うとともに他者理解へとつながった結果ではないかと推察される。「形」による武道授業の特性の一つであるといえる。今後さらに武道の特性を生かした授業内容や展開方法などについて研究を進めていきたい。

C-10

中学校保健体育科「武道」領域における「かた」学習プログラムの開発に関する研究

○菊本智之（常葉大学）

【目的】平成 20 年 3 月の中学校学習指導要領に、第 1、第 2 学年の保健体育で「武道」の必修が明記され、平成 24 年度からは完全実施となった。その後、平成 29 年度に現行の中学校学習指導要領が告示され､令和 3 年度からはこれが完全実施となっている。その背景には、平成 18 年 12 月に約 60 年ぶりに改正された教育基本法の第二条「教育の目標」で「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと｣が明記されたことや平成 20 年 1 月の中央教育審議会の答申で､｢武道については、その学習を通じて我が国固有の伝統と文化に、より一層触れることができるよう指導の在り方を改善する」ことが示されたことが直接影響していることは間違いない。改善の基本方針でも「保健体育科では、武道の指導を充実し、我が国固有の伝統や文化に、より一層触れることができるようにすることが重要である。」とされている。以来、授業者はこの学習指導要領の目的、目標を実現すべく、より良い授業づくりに潜心し、学習者により効率的で効果的な授業内容を授けるべく模索し続けているが、多くの授業者が我が国固有の伝統や文化について漠然と、また様々な認識を持つ状況の中で授業が展開されている。これまでにも現場教員によって数々の実践、提案がなされ､体育科教育､教育学の分野からも研究成果がいくつも出されたが、未だ全ての中学生が学ぶ単元の教材として､｢武道｣学習については、多くの課題が残されている。現在の「武道」領域の教材開発を念頭に「かた」学習のプログラムについて検討する。

【方法】体育科教育の分野における先行研究についてレビューを行い､｢我が国固有の伝統と文化」と「武道」の概念について再検証する。また、義務教育である中学校の単元における「武道」の位置づけについて検討する。各方面で紹介されたり、提案されている教材や単元計画について、中林、前林らの武道における「型」論から、現代の義務教育における学習論としての武道教材について検討する。

【結果および考察】中教審の｢（３）伝統や文化に関する教育の充実｣の中で｢伝統や文化についての深い理解は、他者や社会との関係だけでなく、自己と対話しながら自分を深めていく上でも極めて重要である。」とされ、対人性（2 人称）のみならず、1 人称の科学、評価者、観衆といった 3 人称の学びも意図されるべきであることが期待されている。一見、現代教育において合理的でないように見える「かた」は、それぞれのレベルや個々の条件に採り入れることができるエキスが凝縮したものといえ、初心から高いレベルまであらゆる段階に適応できる可能性がある教材と成り得る。

【結論】義務教育という我が国のすべての中学校第 1 学年、第 2 学年で取り扱う教材という観点から､｢武道｣領域の学習の原理として「かた」を通した学習プログラムを開発することは､｢武道｣領域の単元に有効な教材化が可能である。

C-11

学校における空手道授業の指導成果と課題

○井下佳織、豊嶋建広、橋本富太郎(麗澤大学)、岡﨑紀創(全日本空手道連盟)

【目的】現在、中学校における空手道授業の実施校数は、約 10 年で急激に増加してきている。しかし、これまで空手道授業に関する具体的な成果や課題を検証した報告はほとんどみられない。今後、空手道授業の実施形態、指導成果や課題の抽出、および実践的研究が必要である。そこで本研究は、武道種目（空手道）を実施する上での指導成果と課題を明らかにし、それらの課題解決策を探ることを目的とした。

【方法】全国の空手道授業実施校の教員を対象とし、武道（空手道）授業の「指導成果と課題（指導体制・方法・指導内容の工夫等)」に関するインターネットによる調査を実施した。全日本空手道連盟が公表している空手道授業実施中学校 450 校とそれらの所在市区町村教育委員会、全国の都道府県および政令指定都市に郵送による調査を依頼し、153 校の回答を得た（回収率 34%)。また、千葉県 C 中学校（1～2 年生 197 名）および東京都 S 中学校（2 学年および特別支援学級 165 名）において、空手道授業（外部指導者）の 1 時間目の授業後に生徒を対象として空手道授業に関する調査を実施し、362 名から回答を得た。

【結果および考察】令和 2 年度に空手道授業を実施した学校は、153 校中 99 校（64.7%）で、実施場所は体育館（81.8%)、配当時間は 6～10 時間（約 55%)、実施時期は 10～1 月（約 60%）が多かった。約 80%が男女共習で実施しており、そのうち基本動作が 90%､基本形が 60%と男女共習が多かった。空手道授業は｢用具・道着が不要｣､｢直接の接触がなく安全に実施できる｣等強みはある一方で、「教員の指導力」や「外部指導者の確保」等の課題が明らかになった。｢ケガの発生の有無｣では授業内外で 4%と極めて低い値であった。90%以上の生徒が｢礼法や基本動作のわかりやすさ｣､｢安全にケガなくできた｣の項目で「そう思う」「だいたいそう思う」の評価であった。生徒を対象とした調査では、70%の生徒が「空手道に対する興味・関心」、「礼儀・礼節」、「相手を尊重する意識・態度」、「課題解決能力や工夫」の項目において学習効果を実感していた。

また、次年度以降の空手道授業導入に関しては 153 校の回答者の 6 割（56%）が「予定」があると回答している。「導入予定の理由」においては、「思考力・判断力・表現力の習得」や「体力の向上」などの効果の面よりも「安全性が高い」、「用具が不要」、「男女共習が可能」、「道着不要」等の授業の実施しやすさが評価されていた。今後は「効果の面」でも評価されるような指導プログラムの作成が必要である。｢導入しない理由｣としては､｢指導力に不安がある(60%)｣､「指導者の確保ができない（82%)」といった指導者の問題が挙がっていた。今後､｢外部指導者の確保｣とともに｢教員の指導力｣を高めるために学校武道（空手道）のための研修を受講しやすいように工夫することや研修および教材の質をより高めていくことが課題となる。

※本研究はスポーツ庁の令和 2 年度武道等指導充実・資質向上支援事業委託事業（指導成果の検証）として、麗澤大学が実施した成果をまとめたものです。

P-1

空手道競技「団体形」研究の可能性について

大嶋利佳（法政大学）

【目的】空手道競技種目「団体形」は、国内外の大会で実施されているが武道研究の対象として見落とされている感がある。これをテーマとした論文や研究書を見出すことは難しく、競技種目としての成立過程も十分明らかにされていない。「団体形」は、単に形を複数人で同時に行うだけのものではなく、種目特有の存在意義を持つはずである。空手道における「団体形」の位置付け、成立の歴史的経緯、およびその特徴を明らかにしたい。

【方法】まず、1879 年（明治 12 年）の沖縄県設置から現代に至るまでの空手道史について、特に形の集団演武の創案と発展および徒手体操との関係に注目して検討した。

次に、現代における空手道の実践形式を試合および稽古、また学校教育活動も含めて観察し「組手／形」の２分類から「組手」を「フルコンタクト／防具／寸止め／約束」の４種、「形」を「個人／団体／集団演武」の３種に細分化した。これら７種について比較し「団体形」の特徴を検討した。

【結果および考察】個人間で秘密裏に伝承されてきた琉球武術唐手は、明治期、日清日露戦争に向かう世相の中で、糸洲安恒（1831-1915）によって集団訓練に適するよう改編された。そこには兵式体操の影響がみられる。集団演武は昭和の戦前期にも盛んに行われ、現代の学校教育でも実施されている。その集団化、体操化の流れの中から「団体形」競技は生み出されたと考えられる。

組手と形について７種に分類した上で比較検討すると、組手は対戦競技だがフルコンタクトがもっとも実戦性が高く、当てない、または攻防の仕方を決めておく形式となると、それは戦闘の模倣であり演技性が高くなる。形は敵を想定して武術動作を行うもので、演技的な実践形式である。「団体形」は、その演技性にさらに体操的な要素が加わったものだと言える。

「団体形」競技は、複数名の一致した動きが評価の対象となる。このような競技形式は柔道、剣道など他の武道にはなく空手道の特徴のひとつである。複数名が一糸乱れず武術動作を行うとは、一種の軍事行動だとも考えられる。「団体形」は、本来個人の武術であった琉球唐手が、近現代の集団主義的な社会の中で変貌した、武道として特異な形式であると言えよう。

【結論】空手道の「団体形」は、現代武道の競技種目として特徴的であり、かつ演技的、体操的な要素を併せ持つ多面的な実践形式である。今日、空手道の集団演武は、義務教育の場にも導入されている。集団演武の高度なレベルを目指すものが、内外の大会での「団体形」競技であり「団体形」を研究対象とすることは武道の発展を考える上でも、また空手道の教育的意義を検討するためにも、さまざまな可能性を持つ課題であると言えるだろう。

（参考文献）佐々木浩雄『体操の日本近代　戦時期の集団体操と〈身体の国民化〉』青弓社、2016 年　その他

P-2

剣道経験が人間形成に及ぼす影響（その２）
―剣道非継続者と保護者の質的調査からの検討―

○天野聡（東海大学），笹木春光（東海大学），山本聖樹（東海大学大学院），
松本秀夫（東海大学）

【目的】

前回大会では､幼少より剣道を継続している実践者とその保護者を対象とし、実践者は剣道への満足度が低い時期もあったが、剣道の継続的な実践が社会の秩序や人間関係を構築するために必要な「礼儀作法」､「思いやり」､「主体性」等に影響を及ぼす可能性が示唆されたことを報告した。

今回は剣道を中断した非継続者とその保護者を対象とし、剣道の継続的な実践が人間形成に与えた影響について明らかにすることを目的とした。

【方法】

１．研究協力者：剣道非継続者（幼少から高校まで剣道を継続）3 名（男性１名、女性２名）およびその保護者３名（男性１名、女性２名）。

２．調査方法：半構造化面接による質的調査を実施した。

３．調査内容：面接項目は①剣道経験について（開始時期・場所・動機、活動頻度、他のレジャー・スポーツ活動歴）②人間形成について③感情・満足度について④その他（性別・年齢・家族構成・職業・最終学歴・居住地・出身地・段位）とした。

４．分析方法：剣道開始時からその後の成長過程において、本人と保護者を対比させ、時系列に人格形成の過程と剣道経験を体験から質的に分析した。

【結果および考察】

表１の結果より､人間的成長は非継続者･保護者共に小学生時では礼儀作法、コミュニケーション、中学生時では努力・人間関係、高校生時では思いやり・協調性がみられた。感情・満足度は大会成績によって違いがみられたが、非継続者・保護者共に人間的成長やプロセス、環境などについては満足しており、剣道継続者と比較すると､特に高校生時において満足度が高い傾向がみられた。

現在剣道は中断しているが、剣道のおかげで人間的に成長できたと感じており、継続者と同様に剣道の継続的な実践が社会の秩序や人間関係を構築するために必要な「礼儀作法」､「思いやり」､「コミュニケーション」､「協調性」などに影響を及ぼす可能性が示唆された。

詳細については大会当日に報告する。

表１　人間形成及び感情・満足度について

	人間形成		感情･満足度	
年代	非継続者	保護者	非継続者	保護者
小学生	礼儀･コミュニケーション		やや満足 （稽古厳しい）	満足 （指導者･環境）
中学生	努力･人間関係 思いやり･責任感･精神面	努力･人間関係 礼儀･忍耐力･持続力	満足（結果･目標達成） 満足なし （結果）	満足（結果･環境･プロセス） 満足なし （結果）
高校生	思いやり･協調性 思考力･礼儀･自主性･人間関係	思いやり･協調性 責任感	満足 （結果･環境･指導者）	満足 （結果･人間的成長）

P-3

剣道高段者における剣道の実践と人間形成の関係（その２）

○笹木春光（東海大学），山本聖樹（東海大学大学院），天野聡（東海大学），
松本秀夫（東海大学），

【目的】

前回大会では、多くの剣道実践者が「昇段」を一つの目標に精進し、さらに上を目指すという修行姿勢が特性でもある剣道において、最高段位を取得した八段者が、長期に渡りどのような経験を経て、どのような価値観を持って剣道の実践を行ってきたのか、剣道実践と人間形成の関係について調査した。年齢50～60歳の八段者5名を対象にインタビュー調査を行い、いくつかのカテゴリーを抽出して考察を行ったが、今回の研究ではさらに研究協力者を増やし、また､改めて質的研究の方法にも検討を加えた中で､分析することを目的とした。

【方法】

2020年2月～2021年3月にかけて、個別面接が可能な部屋にて50～60分程度の半構造化面接を行った。研究協力者は、剣道教士八段の男性10名（年齢50～60歳）とし、文章と口頭で研究の趣旨と方法を説明し同意を得た。音声データは対象者の承諾を得た上でICレコーダーに記録し、質問においては、ありのままのエピソードや思い・考えを語ってもらうために配慮した。逐語化されたデータ分析については、SCAT（Step for Coding and Theorization）を用いて行い、研究協力者 10 名より抽出された理論記述からさらにカテゴリーの構築を行った。

【結果および考察】

「重要性」については､「剣道中心の人生」「絶対的な信頼を確信できる剣道」「仕事と人生の一部」といった､『人生の中心的な存在』と捉えていた。このことから、長期に渡る剣道の実践が普遍的・習慣的ではあるが特別な存在である価値観を持っており、重要度が高いと思われる。また､「向上すべき人間力」「八段修得後に発展した価値観」「経験を重ねた事により変化した剣道観」といった、『自己形成との関連』の回答も多くなされていた。「重要性」について他のカテゴリーとして『目標達成に向けた工夫・鍛錬』『身体的・精神的調整』『人間関係における利点』『指導したことによる効果の期待』『恵まれた育成環境』『競技特性的な価値』などが抽出された。

「満足度」については､「自己の能力を超えた結果」「想像以上の満足」「幸福的な剣道との出会い」といった､現在に至るまでの剣道修行が『肯定的な充足』な状況であるとすべての協力者が共通して回答している。「満足度」についての他のカテゴリーとして『剣道の鍛錬による充足』『剣道・稽古以外の経験』『競技特性に対する充足』『コミュニティーの形成』『理想的指導の実践』『関係者の活躍の実感』『意欲的な社会的貢献活動』などが抽出された。

「自己成長」については、「論理的な説明により向上した説得力」「フィードバックの継続指導による進歩」「交剣知愛を重視した指導」といった、『指導的立場における価値観』の回答が多かった。他詳細については当日報告する。

今回も剣道高段者における剣道実践と人間形成の関係についての特徴が明らかとなった。

P-4

剣道実践者の人間形成と Well-being に関する研究
―継続による専門志向化からの分析―

○山本聖樹（東海大学大学院）、笹木春光・天野聡・松本秀夫（東海大学）

【目的】全日本剣道連盟は、剣道の理念を「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である(1975)」とし、剣道による人間形成、人格形成を掲げている。松本ら(2015)は、長期に渡るレジャーの実践による専門志向化が高まることによって、レジャー満足度・主観的幸福感が高まることを明らかにしている。また、レジャー満足度を媒介した幸福感への影響も明らかにしている。このようなスポーツ･レジャー活動の関与の高まりによって Well-being が高まることが考えられる。武道としての剣道は長期に渡る修行により人間形成の実現を目指していることから、剣道の専門志向化によって Well-being に影響を与え、人間形成の醸成と関係していることが予想される。

そこで本研究は、剣道の専門志向化と人間形成の醸成、Well-being、満足感との関係を明らかにすることを目的とした。

【方法】調査対象は、18 歳以上の剣道実践者を対象とした。調査方法は、機縁法による SNS にて調査依頼を行い、SurveyMonkey(オンライン調査システム)を用いて調査を実施した。調査項目は、専門志向化 5 因子 18 項目、剣道に関する人間形成 3 因子 12 項目の計 30 項目、剣道経験、幸福感、満足度等に関する質問をした。分析は、専門志向化・人間形成の項目に対して確認的因子分析(CFA)を実施した。そして剣道による専門志向化が人間形成、幸福感に与える影響について構造方程式モデリング(SEM)による分析を行った。

【結果および考察】調査の結果 728 名が WEB 調査を実施し､完全回答は 600 名、うち有効回答は 598 名(男性 487 名､女性 111 名)であった｡専門志向化 5 因子、人間形成 3 因子へ CFA を行ったところ中心性、技術・知識の 2 項目で因子負荷量が 0.4 未満であったことから除外し再度 CFA を行った。その結果、適合度指標は $\chi 2/df=4.23$、CFI＝0.908、RMSEA＝0.074 であり一部基準値をクリアしていないが許容範囲とした。

専門志向化 5 因子から人間形成 3 因子への影響を見ると、中心性から人間形成に 0.894、0.831、0.815 と強い影響がみられた($p<.05$)。これは剣道が人生の多くに関連していることや、中心的な生活を送る人にとって、剣道が必要不可欠な要因であり、それが人間形成につながっていることが考えられる。また、専門志向化 5 因子と人間形成 3 因子から Well-being への影響は、愛着から Well-being に 0.28（$p<.05$）で有意な影響がみられた。これは剣道が自分にとって日常的に楽しいことや興味深いことであり、その時点での充足として捉えることができる。

【まとめ】本研究は、剣道の長期的な実践による専門志向化が剣道の満足度や人間形成・Well-being に与える影響を検討した。その結果、専門志向化の中心性、愛着が Well-being・人間形成に与える影響が示唆された。これは、剣道の長期に渡る実践が、Well-being の醸成に影響を与え、剣道による人間形成の実現が具現化されていることを示していると考えられる。

P-5

剣道指導における言語コミュニケーションに関する質的研究

○白須鉄也（東海大学大学院），天野聡・笹木春光・松本秀夫（東海大学）

【目的】

スポーツ指導場面における指導者の言語コミュニケーションは、選手の競技力向上や継続に影響を及ぼすことが広く知られている。名取(2007)によると、指導者からの肯定的なフィードバックは選手のやる気が高まることを指摘している。また、上江州ら（2011）は、教師の言葉かけについて、学習者に対する賞賛や助言などの言葉かけを継続的に行うことは、技能成果が運動有能感を高めるのに有効であるとしている。このように剣道の指導場面においても、指導者の言葉かけは選手に様々な影響を与えると考えられるが、剣道指導者の言葉かけに関する研究は見当たらない。

そこで、本研究は指導者と現役選手の立場から、指導者からの言語コミュニケーション（言葉かけ）が選手にどのような影響を与えるかを質的に分析することを目的とした。

【方法】

調査対象は、理論的サンプリングを意識し、自らも選手経験を有し、現在指導を行っている指導者 5 名、現在、現役で活動をしている選手 5 名の計 10 名とした。対象者に対して半構造化インタビュー（30 分程度）を行い、指導者からの言葉かけについて、指導者は、指導者としての立場と自らが選手であった場面での発話を求めた。選手は、指導者からの言葉かけについて発話を求めた。IC レコーダーで録音された音声を文字起しし、得られたテクストデータは、文脈を重視した M-GTA による分析を一部援用し、エクセルを用いて分析ワークシートを作成し、カテゴリー化と具体例による分析を行った。

【結果および考察】

質的分析の結果、「モチベーション」、「指導者と選手の関係性」、「継続」、「主体性」、「メリハリ」などのカテゴリーが抽出された。特に、現役選手の具体的な発話には、「考え方を合わせなきゃいけないところがあった」があり、指導者に考えを受け入れなければならない選手は自発的な思考が止まり、モチベーションの低下に繋がることが推察された。また、選手の呼称について、指導者は、「厳しい言葉を受けたりしても受け取り方などが変わってくるから名前で呼ぶようにしている」という発話があった。一方、選手は「初めて名前で呼ばれた時に認められた感じがした」という発話があり、両立場からの発話を踏まえると、選手のことを名前で呼ぶことで親近感が増し、信頼関係の構築に繋がる場合もあることが示唆された。また、指導における、言語での直接的なコミュニケーションと間接的な「剣道ノート」による非言語コミュニケーションが存在し、重要な役割を担っていることが明らかとなった。

【結論】

指導者の言葉かけは選手に様々な影響を与えていることが示唆された。また、指導者からの言葉かけは、状況によってポジティブな影響やネガティブな影響を与えるため、効果的な指導をするためには、状況にあわせた言語・非言語コミュニケーションを行うことが重要であると考えられる。

P-6

剣道実践者における用具選択に関する研究
～剣道専門雑誌におけるドキュメント分析より～

○鶴見健太(東海大学大学院)、天野聡・笹木春光・松本秀夫(東海大学)

【目的】

これまで、剣道用具に関する研究では、和田(2016)が経済地理学の分野において、ネット通販の拡大によって、剣道用具の低価格化、消耗品化していることを明らかにしているほか、様々な剣道用具の生産・流通に関する研究が行われている。しかし、剣道実践者が剣道用具を選択・購入する際に、どのように用具を評価し、選択・購入しているのかについて関する研究は見当たらない。そして、我々は、昨年の学会大会において、剣道用具の評価観点と評価項目の抽出を行い、5つの評価観点と36個の評価項目を抽出した。

そこで本研究は、剣道専門雑誌における剣道用具の記事を検索し、そのドキュメントの分析から、剣道実践者の剣道用具の評価、選択行動の検討を行うことを目的とした。

【研究方法】

剣道専門雑誌(剣道日本、剣道時代)の2000年1月号から2021年5月号を対象に、掲載されている剣道用具に関する記事の収集を行い、記事の分類を行った。分類した各記事について、エクセルに分析ワークシートを作成し、評価観点・評価項目の具体例を記述し分析を行った。

【結果および考察】

剣道用具の記事では281件の記事を収集した。記事の分類は「①実践者の用具選択」に関する記事 99 件、「②職人・製造者の用具選択」に関する記事 35 件、「③用具の製造・制作」に関する記事43件、「④用具の販売」に関する記事75 件、「⑤用具の知識」に関する記事 9 件、「⑥用具の歴史」に関する記事 11 件、「⑦用具の着装」に関する記事3件、「⑧用具に関する実践者・職人の対談」記事6件の合計8分類に分けられた。

特に実践者の用具選択に関する記事では、99件の記事を抽出した。用具選択についての具体例では「こだわりはなかったが、年齢を機にこだわりをもって防具を購入」、「段審査のタイミングで国産の防具を製作」、「流行を取り入れた」などの具体的例が抽出された。また、安全性に関しては「打突の衝撃から身を守る機能については絶対に疎かにできない」とする具体例や、素材性について「布団ができるだけ柔らかいものを好む」、「柔らかくなった甲手があまり好みではない」などの具体例が挙げられる。これらは、剣道用具の選択を行う際に、視覚、構造、感性、性能、安全の評価観点に基づいて選択していることが推察される。

今回は、剣道専門雑誌に記事としてとりあげられる実績の剣道実践者が対象とされていることから、今後は一般の実践者における評価観点についての検証および、上述したように「流行」を加味した検討は不可欠であり、剣道用具の選択行動と流行を含めた分析が課題となる。

P-7

中津藩中西家古文書における一刀流伝書について
―小野家伝書との比較研究―

○立木幸敏（国際武道大学）、森本邦生（貫汪館）

【目的】一刀流の歴史において小野家四代・忠一から教えを請けた中西忠太子定を初代とする中西派一刀流は、二代・忠蔵子武、三代・忠太子啓、四代・忠兵衛子正と続き、この系からは寺田五郎右衛門宗有、浅利又七郎義信とその弟子千葉周作成政、義信から義明その弟子山岡鉄太郎高歩を輩出している。日本武道大系に掲載されている伝系図によると中西派四代・忠兵衛子正から忠太子受に伝系が伝わっていることになっているが、そもそも中西家の出自については富永堅吾著「剣道五百年史」において中津藩士との記載があるが、生没年なども含めての不明な点が多い。昨年、中津市歴史博物館に中津藩における中西家古文書が公開され、共同研究者が資料の閲覧、収集を行った。

さらにこの資料を基にした書籍[1)]も発表されたことから、中津藩中西家の資料について検討を行った。なお新型コロナウイルス感染症の影響により現地調査が進まなかったため、本報告は途中経過である。

【方法】公開された中津藩中西家古文書は約 59 本の巻物、綴本等がありその中から一刀流関係の資料を精査した。また筆者が当学会で報告している「小野家伝書（春風館文庫）」[（※注）]には、小野家が中西忠太子定へ発給した免状の控えなどが掲載されており、今回発見された中津藩の資料と比較検討を行った。

【結果および考察】池永氏の研究では当該資料の先祖書きなどから初代・中西忠太子定（没年宝暦 11 年、1761 年）、二代・忠蔵子武（没年天明 6 年、1786 年）、三代・忠太子啓（没年享和元年、1801 年）、四代・忠兵衛子正（没年安政 4 年、1857 年または慶応 2 年、1866 年）と特定されつつあり、他の文献とのすり合わせが可能となってきた。

一刀流の基本の免状は「兵法十二ヶ条」「兵法假字書」「兵法目録（以下本目録）」「割目録」である。春風館文庫には小野家４代･忠一からの「本目録」を忠一死去により５代・忠方から享保 12 年（1727）2 月 7 日の日付にて、奥平大膳大夫（奥平昌成）宛、中西忠太宛の控えが掲載されている。奥平昌成は豊前国奥平中津藩初代藩主（従五位下大膳大夫）であり、中西忠太宛の本目録と共に同日に発給されている。さらに春風館文庫では一体の文書とされていること、さらに奥平中津藩から発見された資料から、中西家は奥平家の家臣であったと考えられる。しかし公開された中津藩中西家古文書には当該の資料は今のところ見当たらない。また中西家がどのような家格であったかについてはまだ不明である。

【結論】一刀流の歴史における中西家は富永堅吾著『剣道五百年史』では中津藩士との記載があるが、本研究から中西は奥平家の家臣であり、その後中津藩へ転封とともに中津藩士とされたと考えられる。

小野家の文献である春風館文庫にある小野家４代･忠一から奥平大膳大夫（奥平昌成）宛、中西忠太宛本目録の控えに相当する資料はまだ見つかっていない。

参考文献：１）池永祐一郎著「一刀流中西派 消えた宗家の謎」（2021）

（※注）小野家初代・忠明から九代・忠政（業雄）までの各代の一刀流関係の伝書とその付属文書、さらに先祖書などを集めたもの。

P-8

世界武芸マスターシップ（World Martial Arts Mastership）を検証する

○朴周鳳（駿河台大学）

【目的】「世界武芸マスターシップ」（以下、マスターシップ）は、武芸のオリンピック大会を標榜した武芸の国際大会である。これまで一部の種目を除いて、地域的・文化的に限定されていた世界中の武芸種目が共有される場を設けている。大会は全２回（2016・2019）韓国で開催された。競技種目は２回目の大会において GAISF 加盟の９種目、アジア大会の３種目、伝統武芸の６種目、その他記録と演武種目が決まった。参加人数は 107 ヵ国の 2969 名の選手が参加をした。マスターシップの始まりは、1990 年代後半、韓国の地方自治体の中で起こった地域祭りづくりブームから誕生した「伝統武術祭」であった。最初は国内の武芸団体のみが参加したが、後に国際的展開を目指して「世界武術祭」となり、そこから国際競技としてのマスターシップの構想が始まった。そこで本研究では、韓国の主導で行われるマスターシップを例に武芸の国際化過程について創造と適応の側面から検討し、その過程で見られる武芸の発展可能性や問題点についての知見を得ることを目的とする。

【方法】本研究では、主に大会関連資料を用いた。①まず「世界武芸マスターシップ委員会」が発行した大会報告書（忠州世界武芸マスターシップ白書 2016・2019 版）をもとに大会全体を概要と性格を把握し、②新聞記事などのマスコミ資料との比較検討を行った。そして、③大会関係者にもインタビュー調査を行った。

【結果および考察】①武芸のオリンピックを標榜する大会として、大会エンブレム、マスコット、スローガン、メダル（金・銀・銅）、聖火など現在のオリンピク大会の構成要素を取り入れた。
②東洋的思想観を表すものとして、大会理念を「三才（天・地・人）」とした。
③国際社会への公的地位の獲得：韓国を中心として結成された「世界武術連盟」（World Martial Arts Union）が UNESCO の諮問 NGO となり、身体文化（武芸）部門の公信力ある団体の地位を獲得、「世界武芸マスターシップ委員会」（WMC）の GAISF 加入と WADA の競技大会組織として加入。
④外交力のある人事の登用
⑤韓国国内における批判の声

【結論】マスターシップは、これまでローカル文化として扱われた諸国の武芸を国際舞台に導き、総合的な武芸競技大会とした武芸の新たなイベントの形を実現したことに意義がある。しかし、こうした外的成長に対して、内的には大会運用の未熟や興行の低調が指摘され、さらに大会の予算をめぐっては自治体からの厳しい声もあがった。また武芸というものの本質を考えて、武芸の競技化にはより慎重に接近する必要もあると考えられる。

P-9

柔道競技にける歯牙損傷について

○塚田真希（東海大学），中西英敏（東海大学），宮崎誠司（東海大学），
大川康隆（東海大学）

【目的】本研究では接触頻度が高い柔道において、競技場面での歯牙損傷について実態を調査し明らかにすることを目的とした。

【方法】対象者は大学柔道選手 365 名（男子 164 名、女子 201 名）とした。学年別では、男子選手が、1 年生 55 名、 2 年生 37 名、 3 年生 42 名、 4 年生 30 名で女子選手が、 1 年生 55 名、 2 年生 54 名、 3 年生 51 名、 4 年生 41 名であった。階級別では、 60kg 級 15 名、 66kg 級 22 名、 73kg 級 28 名、 81kg 級 22 名、 90kg 級 35 名、 100kg 級 22 名、 100kg 超級 20 名、 48kg 級 26 名、52kg 級 41 名、 57kg 級 40 名、 63kg 級 36 名、 70kg 級 29 名、 78kg 級 21 名、78kg 超級 8 名であった。対象者には、競技場面において歯牙損傷の経験の有無とその時期、損傷時の場面、負傷した箇所とその原因についてアンケート調査を行った。

【結果および考察】柔道の競技場面において歯牙損傷の経験の有無について全体の 10%が有りと回答した。損傷した時期については、男子選手が中学時と大学時が最も多く、女子選手が高校時の負傷と回答した。負傷場面については、練習時の負傷が全体の 68%であった。負傷した箇所については、前歯が上顎、下顎どちらとも全体の 78%を占めており最も多い結果であった。女子選手については前歯に次いで犬歯の損傷が多い回答であった。欠損状況については、一部欠損が 66%で完全欠損が 18%であった。原因については、立技の際、相手の頭部が当たり負傷した場合が最も多く、次いで組手の攻防で相手の手が顔面にあたり負傷した場合が多い結果となった。

負傷した箇所は前歯損傷が多く欠損状況については一部欠損が最も多いことから、直接、歯にあたり損傷していることが推察される。損傷した原因について立技で相手の頭部との接触が最も多かったことから、担ぎ技を受ける際に接触し負傷したと考えられる。

【結論】柔道の競技場面で起こる歯牙損傷の多くは前歯を損傷する場合が多く、その原因としては相手の頭部との接触や組手の攻防によるものが多いことがわかった。

P-10

柔道の大外刈りにおける体重差が受けの頭部角加速度に与える影響

○石川美久（大阪教育大学），穴田賢二（石川工業高等専門学校），
生田秀和（大阪体育大学），林　弘典（びわこ成蹊スポーツ大学）

【目的】本研究の目的は，柔道の大外刈りにおける体重差が投げられる人の頭部に生じる角加速度を明らかにし，頭部外傷リスクを検証することとした．

【方法】被験者は，男子大学柔道選手 12 名（年齢 20.3±0.7 歳，身長 170.3±5.5 cm，体重 78.5±13.0kg，柔道経験年数 11.6±2.9 年，段位 2.2±0.6 段（初段から二段））とした．被験者を投げる人は男子大学柔道選手重量級 1 名（年齢 20 歳，身長 180.0cm，体重 105.0kg，柔道経験 14 年，二段）とした．実験は，被験者が 3 軸角速度センサ（MVP-RF8-GC，MicroStone 社製）の付いたヘッドギアを装着し，大外刈りで投げられた際の頭部角速度を測定した．得られたデータを時間微分して角加速度を求めた．体重差の影響を比較するために，投げられる人の体重を軽量級 4 名（60kg 級，66kg 級），中量級 4 名（73 kg 級，81kg 級），重量級 4 名（90kg 級，100kg 級）に分類した．次に 3 つの分類における前額軸まわりの頭部最大角加速度に対して分散分析を行った．その結果，有意な差が認められた場合，Tukey-Kramer 法による多重比較検定を行った（有意水準 5%未満）．本研究は大阪教育大学倫理委員会の承認を得て行われた（受付番号 470）．

【結果および考察】頭部最大角加速度について，重量級が中量級を投げた値は，重量級が重量級を投げた値よりも有意に高く，重量級が軽量級を投げた値よりも有意に高い傾向を示した（図 1）．本研究では，体重が軽くなるにしたがって頭部最大角加速度が高くなると想定していた．しかし，投げられる人の体重が軽いほど頭部最大角加速度が高くならないことが明らかとなった．この原因は，投げる人と投げられる人の体重差が大きい場合，相手を投げにくくなるからであると考える．このことは，投げる人には，投げやすい体重が存在することを意味している．本研究では，投げる人（重量級）よりも少し体重の軽い人（中量級）を投げることが頭部外傷の発生リスクを上昇させているといえる．

【結論】大学柔道選手において，投げる人と投げられる人の体重差が大きくなればなるほど頭部外傷のリスクが高くなるとは限らないことが示唆された．また，投げる人は自身よりも少し体重の軽い者を投げた場合，頭部外傷のリスクが高くなることが明らかとなった．なお，本研究は，科学研究費（若手研究：19K19946）の助成を受けたものである．

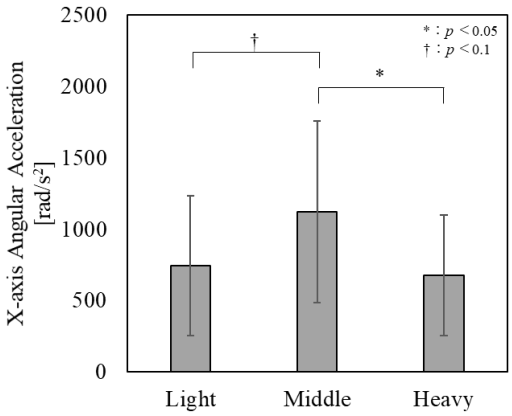


図1　頭部最大角加速度の比較

一般 P-1 ~ P-23

P-11

視覚障害者柔道に関する試合分析
―競技力向上を目的として―

下山智大（広島大学大学院），濵口和人（広島大学大学院），出口達也（広島大学）

【目的】谷岡ら（2020）は，競技成績を求める競技でデータ分析が，盛んに行われていると述べている．辻原（1988）は，柔道においても試合分析が，必要であると述べており，VTRを用いた試合分析が盛んに行われている．試合分析を行うことにより，変化する試合内容を詳細にとらえ，柔道においても競技力向上に大きな役割を果たしていると考えられる．しかしこれらは，健常者柔道を対象としたものであり，視覚障害者柔道においてはあまり行われていない．よって本研究では，視覚障害者柔道を対象に試合分析を行い，競技力向上の一助とすることを目的とする．

【方法】対象とする試合は，2020 年度講道館杯柔道体重別選手権大会 60・66 kg（37 試合），2018・2019 年度全日本視覚障害者柔道大会 60・66 kg（28 試合）とする．分析項目は①施技②引手の位置③防御動作を集計し，健常者柔道と視覚障害者柔道，視覚障害者柔道大会の上位者（優勝・準優勝）と下位者（3 位以下）で比較を行った．それぞれを χ^2検定を行い，有意な差が見られた項目のみ残差分析を行った．

【結果及び考察】全施技において，健常者柔道と視覚障害者柔道を比較したところ，「足技」は健常者柔道において，「真捨身技」は視覚障害者柔道でそれぞれ有意に多かった（表 1）．視覚障害者柔道では，投げられないように腰を引き合う場面が多くみられるため，その体勢から「真捨身技」に入りやすいと考えられる．防御動作における健常者柔道と視覚障害者柔道の比較では，「防御に失敗」に有意差が見られた（表 2）．視覚は，情報収集において大きな役割を果たす（田中ら，2008）ことや，視覚障害者は立位バランスが悪い（森本，2007）ことが示唆されていることから，視覚障害者柔道では技に対する反応が遅れ投げられるのではないかと考えられる．本研究において，視覚障害者柔道は，健常者柔道と比べ「真捨身技」を多く使うことや，「防御に失敗」することが多いといった特徴が明らかになった．よって，視覚障害者柔道で使われている技を把握し，それらの技に対する適切な防御動作を指導していくことが競技力向上のために必要であると考えられる．

表 1：全施技における健常者柔道と視覚障害者柔道の比較

	健常者		視覚障害者		合計
	施技数(%)		施技数(%)		施技数(%)
手技	238(31.2)		100(31.6)		338(31.3)
真捨身技	69(9.0)	**	65(20.6)	**	134(12.4)
腰技	62(8.1)		22(7.0)		84(7.8)
足技	394(51.6)	**	129(40.8)	**	523(48.5)
合計	763(100)		316(100)		1079(100)

† p<.10 *p<.05 **p<.01

表 2：防御動作における健常者柔道と視覚障害者柔道の比較

	健常者		視覚障害者		合計
	施技数(%)		施技数(%)		施技数(%)
防御反応なし	427(56.0)		177(56.0)		604(56.0)
防御反応あり	268(35.1)		98(31.0)		366(33.9)
返し技	36(4.7)		15(4.7)		51(4.7)
防御に失敗	32(4.2)	**	26(8.2)	**	58(5.4)
合計	763(100)		316(100)		1079(100)

† p<.10 *p<.05 **p<.01

P-12

柔道競技におけるスコア獲得に有効な投技の戦術行動

○三宅　恵介（中京大学・順天堂大学大学院），
竹澤　稔裕（順天堂大学大学院），伊藤　潔（富士大学），
佐藤伸一郎（拓殖大学），廣瀬　伸良（順天堂大学大学院）

【目的】本研究は，記述的ゲームパフォーマンス分析を用いて，投技の種類と取と受の組み手，連絡変化の有無の観点から，柔道競技におけるスコア獲得に有効な投技の戦術行動を明らかにすることを目的とした．

【方法】Paris Grand Slam 2020 と Dusseldorf Grand Slam 2020, Tel Aviv Grand Prix 2020 の-60kg 級と-81kg 級，+100kg 級（Franchini et al., 2014）の 441 試合を分析対象とした．Judo-base-IJF で公開された試合映像から，全ての投技施技の①投技の種類（手技 16 本，腰技 10 本，足技 21 本，真捨身技 5 本，横捨身技 16 本），②取と受の組み手（両手–両手，両手–片手，両手–握っていない，片手–両手，片手–片手，片手–握っていない），③連絡変化の有無（連絡技，変化技，連絡変化なし）を分析し，スコアの有無に関連する投技の戦術行動とスコア獲得に影響を及ぼす戦術行動の組み合わせについて階級別で検討した．Hughes et al.（2001；2002）と小柳ほか（2020）を参考に，分析データの検者内信頼性と検者間信頼性を測定し，各項目の誤差率が 5%以内であることを確認した．

【結果および考察】-60kg 級はスコアの有無と投技の種類（χ^2=15.940，df=4），連絡変化の有無（χ^2 = 37.827，df = 2）との間に，-81kg 級はスコアの有無と投技の種類（χ^2 = 31.841，df = 4），連絡変化の有無（χ^2 = 36.166，df = 2）との間に，+100kg 級はスコアの有無と連絡変化の有無（χ^2 = 12.170，df = 2）との間に有意な関係が認められた．いずれの階級においてもスコアの有無と投技の種類と連絡変化の組み合わせとの間には有意な関係が認められ（-60kg 級：χ^2 = 67.139，df = 14，-81kg 級：χ^2 = 71.860，df = 14，+100kg 級：χ^2 = 22.943，df = 14），スコア有の変化技と手技の組み合わせが有意に多かった．これらの結果は，スコア獲得に有効な投技の戦術行動が変化技であること，その中でも手技との組み合わせが最も有効であることを示唆する．手技に分類される隅落と変化技の組み合わせは，いずれの階級においてもスコア比率が最も高く（-60kg 級：8.5%，-81kg 級：8.0%，+100kg 級：11.7%），スコア獲得率は 30%以上であった．リオ五輪以前の国際大会では，スコア獲得技の上位に隅落を確認できない（中村，2002；石川，2009）．菅波（2000）は，技術は時代の推移とルールの改正に伴って流行がみられ，対策が練られた結果廃れて次なる新しい技が求められてきたと述べている．一流選手が施技する変化技の隅落は，現況でのルール改正や流行する投技，スコア比率の高い背負投や内股への対応を繰り返しながら効力を高めた実践的で高度な戦術行動として捉えることができる．

【結論】相手の投技の施技中もしくは施技後に変化技を施すこと，その際に相手の体側が畳に着くようにコントロールする隅落を組み合わせることが，現時点での柔道競技におけるスコア獲得に有効な戦術行動であることが示唆された．

P-13

全柔連強化選手の世界選手権出場者に関するUK分析　1）
～適性論から見た人柄型と精神健康度について

○横山喬之（摂南大学）内村直也（大阪産業大学）保井智香子（立命館大学）斎藤正俊（神戸親和女子大学）石川美久（大阪教育大学）松本裕之（大阪市立都島工業高校）野坂栄一（日本UK法・人間理解研究会）船越正康（大阪教育大学名誉教授）東山明子（大阪商業大学）

【目的】

一般的に技術が上達する条件としては、その種目が必要とする身体適性がある、優れたコーチの指導が受けられる、快適な生活環境下におかれていることなどが挙げられ、さらにこれに加えて、その種目が必要とする精神適性というものが参与してくると言われている。スポーツ適性は、①身体的条件と②練習の条件を勘案した上で③精神的条件を考える。そのとき競技レベルが最高水準に達すれば競技者にとって①②は不問となり、残る③精神的条件の比重が大きくなる。本研究では、男子がミュンヘン・女子がソウルオリンピック以降のメンタルサポートに援用された全柔連強化選手のUK曲線を用いて、世界選手権出場者に限定して精神的特徴を明らかにする。

【方法】

対象者の抽出：世界選手権出場者の抽出として、オリンピック出場かつ世界選手権出場の選手は除外し、オリンピック不出場で世界選手権出場選手を「世界選手権出場者」として抽出した。抽出した結果、男子43人、女子36人、合計79人を対象者とした。

分析項目:人柄12類型と類似人柄4群の出現率および5健康度水準のクロス分析を行なった。出現率の2×3あるいは2×2のχ^2-検定と臨界比CRを求め，有意水準を5%水準以下とした。

【結果および考察】

世界選手権出場者全体の人柄型は、8型47.8%、3-1d型20.3%とこの2つの人柄型を合わせて合計66.8%であった。男女においても、両型の占める割合が同順で高く、これまで報告されている柔道強化選手の特徴と同様の傾向を本集団でも確認することができた。男子金メダリストの中には、9型の自己顕示型も含まれていることが特徴として挙げられ、8・9型を包含した個性派Ⅳ群が好成績を収めていることが伺えた。

健康度について、全体では、高度29.1%、中上度53.2%、合計82.3%であり、高健康度優位の法則にあるように世界選手権出場者は高健康度の集団であることが明らかとなった。性別で見ると、男子は高度23.3%、中上度58.1%であるのに対して、女子は、高度36.1%、中上度47.2%であり、女子の方が高健康度集団であった。男女のメダリスト別で見ると、高度の集団は、男子より女子の方が高い割合であることが明らかとなった。

なお、本研究はJSPS科研費（17K01706）の助成を受けたものである。

P-14

全柔連強化選手の世界選手権出場者に関するUK分析 2）
～曲線理論から見た作業量段階と曲線傾向について

○齋藤正俊（神戸親和女子大学）内村直也（大阪産業大学）保井智香子（立命館大学）石川美久（大阪教育大学）横山喬之（摂南大学）山本雅亨（大阪大谷大学）船越正康（大阪教育大学名誉教授）東山明子（大阪商業大学）

【目的】

本研究では、男子がミュンヘン・女子がソウルオリンピック以降のメンタルサポートに援用された全柔連強化選手のUK曲線を用いて、世界選手権出場者に限定して曲線理論から見る作業量段階と曲線傾向を明らかにする。UK法第1系列における作業量段階と曲線傾向は、人柄類型と精神健康度判定の中で勘案されるのが一般的である。しかしスポーツ選手の曲線は一般成人では低評価を受け、興奮現象を伴う上昇曲線が競技遂行にプラスに働くことが明らかになってきた。とくに全柔連指定強化選手のメンタルサポートを通じて、下降曲線が勝ちきれない事例と併せて例証されてきた小研究がある。本研究では人柄×健康度判定から独立して、コンデショニングの1指標である作業量段階とともに検証する。

【方法】

対象者の抽出：世界選手権出場者の抽出として、オリンピック出場かつ世界選手権出場の選手は除外し、オリンピック不出場で世界選手権出場選手を「世界選手権出場者」として抽出した。抽出した結果、男子43人、女子36人、合計79人を対象者とした。

分析項目:人柄12類型と類似人柄4群の出現率および5健康度水準のクロス分析を行なった。出現率の2×3あるいは2×2のχ^2-検定と臨界比CRを求め，有意水準を5%水準以下とした。

【結果および考察】

作業量段階について、全体ではA段階45.6%＞Ⓐ段階43.1%＞B段階8.1%＞C段階1.3%という順位付けであった。Ⓐ・A段階が占める割合が88.7%であり、本結果はハイレベルな大会への出場選手群が高心的エネルギーを備えるという優位性を明らかにしていると言える。男女を見ても作業量段階の順位に差はないが、男子ではC段階での優勝者が存在している。高心的エネルギーであることが優位と言われる中で、C段階で優勝をしているということについては、一考の余地がある。

曲線傾向については、全体として上昇50.6%＞平坦29.1%＞下降20.3%であった。男女のメダリスト別で見ると、男子においては、どの色のメダリスト群であっても、順位は上昇＞平坦＞下降である。しかし、女子では、金メダリスト上昇＞平坦＝下降、銀メダリスト下降＞上昇＝平坦、銅メダリスト下降＝平坦＞上昇となり、競技成績と曲線傾向は比例するという結果となった。女子は競技成績と曲線傾向に相関関係があることが示唆された。

なお、本研究はJSPS科研費（17K01706）の助成を受けたものである。

P-15

大学男子柔道選手を対象とした血流制限下における 4方向ジャンプトレーニング効果の検討

○大川康隆（東海大学），塚田真希（東海大学），石橋剛士（熊本学園大学），小澤雄二（鹿屋体育大学），宮崎誠司（東海大学）

【目的】

柔道の立技において、自分から技をかけたり、相手の技を受ける際に、片足になる場面が多くみられる。柔道には、このような場面があることから、片脚支持姿勢による動作は優れたパフォーマンスを行う上で重要な課題である。片脚支持姿勢の代表的なトレーニングとして４方向ジャンプがあげられる。

柔道における近年の研究として、有賀ら(2005,2007)では、柔道競技において、片脚でバランスを取りながら体重を支持する局面が多くみられることから、実験として片足４方向ジャンプを実施しており、反復横跳びの測定値との間には、有意な正の相関があることを報告している。

そこで本研究では、柔道選手を対象とし、血流制限下における４方向ジャンプトレーニングの効果をジャンプの回数と体組成の変化から検討することを目的とする。また、俊敏性に影響を与えるトレーニングを、血流制限下で実施した場合の影響を明らかにする

【方法】

２本の十字に重なったラインを片足で素早く４方向にジャンプしラインを跨ぐ動作を行う。実験前後の４方向ジャンプ回数の測定では 20 秒間で何回跳ぶことができるのか測定を行う。この場合は、加圧群もベルトの装着は行わない。最初の回数測定後は、１セット 20 秒の４方向ジャンプを 10 秒のインターバルを挟みながら５セット繰り返すことをトレーニングとし、３週間継続して実施する。このトレーニングの際には、加圧群は加圧ベルトを大腿部に装着しトレーニングを実施する。体組成の測定に当たっては、実験の前後に inBody を用いて、体重、骨格筋量、部位別筋量の測定を行った。

【結果および考察】

実験前後の体組成において、加圧群、比較群ともに、有意な差は見られなかった。

実験前後の４方向ジャンプ回数において、加圧群、比較群ともに有意な差が見られた。また、実験前後の４方向ジャンプの増加回数においては、加圧群が有意に増加した回数が多いことが分かった。

【結論】

全身の骨格筋量、下肢の骨格筋量等、体組成に有意な変化がないにもかかわらず、４方向ジャンプの回数に有意な差が認められることから、血流制限下における４方向ジャンプには俊敏性にも影響を与える可能性が示唆された。

P-16

回転ボックスジャンプトレーニングが大学柔道選手における内股の動作時間に及ぼす影響

○濵口和人（広島大学大学院），下山智大（広島大学大学院），
小澤雄二（鹿屋体育大学），出口達也（広島大学），前田明（鹿屋体育大学）

【目的】

本研究では，柔道の内股のパフォーマンス向上を目的とした，回転ボックスジャンプトレーニングが，大学柔道選手における内股の動作時間に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。

【方法】

被験者は，大学柔道部員 18 名を回転ボックスジャンプ群（RBJ 群）6 名，ボックスジャンプ群（BJ 群）6 名，コントロール群（CON 群）6 名に区分した。畳の上にプライオボックス（NISHI 社製）を置き，RBJ 群，BJ 群は，それぞれのトレーニングを 10 回×3 セット行った。トレーニングは，週 3 日，4 週間，計 12 回実施した。トレーニングの前後に内股動作をハイスピードカメラ（HX-5, nac 社製，撮影速度：500fps）にて撮影した。同時にフォースプレート（テック技販社製）にて鉛直方向の床反力を測定した。その他，リバウンドジャンプの測定，及びトレーニングに関する内省報告を得た。

【結果および考察】

「崩し」の局面から「作り」の局面までの局面間の動作時間の変化においては，各群とトレーニング前後をそれぞれ因子として，二元配置分散分析を行った結果，有意な差はみられなかった。しかし，効果量に着目すると BJ 群と CON 群は，ともに効果量は小さかったが，RBJ 群は Δ=-0.7 であり，効果量は中であった。

トレーニング前後でのリバウンドジャンプにおける RJ index の変化においては，各群とトレーニング前後をそれぞれ因子として，二元配置分散分析を行った結果，交互作用の有意性は認められなかったものの，主効果の有意差は認められた。多重比較検定を行った結果，BJ 群と CON 群には，有意な差がみられなかったのに対し，RBJ 群は，Pre に比べ Post 時の RJ index の値が有意に向上した（$P < 0.001$）。

RBJ トレーニングを行うことによって，脚の腱，筋機能が改善され，より合理的な体さばきが習得でき，かつ素早いパワー産出が可能になったと考えられる。その結果，「崩し」の次の局面である，受を投げる直前の「作り」の局面に移行する時間が短縮され，素早く技を施すことが可能となるのではないかと考えられた。

【結論】

回転ボックスジャンプトレーニングは，大学柔道選手の SSC の能力を向上させ，内股の動作時間を短縮させる可能性が考えられた。

P-17

腕立伏臥腕屈伸運動のトレーニング強度に関する研究
－開脚時と閉脚時の上半身にかかる負荷からの検討－

○大木雅人（皇學館大学）　松田悠佑（皇學館大学）　三宅恵介（中京大学）
横山喬之（摂南大学）　佐藤武尊（皇學館大学）

【目的】本研究は，腕立伏臥腕屈伸運動（以下，腕立て伏せ）時における，肘が伸展及び屈曲した姿勢で，足を左右に開閉脚した際の度合いによって変化する，上半身に対しての負荷の違いを明らかにすることを目的とした。

【方法】被験者は，大学柔道選手 54 名（男子 49 名の体重：81.4±14.3kg，女子５名の体重：80.1±21.3kg）とした。腕立て伏せを行う際の上半身にかかる負荷を計測するために，ヤマトデジタル体重計 DP-7900PW（以下，体重計）を用いた。また，体重計に接地している手掌と足の接地している部分の高さを合わせるために木製の台を用いた。腕立て伏せの方法において，肘が伸展した際に尺骨茎状突起と上腕骨頭が直線になり，その直線が体重計に対して垂直で，肩から踵まで一直線になる姿勢になること。肘を屈曲した際は，顎が体重計に触れる直前の体勢を保ち，肩から踵まで一直線になる姿勢であることと規定した。本研究の測定項目は,肘が伸展及び屈曲した姿勢における閉脚時と肩幅時，開脚時に分類し，各腕立て伏せ時における，体重に対して上半身にかかる負荷の割合を比較，検討した。体重に対して上半身にかかる負荷率の平均値を算出した。統計処理は，一元配置分散分析を用いて，有意差が認められた場合には多重比較を行った。なお，有意水準は危険率５％未満（P＜0.05）とした。

【結果および考察】肘を伸展した姿勢での閉脚時と肩幅時，開脚時において，すべての項目間に有意差（P＜0.05）が認められた。次に，肘を屈曲した姿勢での閉脚時と肩幅時，開脚時において，閉脚時と開脚時，肩幅時と開脚時の項目間に有意差（P＜0.05）が認められた。しかし，閉脚時と肩幅時の項目間には有意差が認められなかった。これらのことから，腕立て伏せにおける肘が伸展した姿勢では閉脚時，肘を屈曲した姿勢では閉脚時と肩幅時が最も上半身に負荷がかかると言える。よって，腕立て伏せを行う際に，閉脚時が最も上半身に負荷がかかり，トレーニング効果が高くなるということが考えられる。

表１　腕立て伏せにおける肘の伸展及び屈曲した姿勢での各項目間の負荷率

		度数	平均値（%）	最大値（%）	最小値（%）
肘を伸展した姿勢	閉脚時	54	69	74	64
	肩幅時	54	68	75	59
	開脚時	54	65	73	58
肘を屈曲した姿勢	閉脚時	54	76	79	68
	肩幅時	54	76	80	68
	開脚時	54	74	78	67

＊(P<0.05)

P-18

小学生から大学生までの男子柔道選手における除脂肪量指数ならびに脂肪量指数と体重の関係

○藤田英二（鹿屋体育大学），野口博之（福岡県柔道協会），松崎守利（下関市立大学），小澤雄二（鹿屋体育大学），中村勇（鹿屋体育大学），小崎亮輔（鹿屋体育大学），穴井隆将（天理大学），木戸清考（帝京大学），志々目由理江（宮崎大学），安河内春彦（九州産業大学）

【目的】近年，子供の体格は大きくなっているにもかかわらず，体力や運動能力が低下してきたと指摘されている。柔道をしている子供達も例外ではなく，一般の児童と比べても体格は大きいことに加え，過度の肥満が目立つようになってきている。健康面ならびに競技選手の育成という観点からも過度の肥満を予防することは重要である。そこで本研究では，小学生から大学生までの男子柔道選手における除脂肪量指数ならびに脂肪量指数を調査し，それらと体重との関係について報告する。

【方法】対象は，県代表レベル相当の小・中・高校生ならびに体育系大学で柔道部に所属している男子柔道選手 1,284 名（小学生 449 名，中学生 336 名，高校生 71 名，大学生 428 名）とした。身長，体重・体脂肪率の測定から，除脂肪量（fat free mass: FFM）と脂肪量（fat mass: FM）を算出し，得られた値（Kg）を身長（m）の二乗で除し，除脂肪量指数（fat free mass index: FFMI）ならびに脂肪量指数（fat mass index: FMI）を求めた（表）。そして FFMI と FMI それぞれと体重を散布図にて示し，それらの関係を検討した。

【結果および考察】ほとんどの高校生と大学生における FFMI ならびに FMI と体重の関係は，ほぼひとつの直線上に分布していた。小学生ならびに中学生では，体重との関係でみた場合に明らかに FFMI が少なく，また FMI が大きい選手が存在した。このことは，小学生ならびに中学生では体重に見合った除脂肪量を備えておらず，また脂肪量が過多である，換言すれば過度の肥満の選手が多く存在していることを示している。

【結論】一定の競技レベル以上においても小中学生の柔道選手では，柔道の競技力を体格の大きさに頼っている選手が多く，その後体重が過多である選手は淘汰されてきている可能性が示唆された。

表．身体的特徴と除脂肪量，除脂肪量指数，脂肪量ならびに脂肪量指数

	年齢（歳）	身長（cm）	体重（kg）	体脂肪率（%）	FFM(kg)	FFMI	FM(kg)	FMI
全体（n = 1,284）	15.5 (3.8)	162.6 (11.3)	71.0 (21.3)	27.0 (13.9)	50.7 (15.6)	18.8 (3.8)	20.3 (14.8)	7.6 (5.4)
大学生（n = 428）	20.5 (1.0)	172.0 (5.9)	83.4 (17.5)	18.3 (5.0)	67.3 (10.1)	22.7 (2.5)	16.1 (7.8)	5.4 (2.4)
高校生（ n = 71）	16.9 (0.8)	170.6 (7.2)	85.5 (21.4)	25.9 (8.4)	62.3 (11.9)	21.3 (2.9)	23.2 (12.6)	7.9 (3.9)
中学生（n = 336）	14.1 (0.6)	164.2 (6.8)	71.3 (18.6)	33.1 (14.4)	45.2 (5.7)	16.8 (1.6)	26.0 (19.0)	9.4 (6.4)
小学生（n = 449）	11.7 (0.6)	151.2 (8.2)	56.7 (17.0)	30.9 (15.8)	37.1 (7.8)	16.1 (2.4)	19.6 (15.3)	8.3 (6.1)

平均値（標準偏差），FFM：除脂肪量，FFMI：除脂肪量指数，FM：脂肪量，FMI：脂肪量指数

P-19

中学校保健体育科「剣道」授業において「剣道形」導入の可能性について
～主体的・対話的な学び,安全教育を意識して～

○太田順康（大阪教育大学），　金森昭憲（豊中市立庄内小学校）
由留木俊之（岸和田市立山直中学校），石川美久（大阪教育大学）

【目的】

これまで我々は,中学校武道授業の円滑な導入及び「安全教育」の教材開発に向けて,小学校体育科での武道的な対人運動教材を開発してきた.また中学生への効果的な武道授業や安全意識の形成に向けて,「型」の考え方を取り入れた授業つくりを目指した調査の結果を報告した.それによれば剣道授業経験を有する中学生に未体験の「形」動画を視聴させたところ,剣道に対するイメージがよくなり,「形」剣道は好き,面白そうであるとの回答もあった.また「形」が生徒に伝統を感じさせていることなども読み取れた.さらにサンプル特性による影響は否定できないが,安全教育の経験は武道への興味関心に影響を与えることも示唆された.中学校学習指導要領解説にも「基本動作や基本となる技を習得する学習においては,「形」の取扱いを工夫することも効果的である.」とあり,「形」をどのように取扱うのかは武道授業を考える上でも検討を要する.

そこで本研究では,中学校で「剣道形」を取り入れた授業実践例を報告するとともに,授業時に実施した授業評価を基に,中学生はどのように「剣道形」を捉えられていたか,特に学習指導要領改訂に伴う「主体的・対話的な学び」や「安全教育」の視点から,その結果について報告する.

【研究方法】

中学１年生対象にした剣道授業で独自作成の「剣道形」を実施し,毎授業後に回収した生徒による評価の分析を通して,「剣道形」の取扱い方を検討する.

授業期間： 2020 年 10 月 17 日～2020 年 12 月 15 日
対象：OK 大学附属Ｉ中学校　第１学年 A・B・C・D 組 144 名
授業者：外部指導員,授業担当,学生による TT
授業内容：剣道　10 時間
（導入,基本動作,剣道形,剣道具着装した剣道）
評価方法：独自評価用紙を授業終了時に配布回収した.
調査内容：形成的授業評価および自由記述による評価
分析方法：IBM　SPSS　Statistics27 による統計処理および KH コーダーによるテキストマイニング分析を行った.

【結果および考察】

中学生は「剣道形」を肯定的に捉え受け入れていた.
結果の詳細については,発表会時に報告する.

本研究は日本学術振興科学研究補助金（基盤研究（C）課題番号＊18K02619 太田順康）の助成を受けたものである.

P-20

攻防に関する知識の構造化とその活用を図る中学校第２学年の剣道授業の評価分析：攻撃づくりシートの分析を通して

○山田弥香（福岡教育大学大学院），本多壮太郎（福岡教育大学）

【目的】本研究は中学校第２学年を対象に，学習者が攻防でのスキづくりに関する知識を構造化させ，その知識を活用しながら思考し，自分たちの攻撃づくりに取り組む授業の有効性について明らかにすることを目的とした。また，得られた結果より今後の授業改善のあり方についても検討することとした。

【方法】F 中学校第２学年３クラス 121 名（男子 60 名，女子 61 名）の生徒を対象とし,2020 年 11 月から 12 月にかけて８時間で構成される授業を実施した。第１学年での二段の技と交代型の攻防を経て第２学年では引き技（引き胴）と一体型の攻防を取り入れた。スキづくりに関する知識については，授業者が生徒への発問やヒントになる資料の提示を通して，中段の構えとつばぜり合いからの攻撃に共通するスキづくりの気付きを促したり，生徒が考案した個別のスキづくりの例を共通するいくつかのまとまりへと整理，統合させたりして構造化を図っていった。構造化された知識の活用については，この知識を基にしてさらなる具体的なスキづくりの考案や実際の攻防での試行につなげていくようにした。第６，７，８時間目に生徒が記述した「攻撃づくりシート」の内容を分析対象とし，授業の展開と記述内容の変容に着目しながら分析，検討した。

【結果および考察】剣道経験者や欠席者，見学した生徒を除いた 91 名を分析対象者とした。第１学年での授業で学習した中段の構えからの「フェイントをかける」,「打撃する」,「フェイントと打撃を組み合わせる」といったスキづくりは，つばぜり合いでも有効であることを気付かせたり，攻防や対抗試合を通して考案した攻撃方法の具体例を「一本への攻撃の道筋」として構造化させ，それを基にさらなる攻撃づくりに取り組ませる授業を展開した結果，全ての対象者が自分たちのオリジナルの攻撃方法を考案することができていた。また,「相手の技を防御して打つ」や「相手を誘って打つ」といった相手の攻撃に対応したり，相手の攻撃を誘ったりする攻撃の具体的内容が７時間目と８時間目に見られるようになった。これは研究者らや授業者も想定していなかった回答であったが,今後の知識の構造化を図る授業に含めていけるのものだと考えられた。

【結論】第１学年での二段の技と交代型の攻防を経て，第２学年での引き技（引き胴）の学習と一体型の攻防でのスキづくりに関する知識の構造化とその活用につなげていく授業を展開した結果，全ての対象者がオリジナルで具体的な攻撃方法が考案できていた。このことより，中段の構えとつばぜり合いからの攻撃に共通するスキづくりや,「一本への攻撃の道筋」についての知識の構造化とその知識の活用を図る授業展開は,学習者の攻防に関する知識や思考力を育み,実際の攻防や対抗試合での試行につなげていく上で有効であったと考えられる。

P-21

コロナ渦における中高生の剣道に対する意識

○山神眞一，宮本賢作，井上　恒（香川大学）

【目的】令和 2 年から現在まで、世界中に甚大な被害をもたらしている新型コロナウイルス感染症は、ワクチン接種が始まったものの、感染状況は決して好転しているとは言えない。
日本における状況も同様であり、剣道実践に関しても様々な制限がかけられ、令和 2 年度は、主たる剣道大会は中止され、令和 3 年度に入っても中高生の部活動については、現在も十分な活動はできていない現状にある。本研究では、新型コロナウイルス感染拡大を背景に剣道の稽古が出来なくなる前と稽古再開された後の剣道に対する中高生の意識の変化を考察することにより、今後の剣道実践の在り方を探ることを目的とした。
【方法】高松市内の中学生男女 84 名及び高校生男女 98 名を対象に、質問紙法によるアンケート調査を令和 2 年 11 月に行った。尚、剣道部顧問 19 名についても併せて調査した。調査項目は、中高生用 16 項目、顧問用 18 項目とし、5 段階の評定尺度の 5 択から 1 つ選択させた。
【結果および考察】(1) コロナ感染による稽古再開前後の中高生全体の意識として、16 項目中 11 項目に有意な差が認められた。その項目は、「剣道をやっていない人に、剣道の良さを伝えたい。」「剣道で学んだことは、これからも生活に役立つ。」「基本練習が好きだ。」「試合練習は好きだ。」「剣道が好きだ。」「練習前になると嫌になる。」「剣道をしていると、とても楽しい。」「大学まで剣道を続けたい。」「剣道に対するイメージは良い。」そして、最も大きな有意差がみられたのが、「自分にとって剣道は、なくてはならない存在である。」と「剣道を行えることに感謝することが大切だ。」の 2 項目だった。コロナ渦によって、剣道と少し離れ、自分には剣道とはどういう意味があるのか、剣道を行う上で楽しかった事に気づくこととなり、剣道を再開することによって、その意識がより明確になったものと思われる。この傾向は、中高生全体にみられた。(2) 中高生の剣道部顧問については、稽古再開前後で有意な差が認められたのは、「練習前になると嫌になる。」の 1 項目のみであった。すなわち、コロナ渦で部活動ができなかったことによって、生徒と共に早く稽古がしたいという意識がより高まったものと思われる。
【結論】(1) コロナ渦による稽古再開前後の中高生の意識の変化として、剣道が当たり前にできていたことへの気づきや自分にとっての剣道に対する意識を再確認するような項目に有意な差が認められた。(2) コロナ渦による稽古再開前後の中高生の剣道に対する意識の違いに性別や学年の差はほとんどみられなかった。(3) 剣道部顧問は、稽古再開前後において、剣道に取り組む姿勢がより積極的になるという意識の変化がみられたが、その他の項目に大きな変化はなく、高い水準の意識を保持していた。(4) 稽古再開前後における意識において、前向きな変化を示したのは、剣道部顧問よりも中高生が有意に顕著であった。(5) コロナ渦における剣道実践に対する感染予防対策を踏まえた剣道関係団体・学校の支援に対する感謝の気持ちが中高生と剣道部顧問ともに強く感じていることが明らかになった。

P-22

小学校低学年を対象とした柔道遊びの教材開発

○與儀幸朝（鹿児島大学），松井高光（帝京科学大学），久保田浩史（東京学芸大学），木村昌彦（横浜国立大学）

【目的】

学習指導要領（2018）の内容の取扱いでは，カリキュラムマネジメントを実現する観点から，小学校から高等学校までの 12 年間を見通して，各種運動の基礎を培う時期，多くの領域の運動を経験する時期，運動やスポーツに多様な形で関わる時期といった発達段階を踏まえて，校種間の接続及び見通しを重視して系統的に指導内容が示されている．しかし武道領域においては，他の運動領域とは異なり小学校から中学校への系統的なカリキュラムが編成されていない．そこで本研究では，小学校低学年を対象とした体つくり運動領域「多様な動きをつくる運動遊び」において，柔道遊びの教材を開発し，その効果について検証することを目的とした．

【方法】

１．調査対象と時期

本研究における対象は，鹿児島県内の小学校（１校）に協力を依頼し，第２学年 35 名（男子 18 名，女子 17 名）の児童を対象とした．時期は 2021 年 2 月に全 6 時間の単元計画で行った．

２．調査内容

単元前後の変容を検討するため，筒井ら（2014）が組ずもうの教育的効果を検討する際に用いた質問（自分の体への気づき，体の変化への気づき，力の調整，友だちの体への気づき，友だちの気持ちへの気づき）を参考に著者らと授業を実践する教員で話し合いを重ねたうえで，低学年の児童が理解しやすいように言葉の意味など分かりやすく修正を加えた全 7 項目の質問を作成した．また，毎時間の変容を検討するために高橋（2003）の形成的授業評価も実施した．

３．柔道遊びの教材

本研究では，中学校学習指導要領（2018）に示されている基本動作につながる動きを念頭に「雑巾ウォーク」や「ゴロゴロマーカータッチ」などの運動を多様な動きをつくる運動遊びと関連づけて教材開発を行った．

【結果】

単元前後に実施した全 7 項目の調査では，「自分の体への気づき」，「体の変化への気づき」，「力の調整」，「友だちの体への気づき」，「友だちの気持ちへの気づき」，「体力が高まる」，の 6 項目で単元後に得点が有意に高まることが認められた．また形成的授業評価では，単元が進むにつれて「成果」，「学び方」，「協力」の３因子の得点が向上し，単元の前半（2 時間）と後半（2 時間）の比較では，後半に因子得点が有意に高まることが認められた．

【結論】

中学校で学習する柔道の基本動作につながる動きを念頭において，小学校低学年の児童を対象とした柔道遊びの運動教材を開発し，その効果について検証を行った結果，本研究で開発した教材の有用性が示唆された．今後は中学年，高学年を対象とした教材を開発し，その有用性について多角的に検証していく．

P-23

精力善用・自他共栄評価尺度の作成に関する研究

○石橋剛士（熊本学園大学），小澤雄二（熊本大学），大川康隆（東海大学）

【目的】

近年、柔道における重大事故についての多くは部活動時に発生しているが、授業中に事故が発生していることも事実である。これは、体格・技術差等を考慮せず、強引に技を仕掛けたことにより発生していることが指摘されており、柔道の創始者である嘉納治五郎が掲げた「自他共栄」を意図する他者への思いやりや融和協調の欠如は否めない。一方、柔道は、精力善用・自他共栄の精神を基本理念とし、相手を敬い、尊重する態度を重んじているもの、伝統的な行動・考え方を学習するような教育特性を包括した尺度はほぼ皆無に等しい。そこで本研究では、柔道の授業を通じて学んだことが評価できる精力善用・自他共栄評価尺度の作成を行う上で、尺度開発に向けた項目作成および精選することを目的とした。

【方法】

1．調査協力者および調査時期：調査協力者は、K 県内における全日本柔道連盟における公認資格指導者を取得している指導歴 5 年以上の男性教員 18 名（年齢：44.2±9.3 歳、指導歴：18±9.9 年、A 指導員：5 名、B 指導員：9 名、C 指導員：4 名）であった。なお調査協力者の競技レベルは、県大会出場レベルから国際大会出場レベルまでと多岐にわたっており、2020 年 10 月中に実施された。

2．調査内容：調査協力者には、「精力善用・自他共栄の精神を生徒または子どもたちにどのように指導されていますか、理由も含めてお答えください。」という教示文が冒頭に記載された自由記述式の調査票を用いて回答を求めた。また併せて論文や文献等から、精力善用・自他共栄の精神に関わるキーワードを収集した。

3．項目内容：収集した項目は、KJ 法を用いて行い、内容的妥当性については、柔道において指導歴のある段位 6 段以上の男性教員 3 名（年齢：54.7±13.3 歳、指導歴：31±16.4 年、A 指導員：3 名）の判断で項目の収集・選定を行った。各項目への回答は、「1：行わない（0～10%）～5：いつも行う（90～100%）」の 5 件法で求めた。

【結果および考察】

各項目について、意味の重複や項目内容が類似していないかという点に配慮し、スポーツ心理学を専門とする大学院教授 1 名と柔道を専門とする大学教員 1 名が先述と同様の手続きによって内容的妥当性および確認作業を経て精選した。最終的に 35 項目が精力善用・自他共栄評価尺度にて使用する項目として選定された。

ご存知ですか！

全日本剣道連盟が推奨するルールを礎に、

安全用具を推進。

賠償責任保険対象商品

「シール」は「ルール」

▌SSPシール

1年間に100万本の竹刀に貼付

SSP Q1 000001
全日本武道具協同組合
←竹刀規格はQRコードから！ 全日本剣道連盟公認規格に基づいています

Shinai（竹刀）Safety（安全）Promotion（推進）

▌安全顎

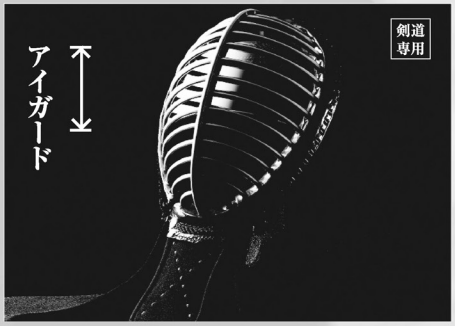
突きから喉を守る

特許第5438204号

- 頸動脈突入防止
- 外見の変化なし
- どの防具にも適応

▌アイガード

竹刀などの破片から目をガード！



アイガード
幼児用、少年用、中型大人用、一般大人用、特大用をご用意。
適正サイズの物をお選びください。

「安全対策の一つとして、初心者の剣道防具面には、必ず備わっていることを推し進めています。」

▌フェイスシールド

相手からの飛沫飛散の防止に！

フェイスシールド（一体型）
幼児用、少年用、中型大人用、一般大人用、特大用をご用意。
適正サイズの物をお選びください。

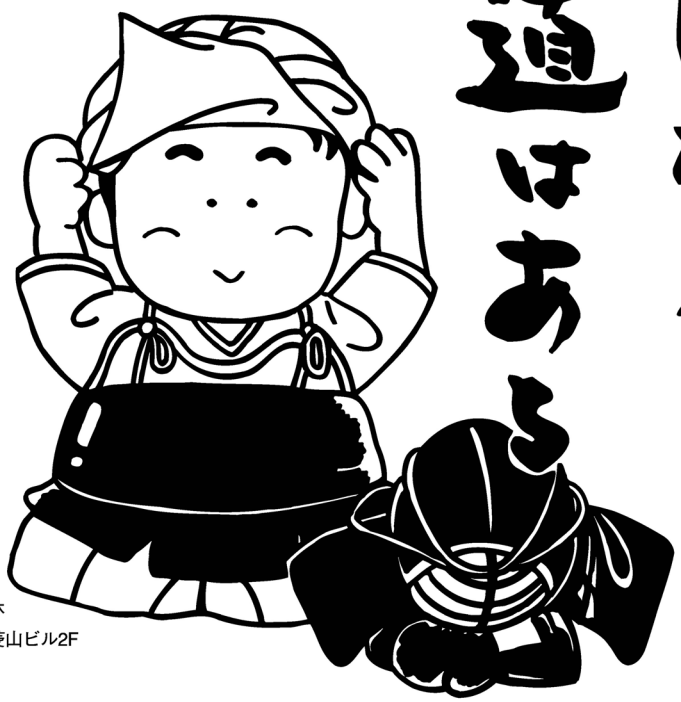
「対人稽古再開に向けた感染拡大予防ガイドライン」に対応してフェイスシールド（一体型）を製作し、シールドの着用を推進しています。

全日本武道具協同組合

zenbukyo.jp/

KENBU-DO
人と武道の明日を考える

しかり、道はあり



株式会社 建武堂
営業時間 AM10:00～PM7:00
（日曜・祭日はPM6:00まで）毎週月曜定休
〒170-0013 東京都豊島区東池袋1-15-1 菱山ビル2F
TEL 03-3971-4840（代） FAX 03-3971-4461
URL:http://www.kenbu-do.co.jp/
e-mail:information@kenbu-do.co.jp

剣道場床建築工房

https://kendoujou.com
English Site https://architecture-dojo.com
Mail Address info@kendoujou.com

当社が施工する剣道場の床は、材料支給から施工・技術指導まで一貫してご提供いたします。

当社は環境保全のためにも国産無垢材を１００％使用した弾性床構造の剣道場床を推奨させていただいております。
体育館などのウレタン塗装とは違って温かみがあり、適度にクッションの効いた安全性の高い剣道場の床をご提案いたします。

株式会社 五感　東京都江東区新木場 1-6-13 木のくに屋ビル 4F　Tel:03-3522-4169（受付時間 9:00 ～ 18:00 ※水曜定休）
建設業許可：東京都知事 許可（般 -29）第 147244 号

武道具総合メーカー・全日本武道具協同組合
株式会社 三 恵
http://www.zen-sankei.co.jp/

本社・工場 / 長崎県諫早市久山町
2014-72
TEL/0957-44-7113 FAX/0957-44-7118

三恵 剣道 検索

新設計で息スムーズ理想のマスク！

激しい稽古でも！
●呼吸に特化した口元立体形状。
●メッシュ構造で高い通気性。
●洗って使える速乾性。

「感染拡大予防ガイドラインのマスク」応需

剣道専用。

剣道面マスク Kiwami
《極》

●呼吸しやすい立体設計
●パワーネットメッシュ構造により、蒸れにくく抜群の通気性を誇ります。
（フィルター装着時: 不織布マスクの 10.8 倍の通気性 / 計測値）
●吸汗性・速乾性・防活性 洗濯耐久性に非常に優れた素材です。
●鼻出しを容易にする加工縫製構造の快適設計です。

不織布マスク の 10.8 倍の通気性
（フィルター装着時の計測値）
【試験方法 JIS 1096A 法通気性テストによる】

立体
フィルター
2 枚入り

株式会社 松興堂
渋谷ショールーム
東京都渋谷区道玄坂2-17-3
TEL.03-3463-0471
http://www.shokodo.com/

安心の
日本製

価格：2,200 円（税込） カラー:（黒）/サイズ:フリーサイズ

尚武

尚武堂産業株式会社

〒113-0033
東京都文京区本郷1丁目4-6(水道橋後楽園前)
☎03-3815-0411

交通
地下鉄丸の内線 後楽園駅
都営三田線 水道橋駅
JR 水道橋駅

営業時間
月～土／AM11:00～PM7:00
日・祝／AM11:00～PM6:00
定休日／水曜日

武道具の総合メーカー

株式会社 ヒロヤ

〒672-8048 姫路市飾磨区三宅2丁目26番地

TEL　079-234-2220
FAX　079-234-3300

森 武道具 株式会社

東京都中央区日本橋小伝馬町 6-12　電話：03-3661-0469
営業時間：9時-19時（土曜17時）　定休日：日曜日・祝祭日

お気軽にお問い合わせください。ショッピングサイトはコチラ→

（五十音順）

日本武道学会賛助会員

・全日本武道具協同組合

（以下、五十音順）

・株式会社　建武堂

・株式会社　五感

・株式会社　三恵

・株式会社　松興堂

・尚武堂産業株式会社

・株式会社　ヒロヤ

・森武道具株式会社

第54回大会のオンライン開催にあたって

理事長　長尾　進

会員の皆様にはコロナ禍にあっても、ご清栄にご活躍と存じます。大変お待たせいたしましたが、日本武道学会第54回大会の発表抄録集（プログラム）をお送りいたします。

本大会は当初、九州支部の設立を記念して、福岡大学に主管大学になっていただき開催の予定でした。しかし、その後も打ち続く新型コロナ感染拡大状況のなかで、今年度もオンラインでの開催とせざるを得なかったことは、苦渋の決断でありました。

ただし、オンライン開催も2回目となりノウハウは蓄積されてきつつあり、その面では学会運営上のメリットもあります。オンライン開催は昨年度と同様、発表資料・動画等を開催期間中特設サイトにて公開し、質疑応答日を2日間設けることとしました。ライブ配信や、対面・オンライン併用も模索しましたが、学会の現況を踏まえ無理なく事故なく開催することを第一義としての判断です。

会長挨拶および企画紹介にもありますように、本部企画講演（録画）は、本学会会員でありWKF（世界空手連盟）事務総長であられる奈藏稔久先生にお願いしました。この夏のオリンピック東京大会ではじめて採用された空手道について、その実現に至る歴史的背景・意義や空手道国際普及に伴う課題等について、お話しいただく予定です。ぜひご覧ください。

また専門分科会企画も、柔道、空手道・弓道（合同）、剣道、なぎなた、障害者武道の各専門分科会が、制約のあるなかで大変タイムリーかつ興味深いトピックの企画を予定しています。こちらも、多くの会員のご参加を期待します。

末筆ながら、コロナ渦の長引く苦境にもかかわらず、本抄録集への広告掲出を賜りました賛助会員の皆様に、心より感謝を申し上げます。

令和3年8月25日　印刷
令和3年8月27日　発行

発行所　日本武道学会

発行者　大保木輝雄

〒359-1192　埼玉県所沢市三ヶ島2-579-15
早稲田大学スポーツ科学学術院　射手矢研究室内
電話/FAX：04-2947-6752
E-mail：budogaku@xj8.so-net.ne.jp
振替東京　１０２３２６
印刷所　創文印刷工業株式会社
東京都荒川区西尾久7-12-16
電話：03-3893-0111

日本武道学会54回大会本部事務局

〒359-1192　埼玉県所沢市三ヶ島2-579-15
早稲田大学スポーツ科学学術院　射手矢研究室内
TEL & FAX：04-2947-6752　E-mail：budogaku@xj8.so-net.ne.jp

大会委員長　長尾　進
大会委員
射手矢岬　松尾牧則　春日井淳夫　酒井利信
小山勝弘　齋藤　実